

令和二年度 学位請求論文

ファンタジー映画におけるジェンダー・人種・階級表象
— 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』を中心に—

日本大学大学院芸術学研究科

博士後期課程芸術専攻

河 慧柱

凡例

1. 映画作品や書籍などのタイトルは、二重鍵カッコ (『 』) を用いて表記した。なお、以下の映画作品のタイトルや登場人物名に関しては、略語を記すことを原則とした。

『ハリー・ポッター』シリーズ(小説)：小説『ハリー・ポッター』

- 第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』(1997年)：小説『賢者の石』
- 第2巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(1998年)：小説『秘密の部屋』
- 第3巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(1999年)：小説『アズカバンの囚人』
- 第4巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2000年)：小説『炎のゴブレット』
- 第5巻『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(2003年)：小説『不死鳥の騎士団』
- 第6巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(2005年)：小説『謎のプリンス』
- 第7巻『ハリー・ポッターと死の秘宝』(2007年)：小説『死の秘宝』

『ハリー・ポッター』シリーズ(映画)：映画『ハリー・ポッター』

- 『ハリー・ポッターと賢者の石』(2001年)：映画『賢者の石』
- 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(2002年)：映画『秘密の部屋』
- 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(2004年)：映画『アズカバンの囚人』
- 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2005年)：映画『炎のゴブレット』
- 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(2007年)：映画『不死鳥の騎士団』
- 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(2009年)：映画『謎のプリンス』
- 『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART1』(2010年)：映画『死の秘宝 PART1』
- 『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART2』(2011年)：映画『死の秘宝 PART2』

『ハリー・ポッター』シリーズ (映画と小説) の二つを指す時 :
『ハリー・ポッター』

『指輪物語』三部作 : 『指輪物語』

第1部 『旅の仲間』 (1992年) : 小説『旅の仲間』

第2部 『二つの塔』 (1992年) : 小説『二つの塔』

第3部 『王の帰還』 (1992年) : 小説『王の帰還』

『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズ(映画) : 映画『ロード・オブ・ザ・
リング』

『ロード・オブ・ザ・リング/旅の仲間』 (2001年) : 映画『旅の仲間』

『ロード・オブ・ザ・リング/二つの塔』 (2002年) : 映画『二つの塔』

『ロード・オブ・ザ・リング/王の帰還』 (2003年) : 映画『王の帰還』

小説『指輪物語』と映画『ロード・オブ・ザ・リング』の二つを指す時 :
『ロード・オブ・ザ・リング』

『ホビット』シリーズ(映画) : 『ホビット』

『ホビット思いがけない冒険』 (2012年) : 映画『ホビット思いがけない冒
険』

『ホビット竜に奪われた王国』 (2013年) : 映画『ホビット竜に奪われた王
国』

『ホビット決戦のゆくえ』 (2014年) : 映画『ホビット決戦のゆくえ』

登場人物

ハリー・ポッター: ハリー

ロン・ウィーズリー: ロン

ハーマイオニー・グレンジャー: ハーマイオニー

ネビル・ロングボトム: ネビル

ドラコ・マルフォイ: ドラコ

2. 本文中では、著者名（出版年）の順に表記し、論文名、編者名、書名、出版地、出版者、引用箇所のパージは脚注で記した。

目次

凡例	i
目次	iv
表目次	vii
図目次	viii
序論	1
1. 研究の背景と目的	1
2. 研究方法と論文の構成	5
第一章 理論的背景と先行研究	9
第一節 ファンタジー映画	9
1. ファンタジーの定義と類型	9
2. ファンタジー文学と映画	12
3. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』	14
第二節 先行研究	19
1. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における ジェンダー研究	19
2. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における 人種研究	22
3. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における 階級研究	26
4. 本研究の位置付け	28
第二章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における ジェンダー表象	30
第一節 初めに	30
第二節 『ハリー・ポッター』におけるジェンダー表象	34
1. 少女たちのジェンダー・アイデンティティ	34
2. 女性と母性愛	42

3. 男性たちのジェンダー・アイデンティティ	46
第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー表象	53
1. 『指輪物語』での女性キャラクター	53
2. 『ロード・オブ・ザ・リング』での女性キャラクターのジェンダー・ アイデンティティ	59
3. アラゴルン、フロド、サムのジェンダー・アイデンティティ	66
第四節 終わりに	71
第三章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における 人種表象	75
第一節 初めに	75
第二節 『ハリー・ポッター』における人種表象	81
1. マグルと純血の魔法使い	81
2. ヒトたる存在についての偏見と差別	83
3. 人種多様化と非白人の周辺化	88
第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』における人種表象	94
1. 「中つ国」の地域と人種差別	94
2. 肌色と人種階層化	99
3. 人種間の友情と愛	108
第四節 終わりに	111
第四章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における 階級表象	115
第一節 初めに	115
第二節 『ハリー・ポッター』における階級表象	119
1. マグル社会と魔法社会	119
2. 魔法使い間の階級対立と差別	121
3. 純血主義の魔法使いによる非魔法使い差別	125
第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』における階級表象	129
1. 権力、階級と王権	129

2. 特権階級のない社会	135
3. 曖昧化する階級境界	138
第四節 終わりに	141
結論	145
参考資料	152
参考文献	153

表目次

<表 3-1> 映画『ハリー・ポッター』における登場キャラクターの数

<表 3-2> 『ロード・オブ・ザ・リング』における登場キャラクターの数

<表 4-1> 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における
人種とヒトたる存在

<表 4-2> 映画『ハリー・ポッター』における主要キャラクター

<表 4-3> 『ロード・オブ・ザ・リング』における主要キャラクター

図目次

- <図 1-1> 研究内容、分析ツールと研究方法
- <図 2-1> Maria Nikolajeva によるファンタジー世界の区分
- <図 2-2> Nikki Gamble によるファンタジー世界の区分
- <図 3-1> ハーマイオニー
- <図 3-2> ハーマイオニー(2)
- <図 3-3> SF 映画での強力な 10 代の女性主人公
- <図 3-4> キングス・クロスのプラットフォームでのハリーとジニーの家族
- <図 3-5> モリー・ウィズリー
- <図 3-6> モリーとベラトリックス
- <図 3-7> マルフォイ家族
- <図 3-8> アンブリッジと彼女のオフィス・ルーム
- <図 3-9> 映画『ハリー・ポッター』の中、ハリーの姿
- <図 3-10> ダーズリー家でのハリー
- <図 3-11> ホグワーツ特急列車でのロン
- <図 3-12> ロベリア
- <図 3-13> ナズグールの魔王と戦うエオウィン
- <図 3-14> 『The Lord of the Rings』(1978) と 『The Return of The King』(1980)
- <図 3-15> モルグルの剣に刺され瀕死のフロドを助けるアルウェン
- <図 3-16> 戴冠式でのアルウェンとアラゴルン
- <図 3-17> サムの結婚式で、花嫁のブーケを受け取るピピン
- <図 3-18> キリス・ウンゴルで、フロドを抱いているサム
- <図 3-19> 目さめたフロドと、フロドを見つめるサム
- <図 4-1> 自ら辞退する人狼のルピン教授
- <図 4-2> パチル (Patil) の姉妹とチョウ・チャン
- <図 4-3> ダンスパーティでの衣装
- <図 4-4> アルダ全図
- <図 4-5> ホビット庄の風景と子供たち
- <図 4-6> 裂け谷とファンゴルン

- <図 4-7> モルドールとアイゼンガルド
- <図 4-8> 燃えるホビット庄と奴隷にされたホビット族
- <図 4-9> ガラドリエルとアルウェン
- <図 4-10> 白馬に乗ったアルウェンと黒馬に乗った黒の乗り手
- <図 4-11> ヴァイキング時代のヘルメットとロヒアリム(エオメル)
- <図 4-12> ハラドリムの歩兵とアフガニスタンのタリバン
- <図 4-13> ハラドリムのオリファントとカルタゴ軍の戦象
- <図 4-14> 東夷
- <図 4-15> ウルク=ハイとマオリ族
- <図 4-16> 様々な肌色のオーク
- <図 5-1> 『ハリー・ポッター』における階級構造と主要キャラクター
- <図 5-2> 魔法世界における人種と階級の関係
- <図 5-3> プリベット通り四番地とダーズリー家
- <図 5-4> 魔法省のエントランスハールの塑像
- <図 5-5> マルフォイ家の邸宅(Malfoy Manor)
- <図 5-6> ウィーズリー家の隠れ穴 (Burrow)
- <図 5-7> マルフォイとクィディッチ
- <図 5-8> ドビーを足で蹴るルシウス
- <図 5-9> 解放されたドビー
- <図 5-10> ホグワーツでの食事
- <図 5-11> ハグリッドが作った誕生日ケーキ
- <図 5-12> サムとロージーの家族
- <図 5-13> 一緒にお酒を飲むローハンの王と民
- <図 5-14> ゴンドールの王座とデネソール二世
- <図 5-15> アンドゥリル (Andúril)
- <図 5-16> 映画『エクスカリバー』
- <図 5-17> アラゴルンの戴冠式
- <図 5-18> のどかなホビット庄の風景
- <図 5-19> ビルボの誕生日パーティー
- <図 5-20> フロドを背負って、運命の山を登るサム
- <図 5-21> 酒を飲むプロド、サム、メアリーとピピン

〈図 5-22〉 映画『ホビット』におけるドワーフ族の衣装

序論

1. 研究の背景と目的

現代社会には、職業差別、性差別、人種差別、階級差別、障害者差別、地域差別などさまざまな差別や偏見がある。それらに共通するのは、人間の違いを認めず、特定の集団や属性に属する個人の差や違いを排除の論理に使うことである。しかしながらこれらの差別問題は、もともと根源的な人間の本能ではなく、それら人間が属する社会システムの歪みに起因するものであり、人間の努力次第で予防または解決できると言える。

例えば、トランプ米大統領は2016年の大統領選から「人種差別」と解釈されかねない発言を繰り返していた。非白人の女性議員に「国に帰った方がいい」と促したのに続き、2019年7月には著名な公民権活動家に対して「白人や警官を憎んでいる」と非難した¹。

トランプ大統領は、このような人種とジェンダー差別発言で多くの有色人種の女性たちから非難を受けている²。しかし、Implicit Association Test (IAT)³の調査結果によると、多くの人たちが「潜在的な偏見」と呼ばれるものを持っているという。特に、自分のことを人種差別主義者やジェンダー差別主義者だと思っていない人も、自分も知らないうちに有色人種や女性に固定観念を持っているとみることができる⁴。

差別は映画産業内でも発生している。最近の南カリフォルニア大学の Annenberg Inclusion Initiative⁵によると、2018年の興行トップ100の人気映画に登場する女性キャラクターの割合は33.1%、性的少数者(LGBTQ)の割合は、1.3%にとどまってい

¹ こうした大統領の非難は、黒人のイライジャ・カミングス下院議員や公民権活動家のアル・シャープトン牧師が、自分を人種差別者として非難したことに対する攻撃的な言動である。

日本経済新聞、「トランプ氏「人種差別」発言止まらず白人票に固執」、2019年7月30日
(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO47955620Q9A730C1FF8000>, 2021年1月25日閲覧)

² 2020年1月の米世論調査(米紙ワシントン・ポストと世論調査企業イプソスの共同実施)によれば、アフリカ系(黒人)米国人の80%以上がトランプ米大統領は人種差別主義者とみなし、米国の人種差別問題を一層悪化させたと判断している。

CNN、「黒人の8割、トランプ氏は「人種差別主義者」米世論調査」、2020年1月19日
(<https://www.cnn.co.jp/usa/35148181.html>, 2021年1月25日閲覧)

³ Implicit Association Test(潜在的連想テスト)は、今まで測定できなかった無意識的な態度の測定を可能にする新しい技法である(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)。

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L., Measuring individual difference in implicit cognition: The Implicit Association Test, *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1998, pp.1464-1480.

⁴ Project Implicit (<https://implicit.harvard.edu>, 2021年1月25日閲覧)

⁵ 2008年に設立された南カリフォルニア大学の Annenberg Inclusion Initiative は、映画産業におけるジェンダー、民族性や身体障害に関するレポートを公表し、映画評論、音楽、TV やデジタルコンテンツなどを研究するシンクタンクである。

る⁶。このように、女性は過小代表されており、性的少数者はほとんど透明人間のような扱いを受けていると言って過言ではない。

人種においても映画の中の差別はいっこうになくなっていないことが分かる。2015年基準で73.7%の登場人物が白人であり、黒人は12.2%、ラテン系は3.9%、アジア系は3.9%であった。中東とインディアン、アラスカ原住民、ハワイ・太平洋の先住民が占める割合は1%以下であった。

興業トップ100本の映画の中で黒人が主演または共演をした映画は9本、ラテン系の場合は1本であった。アジア系俳優が主演の映画は一つもなかった。黒人やアフリカ系アメリカ人の登場人物がいる映画は17本にとどまった。40本の映画でヒスパニック系の登場人物はなく、アジア系の登場人物は49本で見られなかった。

これらの映画の中のジェンダーと人種などに対する偏見と差別は、上記調査期間の量的問題だけの問題ではない。ジェンダー問題の場合には、『007』(James Bond) シリーズ、『ダイ・ハード』(Die Hard) シリーズ、『ミッション：インポッシブル』(Mission: Impossible) シリーズなどに見られるように、映画の中での女性はずねに補助的であり、従属的な役割を与えられてきた。

映画の中の人種に対する偏見と差別も、ジェンダーの問題と同じように存在していることが分かる。映画の中の架空の人種間でも、ヒエラルキーが存在する。例えば、James Cameron 監督の『アバター』(Avatar, 2009) は、主人公の白人が他の種族のナヴィ族を救う白人優越主義、英雄主義を連想させるし、『スター・ウォーズ』(Star Wars) シリーズでのブロンドの髪と青い目を持つルーク・スカイウォーカーは素晴らしく英雄的なすべてを代表するのに対し、ダース・ベイダーは悪人で黒人を描写している。また、『攻殻機動隊：ゴースト・イン・ザシェル』(Ghost in the Shell, 2017) などは有色人の役割に白人をキャストする「ホワイトウォッシュ (White washing)」が問題となっている。

映画の中の階級問題も深刻である。例えば、男女間の階級を超えたロマンチックな愛が主題である『タイタニック』(Titanic, 1997) は、富裕層とそうでない層の差別を示し、『華麗なるギャツビー』(The Great Gatsby, 2013) は上流階級の資本家たちが社会の下層階級を破滅させるストーリーである。Garry Marshall 監督の『プリティ・

⁶ Smith, Stacy L., Marc Choueiti, Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel Choi., Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018, Annenberg Inclusion Initiative, 2019, 2021年1月25日閲覧)

ウーマン』(Pretty Woman、1990)は、下層階級の女性が上流階級の男に会って身分上昇する現代版シンデレラストーリーである。

映画は、社会的な産物であり、同時に社会は映画を通じて再現されている。映画は、その時代を反映しているため、表出された社会的な姿を読み取ることができる。かつて第7芸術と命名された映画は、大衆文化の中心に立った文化商品であり、一般大衆に強い影響力を行使する。

人間は映画を通して様々な経験と知識を得ており、映画は個人の思想や価値観の形成にも影響を与えることもある。しかし、映画の中に、その映画を作った人々が持っているイデオロギーが意識的であれ無意識的であれ注入されることになる。特定の状況を表現 (representation) しながらイデオロギーを注入することができ、場面を作りながらミゼンセーン (mise en scene) の中で復元することもでき、モンタージュ (montage) を通して明示的にイデオロギーを表現することもできる。このため、映画は必ずしも物事を正確に伝えているとは限らない。つまり、偏った価値観やステレオタイプを植え付けてしまう危険性を有しているのだ。

『E. T. 』(E. T. The Extra-Terrestrial、1982)と『ジュラシック・パーク』(Jurassic Park、1993)のSteven Spielberg監督が、自分で製作した映画は、すべての子どもたちのために作ったと述べているように⁷、多くの映画は大人たちのものではない。特にファンタジー映画は子どもたちの想像力を促進させ、夢や希望を与えると言われる。

Nancy Gibbsは「タイム」(Time Magazine)の寄稿を通じて『ハリー・ポッター』は、青少年に「文化と商業、政治、道徳について自ら洞察させて、人間の食欲が自分自身はもちろん、社会にどのように深刻な問題となっているか認識させてくれる」と評価する⁸。しかし、『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』に否定的な批評も多い。特に、『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』の中に現れるジェンダーと人種、階級描写については、批判的な評価をする研究者も複数いる。例えば、『ハリー・ポッター』は、ジェンダーの観点から男性キャラクターが勇気を持ってストーリーを主導する一方、女性キャラクターはせいぜい補助者 (helpers) に過ぎないと批判されており、人種の面では純血の魔法使いが混血とマグル⁹出身の魔法使いと

⁷ Žižek, S., *The Plague of Fantasies*. London: Verso, 1997, 96.

⁸ Gibbs, Nancy. Runners-Up: J. K. Rowling, Time Magazine, December 19, 2007.

(http://content.time.com/time/specials/2007/personoftheyear/article/0,28804,1690753_1695388_1695436,00.html, 2021年1月25日閲覧)

⁹ 魔法能力のない普通の人間

接する態度が、イギリス人が有色人種に接する文化と似ていると評価されることもある。そして、階級の面では、金と権力による二分法的思考と現代社会の階級問題が魔法世界の中の葛藤と対立を通じてそのまま再現されていると批判されている。

『ロード・オブ・ザ・リング』も『ハリー・ポッター』と同様の批判を受ける。つまり、ジェンダーの側面では、女性キャラクターが受動的でステレオタイプの役割だけを遂行していると批判を受けている。人種の面では、作品の中に登場する良い人は白人、悪い人は黒人に近い描写をし、人種差別主義が深く根付いていると指摘する。

また、階級の面では、「中つ国」の社会構造は、強力な中央権力と富によって区分されている、と指摘している。しかし、以上のような『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダーと人種、階級に対する批判は、原作を中心に行われており、映画を対象とする研究は、まだ少ないのが実情である。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、小説を映画化したものである。小説を映画化した事例は、これらの作品以外にも数え切れないほど多い。小説を映画化する場合には、原作に忠実に再現されることもあるが、監督が原作を再解釈して、ストーリーやキャラクターの役割などが新たに再現される場合もある。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』も小説を映画化し、多数のシーンとキャラクターの役割が縮小または強化された。このため、ジェンダーと人種、階級の面で再現方法も変わっている。

本論文は、このような問題点を基にして、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』でのジェンダー、人種、階級がどのように映像的に描かれているのか、また原作とはどう違うのかを明らかにし、本来、ファンタジー映画のあるべき姿を示すことを目的としている。このような研究目的を達成するための具体的な研究課題は次の通りである。

第一に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に現れるジェンダー表象を男性性、女性性、ジェンダー・アイデンティティの構築と遂行の次元で見つめる。

第二に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する多種多様な人種がどのように、ストーリー、キャラクター、映像的に描かれ、どのような関係を形成しているのかを明らかにする。

第三に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に表現される階級構

造はどのように形成されているのか、そして階級対立と差別がどのように進行されるかを批判的に分析する。

本研究を通じてファンタジー映画研究の観点と範囲をより拡大することができることを期待する。特に、生物学的性別を中心に進められてきた映画の中のジェンダー研究の新しい方向性を提示することができる。今まで映画の中におけるジェンダー批判は、フェミニスト的異性愛規範性の観点から解釈されてきた。しかし、本研究ではジェンダー・アイデンティティの認識を正すために、ジェンダーパフォーマティブな観点から明らかにする。

2. 研究方法と論文の構成

Esther Ngan-ling Chow (2000) によると、人種、階級、ジェンダーは、社会の基本的な構造の構成要素であり、社会編成と人的インタラクションのプロセスの基底的原則である¹⁰。特に、最近では、これらの主題が、映画や文学、芸術など文化関連の研究で最も重要なテーマとなっている。これは文化一般に関する学問研究の潮流を指すイギリスのバーミンガム大学の現代文化研究センター (CCCS) でも最も関心を持って扱われているテーマでもある。

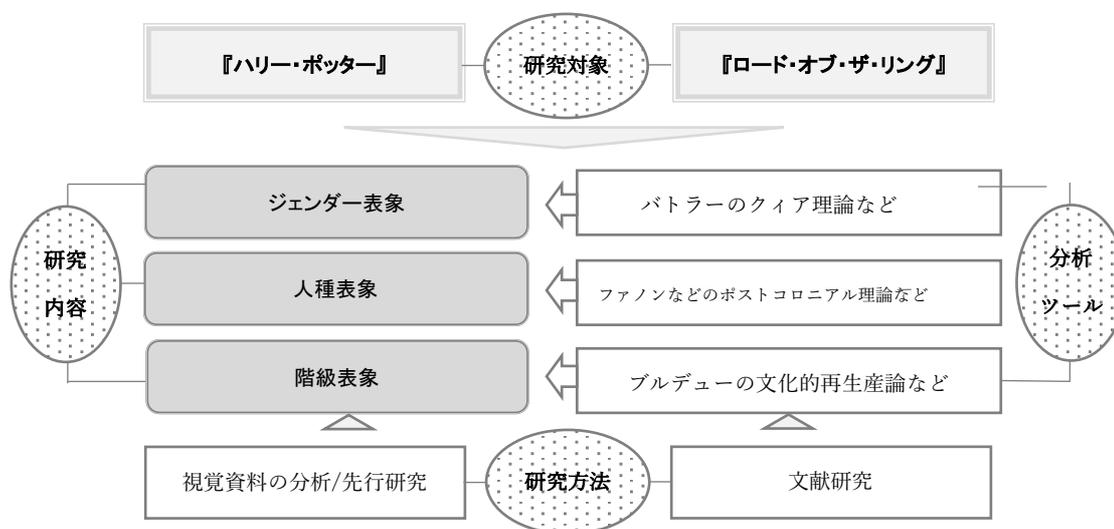
ジェンダー、人種、階級の問題は、学際的なアプローチが必要な分野であり、従来の学問的枠組みを超えてさまざまな視点から研究に取り組み、あらゆる学問分野の研究者の間で活発になっている。映画研究においても、文学、美学、社会学、建築・音楽などを含む、学際的な研究が行われている。その一つの例が松本侑壬子の『シネマ女性学』である¹¹。松本は映画学と女性学の学際的試みとして、ジェンダーの視点から10のテーマ別にとりあげ、約130本の映画を紹介している。

本論文では、こうした視点を参考にして、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』でのジェンダー、人種、階級表象を考察する。つまり、映画理論をもとに映画に登場するキャラクターのジェンダー・アイデンティティ、人種多様化と非白人の周辺化、階級構造と差別などに関する問題を紐解こうとするものであり、表象を考察する。とりわけ、原作のジェンダー、人種、階級表象が、映画化によっていかに変

¹⁰ チャウ、エステル・アンリン「人種／エスニシティ、階級、およびジェンダー：アメリカにおける理論と研究の発展」、『ジェンダー研究』、3号、ホーン・川嶋瑠子訳、2000年 (Chow, Esther Ngan-ling. Race/Ethnicity, Class, and Gender: Development of Theory and Research in the U.S.)

¹¹ 松本侑壬子『シネマ女性学』、論創社、2000年、12頁

容したのかを比較分析し、共通点と相違点について明らかにする。



〈図 1-1〉 研究内容、分析ツールと研究方法

こうした課題を解決するために、文献 (literature) を利用した理論的考察と視覚資料の分析を通じた実証 (empirical) の研究を並行する。まず、文献的考察は、国内外の文献と先行研究資料をもとに、ファンタジーやファンタジー映画、性とジェンダー理論、人種やポストコロニアルリズム、階級とマルクス主義などの理論的根拠を用意する。そして、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』を対象とした先行研究などを通じて、本研究の内容的基盤を構築する。実証研究のための視覚資料の分析は、映画の膨大なデータベースである IMDB (Internet Movie Database) と『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の DVD のキャプチャーを中心に行う。

本論文の構成は次のとおりである。

まず序論では、本論文の研究背景と目的、研究方法と論文の骨組みについて簡単な紹介を行う。

第一章では、本研究の理論的背景と主要な先行研究を概観する。具体的には、ファンタジーの定義と類型を整理し、ファンタジー文学の映画化などについて論ずる。次に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー、人種、階級に関わる先行研究を概観し、本研究の位置付けを行う。

ここでは、先行研究の大半が、原作に限られていることや、フェミニズムの異性愛

規範(heteronormative)の観点からの研究に限られていることなどを指摘し、映画を中心とするジェンダー・アイデンティティ、人種多様化と周辺化、階級構造と葛藤などについて考察することの必要性を提示する。

第二章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の中に現れるジェンダー表象を性とジェンダー、ジェンダー・アイデンティティと多様性を中心に分析するとともに、二つの作品を比較考察する。具体的には、二つの作品に登場する男女キャラクターの数を調査して、性別の不平等の問題をしてみる。そして主要キャラクターのジェンダー・アイデンティティをジェンダー・パフォーマンス性の観点から整理分析し、ジェンダー転覆の可能性にも注目しながら考察する。ジェンダー・パフォーマンス性の観点から分析するのは、「女性」と「男性」という二分法的なジェンダー・カテゴリーでは、二つの作品に描かれている、多様なジェンダー・アイデンティティを説明しにくいからである。ジェンダーパフォーマンス性の観点からの分析により、ジェンダーが、自然なものでも本質でもない社会的・文化的な構成物であることがわかる。また、ジェンダー・アイデンティティの観点から特徴的なキャラクター、『ハリー・ポッター』でのモリーとアンブリッジ、『ロード・オブ・ザ・リング』でのフロドとサムについて詳しく分析する。モリーとアンブリッジは母性性で対比され、フロドとサムはクィアと評価されるからである。

第三章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する多種多様な人種がどのように映像的に描かれ、どのような関係を形成しているのかを考察する。また、『ハリー・ポッター』はヴォルデモートに代表される絶対悪とハリーに象徴される善が明確に区分されるのに対し、『ロード・オブ・ザ・リング』では、絶対善が存在せず、すべての人物が絶対悪から逃れられないことの意味を考察する。

第四章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での階級を決定する要因と構造について詳しく分析する。これにより、『ハリー・ポッター』の階級を区分する要因は魔力、血統と富であるのに対し、『ロード・オブ・ザ・リング』では、『ハリー・ポッター』のような魔力による階級差は存在しないことを明確にする。マルフォイに代表される魔力、血統と富による階級差別が存在している魔法世界とは異なり、『ロード・オブ・ザ・リング』では、階級差別的な行為に対する描写がないという事実を考察する。そして、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での階級問題は、英国の帝国主義イデオロギーと無関係ではないという点を明らかにすると同時に、これらの両作品の階級差別は、まさしく人間の社会に脈々と続く歪みの

蓄積の表象であることを示唆したい。

結論では、これまでの検証結果を総括するとともに、ジェンダー、人種、階級についての有益な本来の映画としての姿を提示し、今後の課題について述べる。『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、ファンタジーという架空の夢物語であるのに、人間あるいは人間社会の歴史的な歪みや、現代そのものの問題が取り込まれている。したがって、それを無防備な観客が受け取る可能性がある以上危険である。ここでは、これらの問題を踏まえて、二つの映画の中におけるジェンダーや人種、階級の問題に対してどのように向き合っていくかを提言する。

第一章 理論的背景と先行研究

第一節 ファンタジー映画

1. ファンタジーの定義と類型

ファンタジーという用語は、ギリシャ語のファンタシア (phantasia) に由来し、「想像力」「幻影」「途方もない空想」「現実離れた想像」「夢想」「性的な空想」といった意味で使われているが、その定義は様々である。例えば、Kathryn Hume (1984) は、ファンタジーをどんなかたちであれ、世間一般が認める現実から離れることであると定義している¹。そして高橋準 (2009) は、ファンタジーを現実の象徴秩序からこぼれ落ちる「空想的なもの」の存在によって特徴づけられる、文学やその他の表現形式の中に横断的に存在する一ジャンルであるといっている²。J. R. R. トールキン (J. R. R. Tolkien) はファンタジーを「準創造それ自体と、心象から生まれる表現に奇妙さとふしぎさを与える性質」であるとしている³。

しかし、梅内幸信 (2006) によると、今や古典的なものといえるまでになっているのが Todorov の定義である⁴。Tzvetan Todorov (1999) は、「幻想文学」を「テキスト」と「読者」との間に生ずる「ためらい」と「特定の態度」によって、次のように定義づけようと試みている⁵。

①テキストが読者に対し、作中人物の世界を生身の人間の世界であると思わせ、しかも、語られた出来事について、自然な説明をとるか超自然的な説明をとるか、ためらいを抱かせなければならない。

②このためらいは、作中の一人物によって感じられていることもある。

③読者がテキストに対して特定の態度をとることが重要である。

一方、伊達桃子 (2012) は Brian Attebery のファンタジーの定義をもとに、「あり得ないことが起きて、作者が信じる自然法則が侵犯されること」、「喜劇としての構造」、

¹ Hume, Kathryn. *Fantasy & Mimesis: Responses to Reality in Western Literature*, New York & London: Methuen, 1984, p.8.

² 高橋準 「ファンタジーにおける〈母〉と女性のセクシュアリティ ―ポピュラー文化のジェンダー分析・3」、『行政社会論集』、第2号、2009年、3頁

³ トールキン、J.R.R. 『妖精物語について』、猪熊葉子訳、評論社、2003年、99頁

⁴ 梅内幸信 「「ファンタジー文学」に関する定義づけの試み」、藝文研究、第91巻第2号、2006年、74頁

⁵ トドロフ、ツヴェタン 『幻想文学論序説』、三好郁朗訳、創元ライブラリ、1999年、53-54頁 (Todorov, Tzvetan. *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1970)

「幸せな大詰めの喜び」をファンタジーの3つの要素と述べている⁶。

トールキンは、現実世界とファンタジーの世界を「一次世界」と「二次世界」とし、Zahorski&Boyer (1982) は、「ロー・ファンタジー (low fantasy)」と「ハイ・ファンタジー (high fantasy)」に区分している。

Zahorski&Boyer (1982) によれば、「ロー・ファンタジー」とは現実的な「一次的設定の世界」に描いたもの、「ハイ・ファンタジー」とは想像上の「二次的世界」を描いたものである⁷。しかし、こうした区分は、内容的に類似している。つまり、「ハイ・ファンタジー」はトールキンの「二次世界」に相当し、「ロー・ファンタジー」は「一次世界」に該当する。

Peter Hunt (2001) によれば、この用語は、「ハイ・ファンタジー」がまるで「ロー・ファンタジー」より優越であり、「ロー・ファンタジー」は、「ハイ・ファンタジー」に満たない低級世界を描くという否定的な語感を感じさせるという点で「二次世界」という用語を「別の世界 (alternative world)」という言葉に代替して使用しているだけであると述べている⁸。

Maria Nikolajeva (1988) は、Tolkien と Zahorski&Boyer (1982) の見解をより具体的に整理して幻想の世界の方式を『閉鎖世界』(Closed world)、『開放世界』(Open world)そして『暗示世界』(Implied world)の3つに分け提示する⁹。

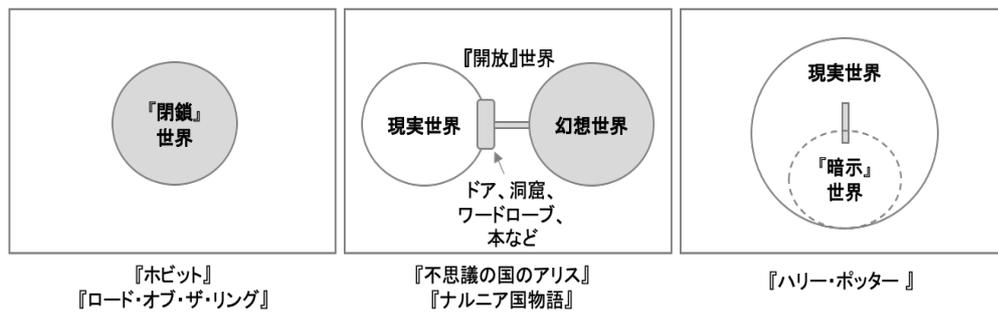
「閉鎖世界」は「一次世界」を設定せずに、別の「二次世界」のみで構成され、時空間的に「ハイ・ファンタジー」と同じ概念である。「開放世界」は、現実の世界と幻想の世界が分離されて、ドアや洞、クローゼット、本などの特別な通路を通して出入りすることができる世界を指す。「暗示世界」は、現実の世界で侵入してきた幻想の世界の魔法などを通して「二次世界」があることを推測することができる世界である。「閉鎖世界」や「開放世界」は、「二次世界」で出来事が進行する。一方、「暗示世界」は、現実の世界、すなわち「一次世界」で物語が構成されている。

⁶ 伊達桃子 「人形ファンタジーにおける変身」、『社会科学雑誌』、第4巻、2012年、2頁

⁷ Zahorski, Kenneth J., and Robert H. Boyer. "The Secondary Worlds of High Fantasy.", *The Aesthetics of Fantasy Literature and Art*, Ed. Robert C. Schlobin, Indiana and Brighton: University of Notre Dame Press and The Harvester Press, 1982, p.56.

⁸ Hunt, P., & Lenz, M. *Alternative Worlds in Fantasy Fiction*, London and New York: Continuum, 2001.

⁹ Nikolajeva, Maria. *The Magic Code : The Use of Magical Patterns in Fantasy for Children*, Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1988, p.36.



〈図 2-1〉 Maria Nikolajeva によるファンタジー世界の区分

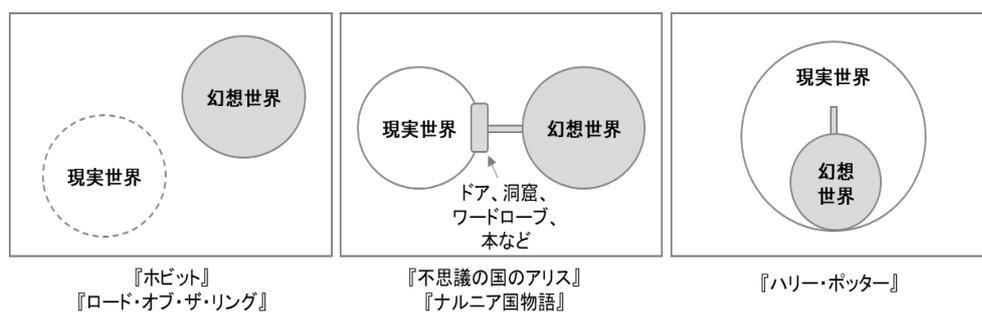
いっぽう、Nikki Gamble (2008) は、ハイ・ファンタジー (High Fantasy) を三種類に区分している。

第一に、現実の世界とは違う、別の架空の世界を構成する方式

第二に、媒介装置を利用した入口を通じて (through a portal)、現実の世界から架空の世界に入る方式

第三に、現実の世界の一部であるが、その中で別個の世界を見せる方式、である¹⁰。

この基準に基づいて、代表的なファンタジー作品を分類すると、トールキンの作品は第一の方式に属し、ルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議の国のアリス』 (Alice in Wonderland) や C.S. ルイス (C.S. Lewis) の『ナルニア国物語』 (The Chronicles of Narnia) は第二の方式に属し、J.K. ローリング (J.K. Rowling) の『ハリー・ポッター』は第三の方式に属する。



〈図 2-2〉 Nikki Gamble によるファンタジー世界の区分

¹⁰ Gamble, Nikki & Yates Sally. *Exploring Children's Literature*, Los Angeles: SAGE, 2008, pp.102-113.

2. ファンタジー文学と映画

ファンタジーは、文学や映画、音楽、絵画や建築など、さまざまな領域に影響を及ぼしている。特に、ファンタジーが文学に与えた影響は至大である。

今日、私たちが接するファンタジーと呼ばれるジャンルの小説が文学史に登場したのは、19世紀半ばであるが、それ以前にも、ゴシック小説、幻想文学などの異なる様式や概念が存在して総体的なファンタジー文学を形成していた。

ファンタジー小説、または幻想小説の起源をみると、18世紀末に開花したゴシック小説 (Gothic Novel) と出会うことになる。ゴシック小説の元祖はホレス・ウォルポール (Horace Walpole) の『オトラントの城奇譚』 (The Castle of Otranto) であり、「ゴシック」という言葉は、もともと「中世の建築や美術様式」のことであるが、現代では「恐ろしい、幻想的、超自然的」などの意味を指すものとして使われるようになった。ドイツロマン主義の代表的作家にして、ヨーロッパ19世紀幻想小説を代表する作家は、E・T・A・ホフマン (E. T. A. Hoffmann) である。ホフマンは、不気味なモチーフを用い、現実と夢の間を浮遊するかのような不思議な世界を描いた。

このようなゴシック・ファンタジー小説の伝統は、イギリスの作家メアリー・シェリー (Mary Shelley) の『フランケンシュタイン』 (Frankenstein)、ロバート・ルイス・ステイブンソン (Robert Louis Stevenson) の『ジキル博士とハイド氏』 (The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde)、ブラム・ストーカー (Bram Stoker) の『吸血鬼ドラキュラ』 (Dracula) やアメリカの作家チャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown) の『ウィーランド』 (Wieland)、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) の『アッシャー家の崩壊』 (The Fall of the House of Usher)、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の『響きと怒り』 (The Sound and the Fury) のような優れた文人たちによって受け継がれてきた。

19世紀半ばには、ゴシック小説とは別に幻想小説の古典である『不思議の国のアリス』が出版された¹¹。オックスフォード大学の数学教授であったルイス・キャロルは、この幻想小説で、白ウサギを追いかけて不思議の国 (現実の世界の鏡) に入って冒険する主人公の少女アリスの物語を描いている。また続編である『鏡の国のアリス』 (Through the Looking-Glass, and What Alice Found There) では、アリスが夢の中

¹¹ コーエン、モートン.N. 『ルイス・キャロル伝(上)』、安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、1999年、223-230頁

で鏡の中に入って、その世界での冒険を描いている。

現代のファンタジー小説の特徴は、現実とは異なる完全な幻想世界の中で時空を超えて起こる事件を扱うという点である。最近、脚光を浴びているファンタジー小説もほとんど現実の世界ではなく、仮想世界や幻想世界で起こった冒険を扱っており、その意味で、現実の世界を扱っている一般文学と区別される。

Susan Hayword (2013) は、ファンタジー映画は「有り得ないプロットに、架空の出来事、登場人物などを混成して劇化した映画の類型」、あるいは「私たちが知らない世界、私たちが実在すると考えていない世界の映画」と定義する¹²。

上田仁志 (2006) によれば、ファンタジー映画は、おとぎ話の世界や想像上の国々に関連する映画の一類型であり、魔法や魔法使いに関する驚異的事件や、神々や天使、妖精といった超自然的存在物が登場する映画を指す (195) ¹³。

映画は大きくみると二つの点で出発したと言える。リアリズムとファンタジーである。史上初の映画であるリュミエール兄弟の『工場の出口』(La Sortie de l'usine Lumière à Lyon、1895) と『ラ・シオタ駅への列車の到着』(L'arrivée d'un train en gare de La Ciotat、1895) が実際の情景を映した映画であり、そこにリアリズムが存在する。かたやジョルジュ・メリエス (Georges Melies) の『月世界旅行』(Le Voyage dans la Lune、1902) は、月への探索旅行がモチーフであり、最初のファンタジー映画と言える。

以後、絶え間なく、映画史において、様々なファンタジー映画が作られ続けてきたが、2001年に映画『ハリー・ポッターと賢者の石』(Harry Potter and The Sorcerer's Stone) と『ロード・オブ・ザ・リング』(The Lord of the Rings) がそれぞれ公開されることによって、このジャンルに新しい波をもたらしたのではないだろうか。そして、それに続いて作られた、例えば、2003年の『パイレーツ・オブ・カリビアン/呪われた海賊たち』(Pirates Of The Caribbean: The Curse Of The Black Pearl)、2005年の『ナルニア国物語』(The Chronicles Of Narniar) などが全世界的な興行に成功し、2000年代には、名実共にファンタジー映画の全盛時代になった。このようなファンタジー映画に対する肯定的な雰囲気の中で、2009年に『アバター』は3D立体映画と結合しながら、今までの映画興行新記録を更新した。

¹² Hayword, Susan. *Cinema Studies: The Key Concepts*, Taylor & Francis Ltd, 2013, p.29

¹³ 上田仁志 「ファンタジーと悪夢—スピルバーグと D. リンチの場合」、『帝京大学短期大学紀要』、第 26 号、2006 年、195 頁

3. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』

1) 『ハリー・ポッター』

小説『ハリー・ポッター』は、『賢者の石』、『秘密の部屋』、『アズカバンの囚人』、『炎のゴブレット』、『不死鳥の騎士団』、『謎のプリンス』、『死の秘宝』、全7巻からなる長編で、各巻の内容は相互に密接に関連している。映画『ハリー・ポッター』は、小説を原作とし、原作の第7巻『死の秘宝』を『死の秘宝 PART1』、『死の秘宝 PART2』に分けて、総8編が製作された¹⁴。しかし、映画『ハリー・ポッター』は、一人の監督で作っているわけではない。第一・二作は、『ホーム・アローン』(Home Alone、1990)や『ミセス・ダウト』(Mrs. Doubtfire、1993)のクリス・コロンバス (Chris Columbus)、第三作は、『ゼロ・グラビティ』(Gravity、2013)や『ROMA/ローマ』(Roma、2018)で知られたアルフォンソ・キュアロン (Alfonso Cuarón) が監督を務めた。そして第四作は、『フォー・ウェディング』(Four Weddings and a Funeral、1994)や『モナリザ・スマイル』(Mona Lisa Smile、2003)のマイク・ニューウェル (Mike Newell)、第五～八作は、『ステート・オブ・プレイ～陰謀の構図～(TVドラマ)』(State of Play、2003)や『セックス・トラフィック(TVドラマ)』(Sex Traffic、2004)のデイビッド・イエーツと、異なる4人が務めている。デヴィッド・イエーツ (David Yates) は、本編の70年前を描くスピンオフ『ファンタスティック・ビースト』シリーズの監督も務めた。

『ハリー・ポッター』の原作と映画は、仮想世界である「魔法世界」を舞台に、魔法使いとして生まれたハリー・ポッターが、1歳の時に両親を失い、母の妹夫婦に育てられ、ホグワーツ魔法魔術学校でロン、ハーマイオニーらと共に様々な魔法を学び、闇の魔法使いヴォルデモートとの因縁と戦いを描いた物語である。

J. K. ローリングの小説『ハリー・ポッター』はイギリスの神話的、英雄的叙事詩や様々な文学作品の影響を受けている。イギリスの神話的、叙事詩の伝統から『ハリー・ポッター』を分析した研究では、Nikita&Chitra Agarwal (2005)の研究とChristine Doyle (2008)などの研究がある。Nikita&Chitra Agarwal は、『ハリー・ポッター』

¹⁴ 『ハリー・ポッター』は、Kimberley Reynolds が指摘しているように、シリーズ完結前に映画化され、小説後半では明らかに映画の影響を受けている。

Reynolds, Kimberley. *Children's Literature: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press, 2011, p.68.

に登場する名前の神話や昔話的由来を研究し¹⁵、Christine Doyle (2008) は、ファンタジー叙事詩の伝統から『ハリー・ポッター』の物語を分析した¹⁶。また、Sharon Black (2003) も幻想小説の英雄叙事詩と関連して小説『ハリー・ポッター』を考察した¹⁷。

イギリスの学園小説も『ハリー・ポッター』に影響を及ぼした。学校を舞台として書いてきた成長小説の伝統を引き継ぐ小説として『ハリー・ポッター』を取り上げる研究では、Elizabeth A. Galway (2012) と Charles Elster (2003) などの研究を挙げることができる。

Elizabeth A. Galway (2012) は、『ハリー・ポッター』と英国の学園小説の古典的な作品であるトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学生時代』との類似性を分析している。この小説は、ハリーと同じで養父母の抑圧の下で知的障害者扱いを受けたトム・ブラウンが、学校でも最初は虐められる。最終的に自分より年齢が高く賢い校長の助けを借りて、自分の学校の代表チームがクリケットの試合で勝つのを助けることで英雄になるというものである¹⁸。また、Charles Elster (2003) は「制服」、「弱者の悩み」、「学校施設」、「高学年の特権である外出」、「生徒間や学校の権威層の間で行われる熾烈な競争」などを類似点として挙げている。そして彼は『ハリー・ポッター』の小説と、伝統的な寄宿学校小説の構成を比較し、その共通の要素に「学校の授業」、「運動競技」、「宿題」、「寮同士の競争」、「非行」、「夜の外出」、「秘密外出」、「敵の偵察」、「学期の初日と最後を祝うこと」、「新しい生徒と教師が到着すること」、「復讐」などに言及する¹⁹。

トールキンの『指輪物語』も、小説『ハリー・ポッター』に大きな影響を与えた。例えば『指輪物語』に出てくる絶対悪の象徴であるサウロンと主人公を助けてくれる良い魔法使いガンダルフ、そして魔法の種族が住んでいる「中つ国」はそれぞれ『ハリー・ポッター』に出てくるヴォルデモートとダンブルドア、魔法世界と、相互緊密に併置されている。

この他にも、『ハリー・ポッター』の中に、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』

¹⁵ Nikita & Chitra Agarwal. *Friends and foes of Harry Potter : names decoded*, Dallas, TX : Texas Word Publishing : Outskirts Press, 2005.

¹⁶ Doyle, Christine. "Contemporary Hauntings.", *Children's Literature*, 36(0), 2008, pp.244-250.

¹⁷ Black, Sharon. "The Magic of Harry Potter: Symbols and Heroes of Fantasy.", *Children's Literature in Education*, 34(3), 2003, pp.237-247.

¹⁸ Galway, Elizabeth A., "Reminders of rugby in the halls of Hogwarts: The Insidious influence of the School Story Genre on the Works of J.K.Rowling.", *Children's Literature Association Quarterly*, 37(1), 2012, pp.66-85.

¹⁹ Elster, Charles. "The Seeker of Secrets: Images of Learning, Knowing, and Schooling.", *Harry Potter's World: Multidisciplinary Critical Perspectives*, Ed. Elizabeth E. Heilman, New York: RoutledgeFalmer, 2003, pp. 203-220.

ス』と『鏡の国のアリス』、ジェイムズ・M・バリ (James Matthew Barrie) の『ピーターパン』、C. S. ルイスの『ナルニア国物語』などが投影されている²⁰。

『ハリー・ポッター』の商業的成功は、誰も否定できない事実である。驚異的な販売部数を記録し、「ハリー・ポッター現象」と呼ばれるほどの文化現象が起きた。そして、多くの人々は『ハリー・ポッター』が既成の権威に挑戦して、固定されたルールを破る進歩的価値を持っていると評価する。また、ハリーとロン、ハーマイオニーは、多くの人々が彼らの言葉に耳を傾けないのにも関わらず、力のある人々に頼らずに逆境を乗り越えるという点で、長所を持っていると評価した。しかし、『ハリー・ポッター』の否定的な評価も多い。

Harold Bloom (2000) は、小説『ハリー・ポッター』を、「うまく書かれていない」、「真の想像的なビジョンが欠如」、「常套的」、「美的な面が弱い」と貶めている²¹。そして、Gibson (2001) は、小説『ハリー・ポッター』が「危険で (dangerous)、悪で (evil)、淫乱である (perverted)」と評価する²²。しかし、多くの研究者が小説『ハリー・ポッター』に隠されていると指摘するのは「差別と偏見」である。例えば、太田耕軌 (2006) は、小説『ハリー・ポッター』にはイギリスにおける私立校と公立校における学校間の差別、男女間差別、人種的偏見、魔女裁判、貧困に対する偏見、体罰の否定など、さまざまな差別と偏見があると主張している²³。『ハリー・ポッター』における具体的な差別と偏見は、他の章で論ずる。

2) 『ロード・オブ・ザ・リング』

トールキンの『指輪物語』は、ハイ・ファンタジーの元祖とも言える小説であり、『旅の仲間』、『二つの塔』、『王の帰還』の3巻に分割され、1954年から1955年の間に出版された。『ロード・オブ・ザ・リング』は、『指輪物語』を原作に、ピーター・ジャクソン (Peter Jackson) 監督が映画化したファンタジー映画であり、原作と同じ『旅

²⁰ 沢辺裕子(2009)によると、『ハリー・ポッターと死の秘宝』に登場する秘密の抜け道は、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』にある暖炉の上の鏡とその横にある肖像画が組み合わされたような仕掛けであり、『ハリー・ポッターと死の秘宝』において、魔法の国へ足を踏み入れる場所が駅のプラットフォームであるという点は『ナルニア国物語』の『カスピアン王子のつぼえ』と類似している。

沢辺裕子 「鏡のなかのイメージたち：ハリー・ポッターに投じられた多作品の影」、『北海道武蔵女子短期大学紀要』、第41号、2009年、85頁

²¹ Bloom, Harold. "Can 35 Million Book Buyers Be Young? Yes", *Wall Street Journal*, 2000.

²² Gibson, D., Good, evil and Harry Potter: Boy wizard wins over some members of the Christian community, *The Star-Ledger*, November 15, 2001.

²³ 太田耕軌 「『ハリー・ポッター』に見る偏見と差別」、『天理大学人権問題研究室紀要』、第9号、2006年、123頁

の仲間』(2001)、『二つの塔』(2002)、『王の帰還』(2003)の三部構成として制作・上映された。

ピーター・ジャクソンは、ニュージーランドを代表する映画監督、脚本家、映画製作者である。少年時代から映画好きで知られ、17歳で8ミリ版ドラキュラ映画を製作するなど、早くから映画作家の道を志す。初の長編映画『バッド・テイスト』(Bad Taste、1987)が、カンヌ国際映画祭に出品され、注目を集める。その後、『ミート・ザ・フィーブル 怒りのヒポポタマス』(Meet the Feebles、1989)と『ブレインデッド』(Braindead、1992)もヒットし、カルト映画の巨匠となる。しかし、彼の代表作は何と言っても『ロード・オブ・ザ・リング』3部作であろう。『ロード・オブ・ザ・リング』は、世界中で社会現象を巻き起こす大ヒットを記録した。特に完結編となる『ロード・オブ・ザ・リング/王の帰還』はファンタジー映画の最高傑作と絶賛され、アカデミー賞でも作品賞、監督賞、脚色賞含め11部門を受賞した。

トールキンの『指輪物語』は、人間とホビット、エルフ、ドワーフ、トロール、オークなどが住む「中つ国」を舞台とし、ホビット族のフロドとサムなど、「旅の仲間」が全てを統べる「一つの指輪」を捨て、悪に仕える冥王サウロンを滅ぼすための冒険と友情が描かれる。

『指輪物語』は、一般的にファンタジー作品として知られているが、神話 (myth)、叙事詩 (epic)、ロマンス (romance)、英雄的なロマンス (heroic romance)、冒険小説 (adventure novel)、ファンタジー (fantasy)、ヒロイック・ファンタジー (heroic fantasy)、おとぎ話 (fairy tale) などに分類されてジャンルを正確に把握するのは難しい²⁴。

例えば、H. Cooper (2004) は、ロマンス²⁵で分類しており²⁶、Jane Chance (1992) は、ロマンス叙事詩 (epic-romance) に言及している²⁷。Verlyn Flieger (1981) も『指輪物語』は、魔法物語、叙事詩、ロマンスの要素をすべて持っていると分析しながら、特定のジャンルに帰属させると三つのジャンルが共有している本質的な要素を見逃すと主張する²⁸。

²⁴ Simonson, M., "Epic and Romance in The Lord Of The Rings.", *El Futuro del Pasado*, 7, 2016, p.66.

²⁵ 「ロマンス」は元々、ロマンス語によって書かれた英雄伝や騎士物語のことを指す。しかし、日本語的には、ロマンスはロマンに近い。

²⁶ Cooper, H., *The English Romance in Time: Transforming Motifs from Geoffrey of Monmouth to the Death of Shakespeare*, London: Oxford University Press, 2004, p.249.

²⁷ Chance, Jane. *The Lord of the Rings: The Mythology of Power*, New York: Twayne, 1992, p.13;109.

²⁸ Flieger, Verlyn. "Frodo and Aragorn: The Concept of the Hero.", *Tolkien: New Critical Perspectives*, Eds. Neil D. Isaacs and Rose A. Zimbardo, Kentucky UP, 1981, p.40

『指輪物語』は、北欧神話の影響を受けたと考えられている。特に、スカンジナビア (Scandinavia) をベースにした北欧神話では、『ベオウルフ』 (Beowulf) がよく知られている。トールキンは『ベオウルフ』が全時代をあわせて最も優れた叙事詩の一つだと考え²⁹、トールキン自身も自分のキリスト教的要素に『ベオウルフ』が最も価値のある話だったと述べている³⁰。『ベオウルフ』のストーリーは、『指輪物語』の中でフロドが湿地を過ぎ、「運命の山」 (Mount Doom) に入ってから墮落した人間族を救う姿そのままである。ベオウルフのように、フロドの姿は、勇気と犠牲、救いというキリスト教的徳目を見せる英雄のイメージを具体的に示している。

また、小説に出てくる多くの名前とその意味は - Frodo、Gandalf、Mordor、Orc、Mirkwood、Middle-earth、Thorin、Durin、Galadriel、Eärendil など - 古代英語と北欧神話 (Anglo-Saxon and Norse mythology) に関係し、彼の知識から出てきたものである³¹。

『指輪物語』は、ローリングの『ハリー・ポッター』はもちろん、多くのファンタジー作品に深い影響を与え続けている。例えば、ファンタジーの中の人種描写はレイモンド・E・フィースト (Raymond E. Feist) の『リフトウォー・サーガ』 (Riftwar Saga)、Markus Heitz の『ドワーフ』 (The Dwarves)、テリー・ブルックス (Terry Brooks) の『シャナラ』シリーズ (Shannara シリーズと R. A. Salvatore の『フォーゴトン・レルム』 (Forgotten Realms) などは、トールキンの影響を受けた作品である³²。この他にも多くのファンタジー作家がトールキンの影響を受けたことを表明している。

『ロード・オブ・ザ・リング』の学術的な研究はまだ不足しているが、『指輪物語』については、多くの研究者が、人々、文化、社会的慣行の多様性を表現しているので賞賛されるべきであると主張している³³。このような賞賛とともに『指輪物語』は絶大かつ永続的な人気を得て、ゲーム、美術作品、および音楽作品などに頻繁に参照されるもかかわらず、一部の批評家は、否定的な反応を示す。つまり、大衆と学界のそれぞれ異なる反応は、「普及している魅力的な作品 (popular appeal) と批評的激怒

²⁹ Carpenter, Humphrey., *J. R. R. Tolkien: A Biography*, Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 2000, p.72.

³⁰ Rateliff, John D., "The Hobbit: A Turning Point.", *A Companion to J. R. R. Tolkien*. Ed. Stuart D. Lee., West Sussex: Wiley Blackwell, 2014, p.123.

³¹ Manlove, Colin. N., *Modern Fantasy: Five Studies*, Cambridge University Press, 1975, p.155.

³² Baker, Dallas John. "Writing back to Tolkien: gender, sexuality and race in high fantasy.", *Recovering history through fact and fiction: forgotten lives*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle Upon Tyne, United Kingdom, 2017, p.123

³³ Evans, J., "The Anthropology of Arda: Creation, Theology, and the Race of Men.", *Tolkien the Medievalist*, Ed. Jane Chance, New York: Routledge, 2003, pp.194-224.

Rogers, H., "No Triumph Without Loss: Problems of Intercultural Marriage in Tolkien's Works.", *Tolkien Studies*, 10, 2013, pp.69-87.

(critical rage)³⁴』という言葉によく現れる。

『ロード・オブ・ザ・リング』の具体的な評価は、次の章でジェンダーと人種、階級を中心に説明する。

第二節 先行研究

1. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー研究

多くの研究者が『ハリー・ポッター』に隠されていると指摘するのは、さまざまな差別と偏見である。以下では、その差別と偏見の中でジェンダー、人種、階級の問題を中心に先行研究を考察する。まず、ジェンダー問題に関する先行研究を見てみることにする。

ジェンダーに焦点を当てた原作『ハリー・ポッター』の研究は蓄積されつつある。これまでの研究の特徴は、おおむねジェンダー役割に固定観念や偏見がないという研究と、偏見があるという研究に区分される。

まず、『ハリー・ポッター』は男女の役割が固定されず、その内容に偏見・差別がないとみる研究者には Mimi R. Gladstein (2004) と太田耕軌 (2006) などがいる。

Mimi R. Gladstein (2004) は『ハリー・ポッター』に登場する善人と悪人、能力のある人と無能な者の区分は、性別とは関係がないと言う。例えば、女性キャラクターの場合、ハーマイオニーは善人であり、能力のある魔女であるが、ベラトリックスは悪人として描かれる。この点が両性の平等の証拠であると主張している。さらに、『ハリー・ポッター』に描かれた魔法の世界を「男女両性に機会の平等が保障される世界」、「男女が等しい権利を享受できる世界」、「性別よりも性格と選択がさらに重要な世界」と論じている³⁵。

太田耕軌 (2006) もローリングは物語に男女差別のない学校を設定し、クィディッチ試合に登場するチームの選手に4名のうち1名は女性で設定するなど、『ハリー・ポッター』では一貫して男女平等であると主張している³⁶。

³⁴ Shippey, T. A., "Lit. and Lang.," *Modern Critical Views: J. R. R. Tolkien*, ed. Harold Bloom, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2000, p.123.

³⁵ Gladstein, Mimi R., "Feminism and Equal Opportunity: Hermione and the Women of Hogwarts," *Harry Potter and Philosophy: If Aristotle Ran Hogwarts*, Ed. David Baggett and Shawn E. Klein, Chicago: Open Court, 2004.

³⁶ 太田、前掲書、126-127頁

前述の通り、『ハリー・ポッター』におけるジェンダー問題について肯定的な評価もある一方、批判的意見もある。

Pierre Bruno (2001) は『ハリー・ポッター』の主人公を、女性を軽視する性差別主義者と批判するだけでなく、作家ローリングが描いた登場人物たちは「階級の敵」であり、成功することを望む子供たちには「危険なロールモデル」であると批判する³⁷。

Christine Schoefer (2000) は、「ハリーをはじめとする男性キャラクターは落ち着いて冒険に飛び込む勇気を持って話を主導するが、女性キャラクターは愚かな (silly)、好ましくない (unlikable) 存在、せいぜい補助者 (helpers) に過ぎない」と指摘する³⁸。

Heilman&Donaldson (2009) もハーマイオニーは英雄になるハリーを助ける補助者であるだけだと主張する³⁹。

坂田薫子 (2015) は、『ハリー・ポッター』の仮想の世界、魔法世界にも、性差による社会的役割分担への人々の期待を垣間見ることができるようになっており、シリーズに描かれた女性像は、伝統的で保守的なものでしかないと言わざるを得ないだろうと主張している⁴⁰。

『ロード・オブ・ザ・リング』は、『ハリー・ポッター』と共に、世界的に高い人気を博しながらファンタジー映画の代表作として定着したが、一方では、多くの非難を受けている。特に、『ロード・オブ・ザ・リング』の原作者、トールキンのジェンダー意識についての議論は、『指輪物語』三部作の最初の本が発表された時から始まっていた⁴¹。

『指輪物語』を対象とするジェンダーの観点からの研究は、ジェンダー・ステレオタイプの研究をはじめ、ジェンダー役割やジェンダー・アイデンティティ、セクシュアリティ、女性性など多様である。これらの先行研究は、主に女性キャラクター中心の研究であり、ジェンダー役割に、「男は仕事、女は家庭」という固定観念があるとみ

³⁷ The Wall Street Journal, Harry Potter vs. the Marxists, Jan. 31, 2001. (<https://www.wsj.com/articles/SB980891166507367013>, 2021年1月30日閲覧)

³⁸ Schoefer, Christine. "Harry Potter's girl trouble.", *Salon*, 13, 2000.

³⁹ Heilman, Elizabeth E., and Trevor Donaldson. "From Sexist to (sort-of) Feminist: Representations of Gender in the Harry Potter Series", *Critical Perspectives on Harry Potter*. Ed. Elizabeth E Heilman, Abingdon: Routledge, 2009, pp.139-162.

⁴⁰ 坂田薫子 「ハリー・ポッターのイギリス(3)、『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会のジェンダー観」、『日本女子大学紀要』、2015年、第65号、41頁

⁴¹ Rearick, A., "Why Is the Only Good Orc a Dead Orc? The Dark Face of Racism Examined in Tolkien's World.", *Modern Fiction Studies*, 50, 2004, pp.861-874.

る研究(Weronika Laszkiewicz, 2015 ; Jennifer Neville, 2005⁴²)と、そうではないという研究(Richard C. West, 2001 ; Brenda Partridge, 1983⁴³)に分けられる。

Laszkiewicz (2015) によると、トールキンの小説に登場する女性キャラクターは、受動性 (passivity) や無意味 (insignificance)、ステレオタイプの役割 (stereotypical roles) などにより批判を受けているという⁴⁴。一方、West (2001) は、トールキンが、フェミニストたちが考えているよりも強い女性キャラクターを創造したと述べる。特にガラドリエルとアルウェンに多大な知恵と知性を、エオウィンには、体力と勇気などを与えたと主張している⁴⁵。

また、一部の研究者は、『指輪物語』には、ジェンダー不平等が存在すると主張する。つまり、アルウェンとガラドリエル、エオウィンのような多数の肯定的なヒロインが登場するが、全体の女性の数が男性に比べて非常に不足していると指摘する⁴⁶。特に、「旅の仲間」には女性が一人もいないことを問題にしている⁴⁷。このために、トールキンはミソジニスト (misogynist) と排外主義 (chauvinism) であるという激しい非難も受けている (Laura Michel, 56)⁴⁸。

以上の研究を含めて、ほとんどの『指輪物語』でのジェンダー研究は、女性キャラクターを対象とした研究であるということが出来る。男性キャラクターを含む研究としては、主な男性キャラクターの男性性研究 (Holy Crocker, 2005) やフロドとサムを中心とする同性愛研究 (Christopher Vaccaro, 2007⁴⁹)、女性性と男性性の比較研究 (Laura Măcineanu, 2016) など、ごく一部に過ぎない。しかも、以上の研究は、トールキンの原作を対象とした研究であり、映画を対象とした研究はほとんどないのが実情である。

映画は、原作の叙事とキャラクターを再解釈・再構成する場合が多い。しかし、キ

⁴² Neville, Jennifer. "Women.", *Reading The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Classic*. Ed. Robert Eaglestone, London: Continuum, 2005. pp.101-110.

⁴³ Partridge, Brenda. "No Sex Please - We're Hobbits: The Construction of Female Sexuality of the Rings." *J. R. R. Tolkien: This Far Land*. Ed. Robert Giddings. London: Vision Press Limited, 1983. pp.179-197.

⁴⁴ Laszkiewicz, Weronika. "J.R.R. Tolkien's Portrayal of Femininity and Its Transformations in Subsequent Adaptations.", *A Journal of English Studies*, 2015, pp.15-28.

⁴⁵ West, Richard C., "Real-world myth in a secondary world: Mythological aspects in the story of Beren and Lúthien.", *Tolkien the Medievalist*, Ed. Jane Chance, University Press of Kentucky, 2001.

⁴⁶ Fredrick, Candice & Sam McBride. "Women Among the Inklings: Gender, C.S. Lewis, J. R. R. Tolkien, and Charles Williams", *Contributions in Women's Studies*, 191. Westport, CT: Greenwood. 2001, pp.108-114.

⁴⁷ Brennan-Croft, J. & L.A. Donovan. *Perilous and Fair: Women in the Works and Life of J.R.R Tolkien*. Altadena, CA: Mythopoeic Press, 2015, p.109.

⁴⁸ Michel, L., "Politically Incorrect: Tolkien, Women and Feminism.", *Tolkien and Modernity*, 1, Ed. Frank Weinreich and Thomas Honegger, Zollikofen, Switzerland: Walking Tree, 2006, p.56

⁴⁹ Vaccaro, Christopher. "Homosexuality.", *J.R.R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*. Ed. Michael D.C. Drout, New York: Routledge, 2007, pp.285-286.

キャラクターを再解釈・再構成する過程でジェンダー・アイデンティティが、変化することも起こりうる。ジェンダー・アイデンティティが流動的であるということは、固定的な性別による役割分担にとらわれず、キャストイングすることも可能であることを表す。したがって、映画の中のジェンダー・アイデンティティの研究は原作を含めた総合的な検討が必要と考えられる。

『ハリー・ポッター』と『指輪物語』におけるジェンダー批判の言説は、ほとんどフェミニスト的異性愛規範性(heteronormative)の観点からのジェンダー的な問題を指摘する。

しかし、『ハリー・ポッター』と『指輪物語』におけるジェンダー・アイデンティティは、男女の性別によって固定されたものではない。『ハリー・ポッター』でのアルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore)、ゲラート・グリンデルバルド (Gellert Grindelwald)、『指輪物語』でのフロドとサムの同性愛的関係を考慮すれば、ジェンダー・アイデンティティをフェミニスト的異性愛規範性の観点から考察することは問題となる。異性愛中心のフェミニストの視点からみると、ジェンダー・アイデンティティの転覆の可能性はない。しかし、クィア理論の観点からみると、ジェンダー破壊の可能性が存在する。クィア理論ではセックスやジェンダー、セクシュアリティは、自然なものでも本質でもなく、社会的・文化的な構成物であり、規範が作った虚構であるとしている。

したがって、今まで、フェミニスト的異性愛規範性の観点から解釈されてきた『ハリー・ポッター』と『指輪物語』におけるジェンダー・アイデンティティの認識を正すためには、クィア理論の観点からの分析が要求される。

2. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種研究

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、すべての人種差別主義的だとみる研究とそうではないとみる研究がある。まず、『ハリー・ポッター』には、「人種差別と偏見」が隠されていると指摘して、批判的な評価をする研究者には P. Prasida (2013)、太田耕軌 (2006)、Andrew Blake (2002)、Elizabeth Heilman と Anne Gregory (2003) などがいる。

Prasida (2013) によると、『ハリー・ポッター』は、単なる空想 (pure fantasy) として理解されるので、表面的に人種差別主義が現れないが、このシリーズは半純血魔

魔法使い、マグル出身魔法使いとスクイブが、純血魔法使いにいかにか差別されているかを示している、と主張する。純血が特権を持って、半純血とマグル出身を二級市民 (Second class citizens、差別を受けている人々) と扱うことはイギリス人が有色人種を接する文化と類似している⁵⁰。

太田 (2006) によれば、ローリングは、人種への偏見は魔法界や人間界にも共通しており、さらにその文化にも深く入りこんでいるとしつつ、「善」に属すると考えられるコーネリウスさえも、「巨人」という違う人種に対して偏見を抱いているということ を明らかにしているという⁵¹。

加えて、Andrew Blake (2002) はhogwartsのすべての生徒と親が社会的な平等を享受しているわけではないとし、生徒たちの性格は彼らが属している階層や血統、そして家族と密接な関連性を持っていると述べている⁵²。また、Heilman と Gregory は、『ハリー・ポッター』が人種差別的思考を扇動すると主張して、Farah Mendelsohn はローリングのシリーズが進歩 (progressive) であり、自由主義指向的 (liberal-oriented) であるにもかかわらず、最終的には人種イデオロギーを再確認すると主張している⁵³。

一方、David Colbert (2001) と Mikhail Lyubansky (2006) などは、『ハリー・ポッター』には、人種差別的な内容がないと主張する。まず、Colbert (2001) によると、ローリングは人種差別主義と階級の偏見に対して抵抗しながら、人種を排除する代わりに、包容と統合の多文化主義を擁護しているとしている⁵⁴。また、Lyubansky (2006) によると、『ハリー・ポッター』の世界はColor-blind (白人と有色人種と区別をしない、人種偏見のない) の世界であり、「人種ユートピア」と説明する⁵⁵。

伊達桃子 (2009) も、『ハリー・ポッター』の根本的な価値観は人間同士の愛に基づく平等主義であり、作品の登場人物は、多種多様な人種や出身地の生徒が見られるとしつつ、実際の読者はいわば全員マグルなので、特定の人種や民族への差別として受け止められる恐れはないと言う。しかし、映画では、ハリー、ロン、ハーマイオニー

⁵⁰ Prāsida, P., "Racism in Harry Potter Series.", *International Journal of English and Literature (IJEL)*, 3(5), 2013, p.27.

⁵¹ 太田、前掲書、127-129 頁

⁵² Blake, Andrew. *The Irresistible Rise of Harry Potter*, London: Verso, 2002, p.141.

⁵³ Mendelsohn, Farah. "Crowning the King: Harry Potter and the Construction of Authority.", *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, Ed. Lana A. Whited. Columbia and London: U of Missouri P, 2002, p.366.

⁵⁴ Colbert, David. *The Magical Worlds of Harry Potter: A Treasury of Myths, Legends and Fascinating Facts*, Toronto: McArthur and Company, 2001, p.70.

⁵⁵ Lyubansky, Mikhail. "A Black Boy Even Taller than Ron: Racial dynamics in Harry Potter.", *The Psychology of Harry Potter: An Unauthorized Examination of the Boy Who Lived*, Ed. Neil Mulholland, Dallas: BenBella Books, 2006, pp.233-248.

の主要 3 人組はすべて白人であり、最終的にハリーが結ばれる相手も、チョウ・チャンではなくロンの妹ジニーであることから、この作品の根本的な保守性が表れていると主張している⁵⁶。

このように、『ハリー・ポッター』に現れる人種に対する肯定的な思考を、実証調査を通じて証明した研究もある。Vezzali et al. (2016) は、イタリアと英国の小学校、高等学校、大学生を対象に、『ハリー・ポッター』を読むことで現れる効果を研究した結果、移民、難民、LGBTQ+に対する偏見が減り、その痛みに対する子供の態度が改善されるという事実を発見した⁵⁷。彼らによると、こうした研究結果は、『ハリー・ポッター』を読んだ人は、ハリーと自分を同一視するが、ヴォルデモートやマルフォイなど悪役とは同一視しないことが影響を及ぼしたと主張する。

Gierzynski (2013) も『ハリー・ポッター』を人種差別主義とファシズムに対するハリーの闘争と思いながら育ったアメリカの若い世代が、結果的に反人種差別的で民主的になるという⁵⁸。

『指輪物語』における人種に関する学者たちの見解は、人種差別的であるとみる見解と人種差別的ではないという見解が存在する。まず、『指輪物語』を人種差別的な作品でみる見解の代表的な研究者としては、Leanne Potts (2003)、Shyam Bhatia (2003)、Brian McFadden (2005) などがいる。

Potts (2003) によると、『ロード・オブ・ザ・リング』は良い人は白人、悪い人は黒人に描写し、人種差別主義が深く根付いているとした⁵⁹。Bhatia (2003) もトールキンはホビットやエルフは白人（人種的に純粋な種族）として描いているが、オークは黒い肌のアフリカ人や先住民として描写していると指摘した⁶⁰。オークに対するこういう描写は、McFadden (2005) によると、意識的か否かに関わらず悪を他者と同一視することにより、欧州以外の人種との否定的な関係を永続させると主張している⁶¹。

⁵⁶ 伊達桃子 「ファンタジーの新しい波—『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか—」、『社会科学雑誌』、創刊号、2009 年、149-170 頁

⁵⁷ Vezzali, L., Stathi, S., Giovannini, D., Capozza, D., & Trifiletti, E., “The greatest magic of Harry Potter: Reducing prejudice.”, *Journal of Applied Social Psychology*, 45, 2015, pp.105-121.

⁵⁸ Gierzynski, Anthony. *Harry Potter and the Millennials: Research Methods and the Politics of the Muggle Generation*, Baltimore: JHU Press, 2013.

⁵⁹ Potts, Leanne. “‘Lord of the Rings’ Unleashes Debate on Racism”, *Albuquerque Journal*, 26, 2003.

⁶⁰ Bhatia, Shyam. *The Lord of the Rings rooted in racism*, Rediff India Abroad, 2003.

⁶¹ McFadden, Brian. “Fear of Difference, Fear of Death: The Sigelwara, Tolkien’s Swertings, and Racial Difference.”, *Tolkien’s Modern Middle Ages*. Ed. Jane Chance, New Middle Ages Series. New York and London: Palgrave Macmillan, 2005, pp.155-169.

『指輪物語』は人種差別的ではないという見解の代表的な研究者としては Christine Chism (2007)、Jane Chance (2001)、Virginia Luling (1995) などが挙げられる。彼らは、『指輪物語』における肌の色は、善と悪を示すのではなく、単に明るい暗いを示すものであり、人種差別とは無関係であるという。

Chism (2007) によれば、原作の『指輪物語』における「善 (good)」と「悪 (evil)」は、特定の人種や種族に内在されていると一般化できないため、人種差別的な作品とは言いきれないと指摘する⁶²。Chance (2001) は、『指輪物語』が多様な民族、文化、社会的慣行を表現して、賛辞を受けており、多文化主義的であると主張した⁶³。人類学者の Luling (1995) は、トールキンの作品は、人種差別的な内容はなく、トールキン自身も、人種差別主義者ではないとした⁶⁴。

以上のように、原作『指輪物語』における人種差別の研究は、盛んに行われてきたが、映画を対象とする研究は、Helen Young (2010) の研究と Marek Oziewicz (2016) の研究を除けばほとんどない。

Young (2010) は、『ロード・オブ・ザ・リング』を人種差別的に見ることは、その中に含まれている文化と個人の多様性、共通の敵に対抗する彼らの姿を考慮しなかったためであり、『ロード・オブ・ザ・リング』には人種差別的な内容が含まれていないと主張する⁶⁵。しかし、Oziewicz (2016) によると、トールキンの原作は、文化の多様性 (cultural diversity) がもたらす問題を認めながら、異人種間の結束 (unity) を固めることがいかに重要かを示しているが、映画では文化の違い (cultural difference) は敵意と対立を生み出しているという⁶⁶。

結局、Oziewicz (2016) は、映画の『ロード・オブ・ザ・リング』は人種差別的だと主張する。彼は、映画『ホビット』においても同じ批判をする⁶⁷。トールキンの『ホビットの冒険』が、ピーター・ジャクソンの『ホビット』として映画化され、トールキンの多文化的な物語の真実性と一貫性が変化したと批判する。

それを考えるならば、映画『ロード・オブ・ザ・リング』も原作の『指輪物語』の内

⁶² Chism, Christine. "Racism, Charges of.", *J.R.R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*, Ed. Michael D.C. Drout, Routledge, 2007, p.558.

⁶³ Chance, op.cit., p.194-224.

⁶⁴ Luling, Virginia. "An Anthropologist in Middle-earth.", *Proceedings of the J.R.R. Tolkien Centenary Conference*, Ed. Reynolds & GoodKnight, Altadena: The Mythopoeic Press, 1995, pp. 53-57.

⁶⁵ Young, Helen. "Diversity and Difference: Cosmopolitanism and The Lord of the Rings.", *Journal of the Fantastic in the Arts*, 21(3), 2010, pp. 351-365.

⁶⁶ Oziewicz, Marek. "Peter Jackson's The Hobbit: A Beautiful Disaster", *Journal of the Fantastic in the Arts*, 27(2), 2016, pp. 248-269.

⁶⁷ Oziewicz (2016) は、映画『ホビット』を「美しい災害 (beautiful disaster)」と呼んでいる。

容を誇張し、追加したために、原作が変化したと言える。

3. 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における階級研究

階級は、社会的利害関係の違いから始まった社会集団を指す概念である。階級の種類は支配する階級と支配される階級⁶⁸、資本家階級と労働者階級、またはブルジョアジーとプロレタリアートのような対立的な集団に区別する。

Julia Eccleshare (2002) によると、『ハリー・ポッター』は、富と権力の二分法的構造と現代社会の階級問題を魔法世界でそのまま再現しているという⁶⁹。つまり、『ハリー・ポッター』は、現代社会の物質主義の中で、権力を振り回す有産階級を批判しているとみることができる。

坂田 (2015) は、『ハリー・ポッター』で、階級はどのように表象されているのか、そしてそこにローリングのどのような社会観、政治観を読み取ることができるかを考察する。研究では、魔法を富のメタファーととらえ、「純血」、「半純血」、「マグル生まれ」という区別に階級問題を読み取ることができ、差別や階級制度はイギリスに古くから存在する社会的な問題であり、現代イギリスの様々な現実と密接に結びついている要素であるとしている⁷⁰。

一方、伊達 (2009) によると、『ハリー・ポッター』での差別は、実在の人種や民族ではなく、架空の人種間のヒエラルキーがあるとしながら、その社会的ヒエラルキーは、魔法使い (純血)、魔法使い (半純血またはマグル生まれ)、他の魔法族 (ハウスエルフ、人狼、巨人など)、マグル (普通の人間)、スクイブ (魔力をもたない魔法使い) などの順になっていると指摘する⁷¹。この基準によれば、ハリーと彼の二人の友人、ロンとハーマイオニーの階級は異なる。純血であるロンの社会的地位が最も高く、半純血のハリー、マグル生まれのハーマイオニーの順である。

以上のように、原作『ハリー・ポッター』の階級問題は、多くの研究者によって様々な主張がなされてきた。しかし、階級問題を調べてみると、作品の分析基準の説明が

⁶⁸ Gaetano Moscaは、階級を社会内の「支配階級」(ruling class)と「被支配階級」(class that is ruled)に区分する。モスカ、ガエターノ『支配する階級』、志水速雄訳、ダイヤモンド社、1973年(Mosca, Gaetano. *The Ruling Class:Elementi di Scienza Politica*, New York: McGraw-Hill Book Company, 1939)

⁶⁹ Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*, London: Continuum, 2002.

⁷⁰ 坂田薫子「ハリー・ポッターのイギリス(2)―『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」、英米文学研究、第50号、2015年、71-89頁

⁷¹ 伊達、2009年、前掲書、149-170頁

ないままに、階級問題が研究されたと考えられる。文学と映画の階級問題分析に基づいて、主に活用されている理論はマルクス主義理論である。マルクス主義は Karl Marx が理論化した階級構造に関する政治社会経済的イデオロギーである。マルクス主義理論の主な論理の一つは、マルクスがブルジョアジーと呼ぶ上層階級と下層階級のプロレタリアートの間に絶え間ない闘争があるということである⁷²。

多くは、マルクス主義理論に基づいて、『ハリー・ポッター』の階級問題を分析しているが、その研究者には、Hamilton et al. (2017)、Shalih Dzakiyyah Farda(2018)⁷³などがある。彼らによると、純血の魔法使いはブルジョアジーであり、マグルはプロレタリアートである。マルクス主義的思考が明確に現れるのは、シリーズの最後の本である『死の秘宝』である。すなわち、シリーズの最後に起こった魔法革命 (wizarding revolution) は、ヴォルデモートの信者に闘おうとする共同体の抵抗で、マルクスが主張するブルジョアジーを打倒しようとするプロレタリアート革命と似ていると指摘する。

『ロード・オブ・ザ・リング』は絶対権力の「一つの指輪」をめぐり、複数のキャラクターが善と悪の二つの側面を見せる。権力とは、一般にある主体が相手に望まない行動を強制する能力である。

欲張って権力を引きずると、ビルボやフロドのような純粋で善良なホビットでさえ善の性質を捨てて悪を持つようになる。つまり「一つの指輪」は単純な力として存在するのではなく、人間世界の権力と権力に対する人間の欲望を象徴する⁷⁴。

Ishay Landa (2002) によれば、「一つの指輪」は資本主義の世界での「典型的な商品 (quintessential commodity)」に相当し、「一つの指輪」の貪欲はマルクスがいう「フェティシズム (fetishism) ⁷⁵」に該当する⁷⁶。

Valerie Kocsis (2017) は、マルクスの観点から『指輪物語』での階級区分と層、貪欲と物質主義の影響を分析した。分析の結果、「中つ国」にある 20 個の指輪は権力を

⁷² Callinicos, A., *The revolutionary ideas of Karl Marx*, Chicago: Haymarket Books, 2011

⁷³ Hamilton, O., Jardine, C., Mangusso G., & Turner, A., "The Harry Potter Hierarchy: Critical Race Theory and Harry Potter.", *The mirror of Erised: seeing a better world through Harry Potter and critical theory*. Ed. Sarah L. King & Nathan J. A. Thompson, Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0), 2017.
Farda, Shalih Dzakiyyah. "Cultural Hegemony in J. K. Rowling's Harry Potter Series.", *Vivid: Journal of Language and Literature*, 7(2), 2018, pp.57-62.

⁷⁴ 「一つの指輪」と呼ばれるが、指輪自体が絶対概念ではなく、最終的には指輪を使用する者によって外部的に規定される。

⁷⁵ フェティシズムは人間がみずからがつくりだした商品や貨幣がかえって人間を支配し、人間がそれらを神のように崇めることを表すことで、資本主義社会に特有の現象としてマルクスが指摘した(大辞林)。

⁷⁶ Landa, Ishay. "Slaves of the Ring: Tolkien's Political Unconscious.", *Historical Materialism*, 10(4), 2002, p.123.

意味し、指輪を持った者は強力なブルジョアジー (powerful bourgeoisie) を象徴としている。そして、指輪の所有欲は資本主義の世界での富の貪欲ではなく、権力の貪欲であり、貪欲は最終的に滅亡につながるとしている⁷⁷。Patricia Meyer Spacks (1968) も『指輪物語』の墮落の媒介となるのは「一つの指輪」であり、指輪は「権力 (power)」を象徴するとしている⁷⁸。

「一つの指輪」の持つ欲望と権力の意味は、Perkins&Hill (2003) の研究によく現れている。彼らは『指輪物語』は善と悪の葛藤と関連しているという点で、叙事詩的な特性を持つが、そのテーマを詳しく見てみると、権力を向けた欲望に伴う悪に対することだと論ずる。「一つの指輪」が危険であるのは、「権力への欲望は腐敗する」という命題で説明することができる⁷⁹。

このような「中つ国」の階層構造は、富によって階層、階級間の差別を明確にする。Rivkin&Ryan (2004) は、その例としてドワーフを挙げている⁸⁰。ドワーフたちはかつて富のために強力であり、支配的な種族としての権威を持っていたと言う⁸¹。

Higham (2012) は、『指輪物語』をマルクス主義の観点から、社会的階級構造を分析した結果、「中つ国」の社会構造は、力強い王と領主、兵士たちで構成された明確な階級社会であり、ホビット族でも、サムのような下層階級とフロドのような上層階級 (higher status) が存在すると説明する⁸²。

4. 本研究の位置付け

本章の第一節では、ファンタジー文学と映画、そして『ハリー・ポッター』と『指輪物語』について考察し、第二節では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー、人種、階級の先行研究を概観し、その成果を整理した。これらから指摘できることは、おおよそ次の四点である。

⁷⁷ Kocsis, Valerie. "Greedy Like Gollum: Middle-earth According to Marx.", *Aletheia—The Alpha Chi Journal of Undergraduate Research*, 2(1), 2017, p.4.

⁷⁸ Spacks, Patricia Meyer. "Power and Meaning in The Lord of the Rings.", *Tolkien and the Critics: Essays on J.R.R. Tolkien's The Lord of the Rings*, Eds. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbaro. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1968.

⁷⁹ Perkins, Agnes & Helen Hill. "The Corruption of Power.", *A Tolkien Compass*. Ed. Jared Lobdell, Chicago: Open Court, 2003, p.57.

⁸⁰ ドワーフの代表的な仕事は、鍛冶屋(または石工)であるが、ドワーフ社会においても階級は存在する。しかし、ドワーフの内部には、階級による差別はない。

⁸¹ Rivkin, J., & Ryan, Michael. *Literary Theory: An Anthology*, 2nd Edition. Blackwell Publishing Ltd, 2004

⁸² Higham, Steve. "Ideology in The Lord of the Rings: a Marxist Analysis.", Doctoral thesis, University of Sunderland, 2012, p.69-70.

第一に、ジェンダー関連のほとんどの先行研究が、原作『ハリー・ポッター』と『指輪物語』の女性キャラクターを対象とした研究やフェミニスト的異性愛規範性(heteronormative)の観点からの研究に限られている。

第二に、映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』を対象とする人種表象研究はあるものの、先行研究の大半が、原作に限られている。

第三に、階級関連のほとんどの先行研究での特徴は、階級を分析するための基準が明確でなく、前のジェンダーと人種の研究と同様に、原作を中心に研究が行われている。

第四には、それぞれの原作を対象とするジェンダー、人種、階級の研究は、多くの蓄積はあるものの、ジェンダー、人種、階級の全てを包括する研究と二つの作品の比較研究はほとんど行われていない。

したがって、本研究においては、前述した先行研究の成果と問題点を踏まえ、映画を中心に、ジェンダー表象は、ジェンダーパフォーマティブな観点から登場キャラクターのジェンダーアイデンティティを明らかにする。ジェンダーパフォーマティブな観点からの分析により、今まで、フェミニスト的異性愛規範性の観点から解釈されてきたジェンダー・アイデンティティの認識を正すことができると考えられる。

映画の中の人種表象は、ポストコロニアル観点から白人至上主義と非白人の主変化などについて考察する。これにより、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する多種多様な人種がどのように、ストーリー、キャラクター、映像的に描かれ、どのような関係を形成しているのかを考察する。また、その多様な人種間で抑圧的關係がどのように形成され、それぞれの人種の文化的アイデンティティが変化しているかなどを考察する。そして、階級表象は、マルクスとブルデューの階級理論に基づいて階級構造と階級差別の要因を分析する。その分析により、マルフォイに代表される魔力、血統と「富」による階級差別が存在する『ハリー・ポッター』原作と映画とは異なり、『ロード・オブ・ザ・リング』原作と映画では、階級差別的な行為がないことを明らかにする。そして、『ハリー・ポッター』と、『ロード・オブ・ザ・リング』における階級問題は、英国の帝国主義イデオロギーと関係のあることを明確にする。

最後に、それぞれの研究の結果を比較分析し、ファンタジー映画におけるジェンダー、人種、階級についての有益な結果を得たい。

第二章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー表象

第一節 初めに

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』でのジェンダーは、複数の研究者によって問題化されてきた。研究者たちは、特に、二つの映画に登場する女性キャラクターの数が男性キャラクターと比較して、大幅に少ないことを指摘する。

まず、二つの映画における女性キャラクターの数を IMDb (Characters By Screen Time) のデータをもとに見てみることにする(拙稿)¹。次の<表 3-1>は、映画『ハリー・ポッター』に登場するキャラクターの数と割合である。シリーズ全作品における男女比の平均は、男性 64.9%、女性 35.1%と男性が女性を大きく上回る結果となっている。

<表 3-1> 映画『ハリー・ポッター』における登場キャラクターの数

(単位：名，%)

区分		作品別・性別キャラクターの数							総出演者の数
		賢者の石	秘密の部屋	アズカバンの囚人	炎のゴブレット	不死鳥の騎士団	謎のプリンス	死の秘宝 (I, II)	
全体 キャラ クター の数	男性	30	29	22	29	28	26	43	61
	女性	11	11	12	12	17	15	25	33
	合計	41	40	34	41	45	41	68	94
	女性比率	26.8	27.5	35.3	29.3	37.8	36.6	36.8	35.1
主要 キャラ クター の数	男性	12	14	12	13	14	13	16	18
	女性	3	3	3	3	6	5	6	6
	合計	15	17	15	16	20	18	22	24
	女性比率	20.0	17.6	20.0	18.8	30.0	27.8	27.3	25.0

注) 主要キャラクター：『ハリー・ポッター』(シリーズ合計)に10分以上出演したキャラクター。

出典：IMDb (Characters By Screen Time, 2020) データをもとに筆者作成。

¹ 河慧柱 『ハリー・ポッター』シリーズにおけるジェンダー役割と不平等、日本大学大学院(修士論文)、2018年

特に、男性キャラクターに比べて女性キャラクターの比率が少なかった作品は、一作目の『賢者の石』の26.8%で、一番多かった作品は五作目の『不死鳥の騎士団』の37.8%であった。また、主要キャラクター（シリーズ合計に10分以上出演したキャラクター）の女性キャラクターの平均比率は、25%であった。このように、男性キャラクターに比べ、女性キャラクターの割合は低いですが、シリーズが進むにつれ、女性の割合は増加することが分かる。女性比率の増加の原因としては、フェミニストから批判を受けた制作者が意図的に女性キャラクターを登場させたからかもしれない。

映画における女性キャラクターの割合の問題は、〈表 3-2〉からわかるように、『ロード・オブ・ザ・リング』でさらに目立つ。シリーズ全作品における男女比の平均は、男性88.9%、女性11.1%と男性が女性を8倍以上、大きく上回っている。特に、男性キャラクターに比べ、女性キャラクターの比率が低かった作品は二作目の『二つの塔』の11.5%で、一番高かった作品は一作目の『旅の仲間』の13.6%である。また、主要キャラクター（シリーズ合計に10分以上出演したキャラクター）に限定してみると、全体キャラクターの中で女性キャラクターの平均比は、6.7%に過ぎない。

〈表 3-2〉『ロード・オブ・ザ・リング』における登場キャラクターの数

(単位：名，%)

区分		作品別・性別キャラクターの数			総出演者の数
		旅の仲間	二つの塔	王の帰還	
全体 キャラクター の数	男性	19	23	28	32
	女性	3	3	4	4
	合計	22	26	32	36
	女性比率	13.6	11.5	12.5	11.1
主要 キャラクター の数	男性	10	10	8	14
	女性	0	0	1	1
	合計	10	10	9	15
	女性比率	0	0	11.1	6.7

注) 主要キャラクター：『ロード・オブ・ザ・リング』（シリーズ合計）に10分以上出演したキャラクター。

出典：IMDb(Characters By Screen Time, 2020)データをもとに筆者作成。

『ロード・オブ・ザ・リング』における女性キャラクターの比率は男性キャラクターに比べ、『ハリー・ポッター』よりだいぶ低いものである。さらに、10分以上登場するキャラクターは、一作目と二作目では一人もいなく、三作目では一人に過ぎない²。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、以上のような作品の中のキャラクターのジェンダー不平等はもちろん、ジェンダー・アイデンティティも問題であると指摘をする研究者もいる。これについては前章で述べたとおりであるが、『ハリー・ポッター』に描かれた女性像は、伝統的で保守的なものであり、『ロード・オブ・ザ・リング』においても、女性キャラクターは、受動性やステレオタイプな役割などにより批判を受けている。

また、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、ジェンダーの多様性³の不在も問題であると指摘される。

『ハリー・ポッター』の舞台になるホグワーツ魔法学校は、男女共学の魔法学校で、人種的・階級的多様性については描かれているが、ジェンダーの多様性についての描写はない。これに対し、Sunderland&McGlashan (2015) は、ホグワーツには、80人に達する生徒がいるが同性愛がなく、生徒たちも自分のセクシュアリティの疑問を持っていないと述べている⁴。一方、『ロード・オブ・ザ・リング』でのフロドとサムの関係は同性愛の関係として解釈する研究者もいる。また彼らは原作においてもフロドとサムの関係は、同性愛に近いとみる研究もある。

本章では、こうした内容を参考にしながら、次の二つの視点からジェンダー・アイデンティティを考察する。

まず、ジェンダー・アイデンティティをパフォーマンスティヴィティ（行為遂行性）の視点から分析する。ジェンダー・アイデンティティはそれぞれの個人が所属する社会や文化の中での経験などにに基づき自分の性別を自認する、いわば社会的構

² このため、Viars & Coker は『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する女性の数よりも馬の数が多いとしている。Viars, Karen & Cait Coker. "Constructing Lothiriel: Rewriting and Rescuing the Women of Middle-earth from the Margins.", *Mythlore*, 33(2), 2015, p.48.

³ 個人の生物学的性別は心理社会的性向と必ずしも一致するわけではない。セックスとジェンダーの不一致の例には、女性同性愛者 (Lesbian)、男性同性愛者 (Gay)、両性愛者 (Bisexual)、トランスジェンダー (Transgender)、無性愛者 (Asexual)、アジェンダー (Agender)、バイジェンダー (Bigender)、トゥースピリット (Two-spirit) 等がある。無性愛者 (Asexual) は性的欲求を持たない人、アジェンダーは「ジェンダーがない」自己認識を持つ人、バイジェンダーは男性と女性・両性の性自認を持つ人、トゥースピリットは複数の性役割を生きる人を指す。

⁴ Sunderland, Jane & Mark McGlashan. "Heteronormativity in EFL textbooks and in two genres of children's literature (Harry Potter and same sex parent family picture books)", *Language Issues*, 26(2). 2015, p.20.

成物である⁵。

今までジェンダー・アイデンティティの分析は、異性愛に基づくフェミニズムの視座からの分析が多かった⁶。しかし、フェミニズム的視点からの分析は、女性のイメージ批評に限定されてしまう恐れがある。

また、ジェンダー・アイデンティティの分析は、原作を参考にしながら、映画の中に登場するキャラクターを中心に分析する。

映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は小説から映画へ変容（アダプテーション）した作品である。変容の実行は製作者の意図、社会の状況、製作費、興行、時間などの様々な面から影響を受けている。

『ハリー・ポッター』の場合には、原作者 J. K. ローリングの要請によって、原作に忠実に映画化されていて、監督クリス・コロンバス（Chris Columbus）の第一作と第二作ではあまり変容がなかったが、アルフォンソ・キュアロン（Alfonso Cuarón）の第三作『アズカバンの囚人』以降変容が可能になった。

『ロード・オブ・ザ・リング』でも、キャラクターは同じでも、映画の中の役割が強化、または削除される場合がある。

映画に登場するキャラクターのジェンダー・アイデンティティは、各キャラクターの外見や衣装、行動、他のキャラクターとの関係などを基にして、把握することができる。特に、キャラクターの外見と衣装は性別を判断する基本的な基準となる。しかし、キャラクターの外見と衣装は観客一人一人の基準によって多様に解釈される可能性がある。つまり、キャラクターの外観や衣装だけではキャラクターのジェンダー・アイデンティティを明確にすることができない。したがって、ジェンダー・アイデンティティは、各キャラクターの行動や他のキャラクターとの関係などを参考にして分析しなければならない。

⁵ Butler(1990)によれば、ジェンダーとは「行為」であり、個人のジェンダー・アイデンティティはパフォーマティブな言語や言説を通して構築されるものである。そしてそのアイデンティティのカテゴリーは不変的で、固定的なものではないものである。つまり、ジェンダー・アイデンティティは階層や人種をはじめとする個人の複数の経験により、構成された複雑な社会的構成物である。

Butler, Judith, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge, 1990

⁶ Butler(1990)は既存のフェミニズムが女性のアイデンティティを統一化し、女性に対する支配的な世界を強化することを批判する。

第二節 『ハリー・ポッター』におけるジェンダー表象

1. 少女たちのジェンダー・アイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティは、前述したように、自分の性をどのように認識しているのか、すなわち自分が男性的、女性的、それ以外の状態のどれかに対する認識で、固定されたものではない。つまり、ジェンダー・アイデンティティは、物理的、身体的な経験や社会的条件との関係等により形成され、成長しながら周辺の要因によって変更または拡張されることもある。したがって、ジェンダー・アイデンティティは、文化によって異なり、また同じ文化内でも時間に応じて異なり、他のジェンダーとの関係の中においても変化する社会的構成物である。

ホグワーツ魔法魔術学校における生徒たちのジェンダー・アイデンティティは、ホグワーツ入学前と入学後に分けて考えることができる。特に、入学後の、ヴォルデモートとの戦いは、ジェンダー・アイデンティティの変化に大きな影響を与える。こうした基本的な内容を念頭に置きながら主要キャラクターのジェンダー・アイデンティティをみしてみる。

[ハーマイオニー・グレンジャー]

『ハリー・ポッター』に登場した数々の人物のうち、ジェンダーの観点から、最も注目すべきキャラクターは、おそらく J. K. ローリングの分身であり、ハリーの親友であるハーマイオニー・ジーン・グレンジャー (Hermione Jean Granger) である。ローリングは、ハーマイオニーをシリーズの核心人物で設定・維持し、「ハーマイオニーがいなければ、このシリーズもできなかつただろう」と彼女の存在をどのキャラクターよりも高く評価した⁷。

原作に描かれているキャラクターの外見を映画における外見と比較するのは難しいことであるが、原作ではハーマイオニーやハリーなどの主要キャラクターを魅力的ではないものと描写している⁸。特に、ハーマイオニーの外見はもじゃも

⁷ 作者 J.K.ローリングはハーマイオニーを少女時代の自分をモデルにしていると伝記に記されている。Smith, Sean. *J.K. Rowling: The Genius Behind Harry Potter*, London: Arrow, 2002 ; Fraser, Lindsey. *Conversations with J. K. Rowling*. New York: Scholastic, 2000.

⁸ しかし、フラー・デラクール(Fleur Delacour)の外見は、原作において、美しくて色気のある女性として描かれている。映画でも、彼女は「炎のゴブレット」をかけて戦う選手の 1 人として登場するが、彼女の美しさは、異性のみならず同性からも羨望と賞賛を集める。

じゃした髪と八重歯がある、きれいではない女の子として描かれている。このため、ドラコやロンのような男の子に侮辱をうけたり、パンジー・パーキンソン (Pansy Parkinson) のような女の子たちからかわれたりする。しかし、映画でのハーマイオニー (Emma Watson) は、前歯も大きくない、ずば抜けて整った顔立ちである (図 3-1 左)。特に、彼女は『炎のゴブレット』において、ハリーとロンなどの男性の視線を通して少女から美しい女性へ変容される。

彼女の女性的な姿は、クリスマス・ダンスパーティで、ハーマイオニーが着用したピンクのドレスを通して強調される (図 3-1 右)。ハーマイオニーの衣装は、原作では赤い光が漂う青いドレスと描写されるのに対し、映画では、しわのあるピンクのドレスに変わる。J. B. Paoletti (2012) によると、現代社会でのピンクとブルーの固定観念は、「ピンクは少女の色 (color of girls) であり、ブルーは少年の色 (color of boys)」と呼ばれるものである⁹。



左) : 『賢者の石』

右) : 『炎のゴブレット』

〈図 3-1〉 ハーマイオニー

John Stephens (1996) によると、内面的な強さ (inner strength) は、男性性であり、外見的な美しさ (outer beauty) は女性性¹⁰である¹¹。結局、映画『ハリー・ポッター』において、ハーマイオニーの外見に対するハリーと友人の態度は原作とは違って、彼女の女性性を強調している。

映画では、ハーマイオニーの外見だけではなく、彼女の態度や行動における女性性も強調される。ハーマイオニーの女性性がよく現れるのは、他人に配慮し

⁹ Paoletti, J. B., *Pink and blue: Telling the girls from the boys in America*, Bloomington: Indiana University Press, 2012. オンラインショップの利用者を対象としたアメリカのアンケート調査の結果、少年のうち 79%が青色の服を買い、少女たちの75%がピンク色の服を買ったとする。

Shakin, M., Shakin, D., & Sternglanz, S., "Infant clothing: Sex labeling for strangers.", *Sex Roles*, 1985, pp.12,955-12,964.

¹⁰ ここで言う女性性とは、女性に社会的に望まれる特性の集合として想定されるものである。

¹¹ Stephens, John. "Gender, genre and children's literature.", *Signal*, 79, 1996, p.19.

て弱者を保護する思考と行動である。彼女がネビル・ロングボトム (Neville Longbottom) のペットを探すことを手伝う場面や、映画では描かれていないが、原作において、ハウス・エルフの福祉に努める部分から、女性性の特徴である「温かさ」と「愛情の深さ」が垣間見える。

また、ハーマイオニーは、hogwartsの運営に干渉しようとする魔法省に対抗する為、「闇の魔術に対する防衛術」の学習組織を提案、「ダンブルドア軍団」をハリーに受け入れてもらうように粘り強く説得する。

そして、彼女は、「分霊箱¹²」を探す旅でも、奇想天外な魔法の呪文を唱えて、隠れ家を外の世界から守り、「知識保有および伝達者」として重要な役割を果たしている¹³。

これに対し、Ernelle Fife (2006) と G. Fristedt (2005) は、ハーマイオニーが「自分の豊富な魔法の知識と論理的な思考力」を利用して、ハリーが多くの危機を無事に乗り越えることができるように、あらゆる支援を惜しまない少女であると述べている¹⁴。

しかし、ハーマイオニーは、決定的な瞬間には、男性の助けを受けており、依存的、受動的な部分のある少女である。たとえば、ハーマイオニーは、自分がトロールとトイレに閉じ込められてしまったとき (『賢者の石』) や三大魔法学校対抗試合 (トライウィザード・トーナメント) で危険に直面したとき (『炎のゴブレット』)、そして、拷問を受けたとき (『死の秘宝 PART1』) などで、ハリーとロンの助けを受けている。これはハーマイオニーが決定的な瞬間には、女性性が現われることを表す。

Meredith Cherland (2008) は、ハーマイオニーがロンとハリーにとって母親や姉の役割を担っていると主張している¹⁵。ハーマイオニーは、『死の秘宝』で、ハリーとロンとともに逃走中、食事の用意や、ハリーとロンの傷やケガの治療、旅に必要な物の準備、スケジュールチェックなど、典型的な女性として役割を遂行

¹² 不死性を獲得するために自身の魂の一部を物体に閉じ込める術である。ヴォルデモートの分霊箱は8つである。

¹³ Cordova, Melanie J., "Because I'm a Girl, I Suppose!": Gender Lines and Narrative Perspective in Harry Potter.", *Mythlore: A Journal of J.R.R. Tolkien, C.S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 33(2), 2015, p.23.

¹⁴ Fire, Ernelle. "Wise warriors in Tolkien, Lewis, and Rowling.", *Mythlore: A Journal of J.R.R. Tolkien, C.S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 25(1), 2006, pp.147-162.

Fristedt, G., *Strong Girls Now and Then: A comparison between strong girls in classic and modern literature such as The Secret Garden and Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Master's Thesis, Department of Humanities and Social Sciences, English Kristianstad University, 2005, pp.1-15.

¹⁵ Cherland, Meredith. "Harry's Girls: Harry Potter and the Discourse of Gender.", *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, 52(4), 2008, p.278.

している(図 2-2 左)。

ハーマイオニーは、hogwarts魔法学校に入学して以来、2年間、自分を揶揄するドラコを、我慢して無視してきた。このようなドラコの行動に、感情を言葉で表現して、不快な状態を維持することは女性性を示す。

しかし、ハーマイオニーは、ときには男性性の特性ともいえる攻撃性を見せる。その例は、『アズカバンの囚人』において、罪なきバックビーク (Buckbeak) が処刑される場面の、ドラコの言動に対するハーマイオニーの行動からよくわかる。ハーマイオニーは、バックビークの処刑をせせら笑うドラコの姿を見て、彼の顔に怒りのパンチを投げるのである(図 3-2 右)。こうしたハーマイオニーの行動は、典型的な男性性を示している。



左) : 『死の秘宝 PART 1』



右) : 『アズカバンの囚人』

〈図 3-2〉 ハーマイオニー(2)

男性が女性に比べて攻撃的であることは、様々な研究で示されてきた。Jennifer Lento-Zwolinski (2007) によると、男性は、同じ年齢の仲間、また集団のなかにおいて、優位性を確保しようと、物理的な方法によって能動的攻撃性を見せるが、女性は相手からの攻撃を経験した後、相手との関係を断絶するなどの反動的攻撃性を表す¹⁶。

Crick & Grotpeter (1995) も、男性は身体的攻撃 (physical aggression) や言語的攻撃 (verbal aggression) といった顕在性攻撃 (overt aggression) を対象とするものが多いが、女性は関係を損傷させて他人を傷つける間接的な形の関係性攻撃が見られると主張する¹⁷。このほか、Hale et al. (2008) も、攻撃性は男

¹⁶ Lento-Zwolinski, J., "College students' self-report of psycho-social factors in reactive forms of relational and physical aggression.", *Journal of Social and Personal Relationship*, 24(3), 2007, pp.407-421.

¹⁷ Crick, N. R., & Grotpeter, J. K., "Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment.", *Child Development*, 66, 1995, pp.710-722.

性的な特徴であると述べる¹⁸。

ハーマイオニーが男性の領域である戦闘に参加するということは、彼女の男性性を表すことである。彼女はハリー、ロンと共に分霊箱探しの旅に出かけ、最後まで戦い抜いた。ハーマイオニーは、差別され、迫害されるハウスエルフの権利のために努力する「行動主義者」でありながらも、絶対的な悪と戦う戦争に参加する女性である¹⁹。しかし、最近のヤングアダルト向け SF 映画に登場する独立的で強力な十代の女性主人公とは異なる。

代表的な例は、『ハンガー・ゲーム』(The Hunger Games、2012) のカットニス (Jennifer Lawrence)、『ダイバージェント』(Divergent、2014) のトリス (Shailene Diann Woodley)、『メイズ・ランナー』(The Maze Runner、2014) のテレサ (Kaya Scodelario) などがあげられる (図 3-3)。『ハンガー・ゲーム』の主人公、カットニスは「最も力強い²⁰」、「強くて独立的であり、最も困難な状況でも生き残ることができる、欠点のない若い女性²¹」として登場する。

『ダイバージェント』でのトリスも、カットニスと同様に、家族や友人などの身近な人を守るための責任ある行動と社会への抵抗を通じて、自分の居住区域と共同体 (派閥) を救う英雄と女戦士の姿を見せてくれる。



左：『ハンガー・ゲーム/カットニス』中央：『ダイバージェント/トリス』右：『メイズ・ランナー/テレサ』

〈図 3-3〉 SF 映画での強力な 10 代の女性主人公

¹⁸ Hale III, W. W., Vander Valk, I., Akse, J., & Meeus, W., “The Interplay of early adolescents’ depressive symptoms, aggression and perceived parental rejection: A four-year community study.”, *Journal of Youth and Adolescence*, 37(8), 2008, pp.928-940.

¹⁹ Berndt, Katrin. “Hermione Granger, or, A Vindication of the Rights of Girl.”, *Heroism in the Harry Potter Series*, Ed. Katrin Berndt & Lena Steveker, New York: Routledge, 2016, p.174.

²⁰ Lem, Ellen and Holly Hassel. “‘Killer’ Katniss and ‘Lover Boy’ Peeta: Suzanne Collins’ Defiance of Gender-Genred Reading”, *Of Bread, Blood, and The Hunger Games: Critical Essays on the Suzanne Collins Trilogy*, Eds. Pharr, Mary F., & Leisa A. Clark, North Carolina: McFarland & Company, Inc., 2012.

²¹ Woloshyn V., Taber, N., & Lane, L., “Discourses of Masculinity and Femininity in The Hunger Games: “Scarred,” “Bloody,” and “Stunning””, *International Journal of Social Science Studies*. 1(1), 2013, p.157.

ハーマイオニーは、ヴォルデモートとの戦いが終わってから19年後に、ロンと結婚して家庭を持ち、母親となっている。これは、Heilman & Donaldson (2009) が指摘するように、もともとハリーとロンの従属的役割をしたハーマイオニーがロンとの結婚を通じ、その依存的なアイデンティティがより強調されたと言えるだろう²²。

E. T. Dresang (2004) は、フェミニズムを、すべての人の不平等をなくすための運動として定義しつつ、ハーマイオニーは「フェミニストの役割モデルではない (not a feminist role model)」と主張する²³。

結局、ハーマイオニーは、時には進歩的でフェミニスト的な面を見せるが、原作または映画シリーズの最終エピソードには、本来の女性性に戻る。こうしたことから、ハーマイオニーのジェンダー・アイデンティティは、Butler(1990)が言うように、固定的なものではなく流動的に変化することがわかる²⁴。

[ジニー・ウィーズリー]

ジニー・ウィーズリー(Ginny Weasley)は、シリーズ初期、内気で恥ずかしがり屋な性格であり、ハリーが現れたら、顔が赤くなってしまう女性らしさが描写されている。

Heilman (2003) は、ジニーを典型的な (archetypal) 少女であり、非常に受動的 (deeply passive) で弱く (weak)、そして、受容性 (receptive) のある少女であると言う²⁵。

しかし、『不死鳥の騎士団』では、ジニーは恋愛において女性だからといって常に受け身でいるのではなく自ら積極的になり、性的に奔放なイメージでとらえられる。つまり、彼女はいつも彼氏が絶えない「スラット (slut)」のような存在として描かれている²⁶。

恋愛経験が多いという事実は、今では、一般的に女性に否定的なものとなさ

²² Heilman, Elizabeth E., & Trevor Donaldson. "From Sexist to (sort-of) Feminist: Representations of Gender in the Harry Potter Series." *Critical Perspectives on Harry Potter*. 2nd edition. Ed. Elizabeth E. Heilman. New York: Routledge, 2009, p.145.

²³ Dresang, E.T., "Hermione Granger and the Heritage of Gender.", *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, Columbia: University of Missouri Press, 2004, p.241.

²⁴ Butler, J., *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, NY and London : Routledge, 1990.

²⁵ Heilman, Elizabeth E. "Blue Wizards and Pink Witches: Representations of Gender Identity and Power.", *Harry Potter's World: Multi-disciplinary Critical Perspectives*. Ed. Elizabeth E. Heilman, New York: RoutledgeFalmer, 2003, p.230.

²⁶ Cherland, op. cit., p.277.

れることもあるが、ジニーは女だからこうあるべきという概念を超え、それに縛られないことを示す。

ジニーはとても才能のある魔女であり、特にクィディッチが得意である。ジニーは幼い頃から兄のクィディッチ用箒に乗って空を飛ぶのが好きであった。

飯田貴子（2008）によれば、近代スポーツは、「男子マラソン」と「女子マラソン」、「サッカー」と「女子サッカー」という風に、性の二分割が当然のこととして認められてきた²⁷。つまり、あらゆるスポーツ競技は男女別々で行われている。これとは異なり、魔法界において最も人気のあるクィディッチは性別を超えたスポーツである。

ジニーは、ハリーがクィディッチを行うことを禁止された際に、ハリーの代わりにシーカー²⁸として選ばれる。ジニーのシーカーとしての才能は、彼女の兄たち、フレッドやジョージ、ロンによって証明される。

ジニーは、シリーズが進むにつれて、女性キャラクターの中で最も強い少女の一人になる²⁹。特に、『不死鳥の騎士団』からジニーは勇敢な女性に成長し、4年目にはハリーが率いた「ダンブルドア軍団」の主要メンバーになる。そして神秘部の戦い（『不死鳥の騎士団』）と天文台の塔の戦い（『謎のプリンス』）、hogwartsの戦い（『死の秘宝 PART2』）に参戦した。ジニーはハリーたちがいないhogwartsで、ハーマイオニーの代わりに強い女性キャラクターとして活躍する。また、彼女は、未成年者にもかかわらず、hogwartsで行われた決戦に参戦し、生き残る。

England, Descartes, & Collier-Meek (2011) のディズニー・プリンセス映画研究によると、女性的特徴は、身体的弱さ、感情表出、繊細さ、養育、手助けなどである³⁰。これに比べ、ジニーはむしろ自己主張が強く、独立性と勇気のあるキャラクターであると言える。

実際に、作家のローリングもジニーを知的、力強い、意志が強い特別な才能のある魔女であると語っている。こうした点からジニーはディズニー・プリンセス映画の中のジェンダー化されたプリンセスの行動、特徴とは異なる。

²⁷ 飯田貴子 「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在——デスクへの調査から見えてくるもの」、『スポーツとジェンダー研究』、6巻、2008年、17-18頁

²⁸ クィディッチのポジション名

²⁹ Limbach, Gwendolyn. “Ginny Weasley, Girl Next-Door?” *Hog’s Head Conversations: Essays on Harry Potter*. Travis Prinzi, Ed. Allentown, PA: Zossima Press, 2009. pp.167-187.

³⁰ England, D. E., Descartes, L., & Collier-Meek, M. A., Gender role portrayal and the Disney Princesses. *Sex Roles*, 64, 2011, pp.557-558.

前述したように、彼女はシリーズを追うごとに存在感のあるキャラクターになるが、分霊箱探しの旅に直接関与していなかったことから、女性主人公ハーマイオニーに比べて、ストーリー上の役割がはっきりしない。

ヴォルデモートを倒した後の物語終盤には、ジニーは、ハリーとの結婚のため仕事を引退し、ハーマイオニーと同様に、仕事と家庭を両立させている。そして彼女はジェームス・シリウス、アルバス・セブルス、リリー・ルーナの2男1女をもうけた。映画のラストシーンであるキングス・クロスのプラットフォームで、ジニーは、夫であるハリーと子どもたちの少し後ろを歩いてついて行く(図3-4)。

ジニーのこのような姿は、ハーマイオニーと同様に、伝統的でステレオタイプな女性像を典型的に示しているもので、家父長制的秩序に従うことを表す³¹。



『死の秘宝 PART2』

〈図3-4〉 キングス・クロスのプラットフォームでのハリーとジニーの家族

しかし、ハーマイオニーやジニーが、女性性³²を否定的に見る、既存のジェンダー秩序を転換させることはできなかったとしても、家父長制や男性中心主義的な社会のあり方に対して、転覆的な「声」は出したと考えられる。

これにより、『ハリー・ポッター』に、既存の男性中心のファンタジー小説と映画の支配的な叙事を転覆しようとする試みがあったと考えられる。

³¹ 『ハリー・ポッター』では、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)原作の映画『アントニーとクレオパトラ』(Antony and Cleopatra, 1972)で見ることができるクレオパトラのような、セクシュアリティや女性性を持って、ローマ社会を転換させるぐらいのキャラクターはいなく、『ハンガー・ゲーム』のカットニスのように強力なキャラクターをみることもできない。

³² ジェンダー・アイデンティティを示す女性性と男性性の特徴は、研究者によって多様に提示される。例えば、Cejka & Eagly(1999)は、分析的であり、勇敢であり、支配的であり、大胆なことを男性性に見て、優しい、愛情の深い、養育的な、協調的なのは、女性性であると定義する。

Cejka, M. A., & Eagly, A. H., "Gender-stereotypic images of occupations correspond to the sex segregation of employment.", *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1999, pp.413-423.

2. 女性と母性愛

[モリー・ウィーズリー]

ロンの母親、モリー・ウィーズリー (Molly Weasley) は魔法使いでありながら、料理をし、洗濯をし、子供の世話をするなど日々家事に追われている (図 3-5 左)。しかし、モリーは夫に小言を言い、息子たちに怒鳴りつけるなど、たくましい妻であり、母である。

モリーはまた、リータ・スキーターが書いたでたらめな記事をそのまま受け入れてハリーに同情したり (図 3-5 右)、雑誌『週間魔女』のゴシップを信じてハーマイオニーに冷たい態度をとったりする通俗的な一面もある。まさに、魔女である点を除けば、どこにでもいそうな主婦である。



左：『賢者の石』



右：『死の秘宝 PART1』

〈図 3-5〉 モリー・ウィーズリー

モリーを最もよく表す言葉は「母性愛」であるといえるだろう。特に、モリーはベラトリックス・レストレンジ (Bellatrix Lestrange) との闘いにおいて、彼女は子供たちに対する母性愛を見せてくれる。

ヴォルデモートとの最終決戦のとき、彼女はベラトリックスが放った死の呪文が、娘のジニーに当たりそうになった場面を見て感情を爆発させ、ベラトリックスとの一騎打ちに勝利した (図 3-6)。



『死の秘宝 PART2』

〈図 3-6〉 モリーとベラトリックス

モリーはこの闘いで娘のジニーを守っただけではなく、hogwartsの戦いで、ベラトリックスに殺された四男フレッド・ウィーズリー (Fred Weasley) の仇を討ったのである。彼女たちの戦いは、ベラトリックスのヴォルデモートに対する「狂信的な愛」と子供たちに対するモリーの「母性愛」との闘いであり、母性愛が勝利した闘いであると言える。

彼女の愛情は自分の子供にだけ向けられるのではなく、ハリーやハーマイオニーにも注がれ、実質的に母親の役割をする。彼女は特に、ハリーを家族の一員として迎え、世話もする代理母の役割をする³³。Thiel (2008) によれば、ウィーズリー家は家族に対する真の意味を含む「無条件の愛の世界」であると述べている³⁴。このように、モリーに代表される母の犠牲は、『ハリー・ポッター』で繰り返されるテーマである³⁵。

[ナルシッサ・マルフォイ]

『ハリー・ポッター』には、ウィーズリー家以外に、マルフォイ家がよく登場するが (図 3-7)、マルフォイ家もウィーズリー家と同様に、家庭における夫婦の役割は、「夫=生計を立てる、妻=家事を引き受ける」という性別分業に基づく役割関係の姿が対照的に描かれている³⁶。

³³ Winters, Sarah Fiona. "Bubble-Wrapped Children and Safe Books for Boys: The Politics of Parenting in Harry Potter." *Children's Literature*, 39, 2011, p.223.

³⁴ Thiel, Elizabeth. *The Fantasy of Family: Nineteenth-Century Children's Literature and the Myth of the Domestic Ideal*, New York: Routledge, 2008, p.168.

³⁵ Wolosky, S., "Harry Potter's ethical paradigms: Augustine, Kant, and feminist moral theory.", *Children's Literature*, Hollins University, 2012, p.209.

³⁶ Wallace, David L., & Tison Pugh. "Teaching English in the World: Playing with Critical Theory in J. K. Rowling's Harry Potter Series.", *The English Journal*, 96(3), 2007, p.98.



『死の秘宝 PART2』

〈図 3-7〉 マルフォイ家族

hogwartsの戦いのとき、ナルシッサ・マルフォイ (Narcissa Malfoy) は、hogwarts城のどこかに隠れている自分の息子の安否だけを心配してヴォルデモートにハリーが生存していることを隠す。これは彼女に与えられた死喰い人の役割を拒否し、献身的な母親の役割を選択したことを表す。このようなナルシッサの姿は、最後の瞬間まで、息子の生存のために、ヴォルデモートに対抗して命を投げ捨てるハリーの母親リリーを連想させる。

リリーは、ヴォルデモートが1歳のハリーを殺害しようとした際、身を挺してハリーをかばい、そのお蔭でハリーは生き残り、ヴォルデモートは肉体を失った。結局、過去のヴォルデモートは、息子ハリーへのリリーの愛と犠牲に敗北し、現在のヴォルデモートも、息子を守るために偽ったナルシッサによって悲惨な最期を迎える。

結局、モリーとナルシッサの母性愛は、絶対悪であるヴォルデモートを倒すことができる唯一の強大な力の源泉であるという事実を示す。

[ドローレス・アンブリッジ]

ドローレス・アンブリッジ (Dolores Umbridge) は魔法省の長官コーネリウス・ファッジ (Cornelius Fudge) に向けた過度の忠誠心と、純粋血統至上主義を志向、盲信する機会主義者である。映画の中では、家庭内においての彼女の姿が見られないが、家庭外の様子を通して、権力に過度に執着していることがわかる。

すでに彼女の権力は、魔法省の緊密な業務関係から始まり、学校職員と規制に関する決定を下すことができるほど強力である³⁷。それにもかかわらず、彼女はよ

³⁷ アンブリッジと同様にマクゴナガルもhogwartsの校長ダンブルドアの協力と、学校の副校長として強い権力を持っている。しかし、二人の違いは、アンブリッジがより多くの権力を欲しがることに対し、マクゴナガルは自分がいる場所で満足している様子を見せている。

り高い地位や、より強い権力を求める。

それに、アンブリッジの行動は暴力的である。例えば、『不死鳥の騎士団』において、彼女は生徒マリエッタ・エッジコム (Marietta Edgecombe) を捕まえて、ハリーの組織した「ダンブルドア軍団」の存在を証言するように、暴力を振り回す。こうした権力への強い欲望と暴力的な行動は男性性の特徴である。伊藤公雄(1993)は、男性が「権力指向的」であるとし³⁸、James W. Messerschmidt (2000) は、多くの男性にとって、暴力は男性性を作り上げるための適切な資源として、役割を果たしている³⁹と論じている。

アンブリッジの行動は、このように典型的な男性性を示しているが、一方では、女性性の特性も見ることができる。例えば、彼女はベルベットのリボンで飾られた帽子を被り、柔らかいピンク色のカーディガンを着ているだけではなく、彼女のオフィスもピンク色で装飾されている (図 3-8) ⁴⁰。また彼女は、原作で描いているように映画でも、ひらひらする (fluttery)、女の子らしい (girlish)、甲高い声 (high-pitched voice) で話す。



『不死鳥の騎士団』

〈図 3-8〉 アンブリッジと彼女のオフィス・ルーム

アンブリッジは、権力への強い欲望と暴力的な行動を通じて、「男性性」というペルソナ⁴¹を身につけるとともに、帽子やカーディガンなどの小道具を用いることにより女性性の特性も強調している。彼女が男性性のペルソナを身に着けることは、魔法世界においても、主流文化が男性文化であることを表していると思わ

³⁸ 伊藤公雄 『男性学入門』、作品社、1996 年

³⁹ Messerschmidt, James W., *Nine Lives: Adolescent Masculinities, the Body, and Violence*, Westview Press, 2000.

⁴⁰ 『ハリー・ポッター』の衣装を担当したデザイナーの Jany Temime によると、映画が進むにつれて、アンブリッジの衣装のピンク色を濃くしていったという。これはアンブリッジがどんどんヒステリックになっていくのに合わせたのである。

⁴¹ 「ペルソナ」は、ラテン語の単語「persona」に由来する言葉で、元来、舞台上で俳優のつける仮面のことであるが、ユング(Carl Gustav Jung)は人間の外的側面をペルソナと呼んだ。

れる。

また、アンブリッジが「女は家庭で家事育児」という女性に期待される文化的ジェンダー規範(cultural gender norms)に従わないということの意味する⁴²。

『ハリー・ポッター』の魔法世界ではジェンダーに対する偏見と固定観念が存在している。特に、成人女性の描かれ方に注意して『ハリー・ポッター』を分析すると、「男は外で働き、女は家庭を守る」というステレオタイプな伝統的女性が支配的とみなされる⁴³。また、理想的な母親は、子供のために、常に献身的で犠牲になる女性という意識を高めている。

これは Gallardo-C. & Smith (2003) がウィーズリーの母モリーを「良い (good) 母」、ハリーの母リリーを「犠牲的な (sacrificial) 母」として描写するのに対し、ハリーの叔母であり、ダドリーの母であるペチュニアは童話の中の継母に似ているように描かれていることからよく分かる⁴⁴。

良い母親は子供を常に第一に考えていることで、養育 (nurturing) と献身的な愛 (self-sacrificing) が期待される⁴⁵。しかし、モリーとナルシッサなど母性役割を遂行する女性キャラクターは、女性というジェンダーに限定されておらず、彼女たちが置かれた環境と、各個人の価値観など多くの面で様々な母性役割を遂行している。

自己犠牲を前提とする母性愛を持った母親が「母らしい」と規範され、母の他者志向性を正当化することは、男性支配価値観に起因すると言うことができる。つまり、母性本来の性質ではなく、家父長制から生まれたイデオロギーである。

3. 男性たちのジェンダー・アイデンティティ

[ハリー・ポッター]

『ハリー・ポッター』が他の映画と異なるところは、シリーズが進むにつれて

⁴² ジェンダー規範は、男性と女性がどう行動し、どのような外見をすべきか、という社会規範のことを指す。

⁴³ Alston, Ann. *The Family in English Children's Literature*. New York: Routledge, 2008.

Avery, Gillian. "The family story.", *International Companion Encyclopedia of Children's Literature*, 2nd Ed. Peter Hunt, Abingdon: Routledge, 2004, pp.454-466.

Denny, Kathleen E., "Gender in Context, Content, and Approach: Comparing Gender Messages in Girl Scout and Boy Scout Handbooks.", *Gender & Society*, 25(1), 2011, pp.27-47.

⁴⁴ Gallardo-C., Ximena, and C. Jason Smith. "Cinderella: J. K. Rowling's Wily Web of Gender.", *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol, London: Praeger, 2003, pp.191-205.

⁴⁵ Etaugh, Claire A., & Bridges, Judith S., *Women's Lives: A Psychological Exploration*, Routledge: New York, 2006.

キャラクターが子供から大人へと成長するが、実際に俳優たちも子供から大人へと成長していることである。

第一作『賢者の石』でのハリーは、原作での描写は自分の体より大きい古い服を着て、スコッチテープで固定された眼鏡をかけている、恵まれない家庭環境で育った子供であるように見える(図 3-9 左)。しかし、シリーズが進むにつれて成長し、身だしなみが良くなる(図 3-9 中央、右)。



左：『賢者の石』

中央：『炎のゴブレット』

右：『死の秘宝 PART1』

〈図 3-9〉 映画『ハリー・ポッター』の中、ハリーの姿

こうした外形的な変化だけでなく、ハリーの性格や行動もシリーズが進むにつれて変化する。シリーズ初期には、ハリーの性格の特徴は自信のなさであった。これは、残酷な叔母一家との生活にその原因がある。ハリーは幼少時に魔法界から隔絶され、叔母一家から長期間冷遇されながら育ったため、自分に自信が無く卑屈な面がある。

ハリーは階段の下の物置 (cupboard under the stairs) に住んで (図 3-10 左)、料理や掃除などの家事をするが (図 3-10 右)、他の家族とは異なり、重要な活動に参加することが禁止されている。家事は、典型的な女性性を示すものといえる。



『賢者の石』

〈図 3-10〉 ダーズリー家でのハリー

Ming-Hsun. Lin (2018) は、映画『ハリー・ポッター』分析を通じて、虐待されるハリーはシンデレラと似ていると主張する⁴⁶。すなわち、シンデレラは部屋がなく、暖炉のそばで寝たり、家事をしなければならないし、ダンス・パーティーにも行けない。Gallardo & Smith (2003) もハリーはダーズリー家の冷遇によって「女性化」され、シンデレラのような姿を見せると主張した⁴⁷。

こうした家庭環境で育ったハリーは、ホグワーツ魔法魔術学校に入学してからは茶目っ気のある少年に変化する。またハリーは、『秘密の部屋』では、嘘をついて本を図書館から持ち出したり、相手を倒すために、決闘のきまりを破ったり、様々な規則を破ることも厭わない。

ハリーは友人や友人の家族を非常に大切にす、純粋で情の厚い少年である。映画では、名付け親であるシリウスがベラトリックスの攻撃で命を失ったとき、また終始一貫して自分を守ってくれたダンブルドアが亡くなったとき、ハリーは泣いてしまう。そしてヴォルデモートの部下につかまった自分を救ってくれたドビーが死んだ時、ハリーは大声で叫ぶ。こうした彼の行動は、典型的な女性性としてすることができる⁴⁸。つまり、一般的に男は感情を表出しないが、女は感情を表出する。男は涙を見せたり弱さを吐露したりしないが、女は涙を見せたり弱さを吐露したりするといわれている。一般的に英雄として創造される人物像は、知恵や正義感にあふれる「よい」人物であり、困難に立ち向かう勇気と突出した能力を備えた人物である。これは男性性そのものである。

Jack Zipes (2001) によると、ハリーはシリーズ最初から英国的ボーイスカウトの典型であり、英雄的特質を表す⁴⁹。それはシリーズ初期、ハリーは、まだ、魔

⁴⁶ プリンセスのイメージの原型が存在するわけではない。Lin(2010)によると、イタリアなどのヨーロッパでの様々なプリンセスのイメージがディズニー映画の影響で、あらゆる苦難で本当の愛を見つけるプリンセスの姿が、プリンセスの固定観念のモデルとなった。Beauvoir(1953)は、おとぎ話のプリンセスは、過度に従順で、Lurie(1971)は、受動的なプリンセスの姿が魅力的な特性とみなされると主張している。

Lin, Ming-Hsun. "Fitting the Glass Slipper: A Comparative Study of the Princess's Role in the Harry Potter Novels and Films.", *Fairy tale films: Visions of ambiguity*, Eds. Greenhill, P., & Matrix, S. E., Logan, Utah: Utah State University Press, 2010.

Beauvoir, Simone de. *The Second Sex*, Trans. H. M. Parshley, New York: Knopf, 1953.

Lurie, Alison. "Witches and Fairies: Fitzgerald to Updike.", *New York Review of Books*, 17(9), 1971, pp.6-11.

⁴⁷ Gallardo-C., and Smith. op. cit., pp.191-205.

⁴⁸ 映画でのハリーの姿と小説の中でのハリーは違う姿を見せる。Heilman(2003)によると、原作のハリーはヘゲモニックな男性性を持っている。ヘゲモニックな男性性は恐怖(fear)、泣くこと(cry)、くすくす笑い(giggle)、うわさ話(gossip)を表現することなく、外観(appearance)を懸念せず、スポーツが上手であり、持ち物(possessions)、お金(money)及び名声(prestige)を得ることができることをいう。

Heilman, op. cit., pp.221-239.

⁴⁹ Zipes(2001)はハリーが「いたずらっ子であるが、白人であり、アングロサクソンであり、スマートで運動もでき、正直な英国ボーイスカウトの典型」と評価する。

Zipes, Jack. *Sticks and Stones : The Troublesome Success of Children's Literature from Slovenly Peter to Harry Potter*, London: Routledge, 2001, p.178.

法にも未熟な少年であるが、最高の魔法使いであり悪の化身でもあるヴォルデモートとの対決を避けない、ことでも分かる。

Joseph Campbell (1993) によれば、英雄の旅とは、旅立ち・別離、通過儀礼、帰還という基本骨格を示している⁵⁰。この構造のように、ハリーは冒頭で日常であったダーズリー家を離れ、非日常領域である hogwarts で不思議な冒険をして、敵役ヴォルデモートと対決するが、結末では日常世界に帰ってくる。このことから、ハリーは、典型的な英雄神話の模範を成していると見ることができる。

しかし、映画におけるハリーのジェンダー・アイデンティティは、シリーズ初期には女性性が現れるが、シリーズが進むにつれて男性性が強化される。一部の学者はハリーが強い男性性と柔らかい女性性を同時に持ったハイブリッドな男性性 (Hybrid masculinity) を表すと主張する。例えば、A. Wannamaker (2006) は、ローリングが主人公を伝統的な「男性性」の特徴と、非伝統的な「女性性」の特徴を持った複雑で不完全な少年に描写しているという⁵¹。

[ロン・ウィーズリー]

純血の魔法使いであるロンは、ハリーやハーマイオニーの親友である。第一作『賢者の石』でのロンの姿は、原作のように兄たちのお下がりと思われる古い服を着ている。ロンの家族が裕福ではないということは、『ハリー・ポッター』で一貫している。例えば、最初に hogwarts に向かう列車の中で、ロンは母親の手作りサンドイッチを食べるが、両親が残してくれた財産のあるハリーは車内販売で大量のお菓子を買って食べる (図 3-11)。



『賢者の石』

〈図 3-11〉 hogwarts 特急列車でのロン

⁵⁰ Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*, Bollingen, 1993.

⁵¹ Wannamaker, A., "Men in Cloaks and High-heeled Boots, Men Wielding Pink Umbrellas: Witchy Masculinities in the Harry Potter Novels.", *The Looking Glass: New Perspectives on Children's Literature*, 10(1), 2006, p.160.

ロンは、感情の揺れやすさや傷つきやすさを帯びた少年でもある。結局、ロンの家族の経済状況は彼の性格形成、特に自尊心がない、卑屈な面に影響を与えていると思われる。しかし、彼の性格形成と行動に影響を及ぼしたのは、経済状況だけではない。学生時代から世間の注目を集めることの多かった優秀な兄たち（首席だった長男ビル、クイディッチのキャプテンだった次男チャーリー、ビル同様優秀なパーシー、いたずらっ子でみんなの人気者の双子フレッドとジョージ）や人気のある賢い妹、そして、いつも自分より先にいるハリーと比べて、自分は平凡であるという劣等感を抱いていた。

ロンの劣等感は第四作『炎のゴブレット』で明確に現れる。ダンス・パーティ直前までハーマイオニーをパートナーに誘うことは思いつかなかったにも関わらず、彼女のパートナーがビクトール・クラム (Viktor Krum) であることをパーティ会場で知ると、それまで熱狂的なファンであったクラムの悪口を言い続ける。このため、ロンは自分のダンスパートナーであるパドマ・パチル (Padma Patil) に愛想をつかさされるほどであった。妬みは人と比べるということを通じて経験される。W. G. Parrott (2001) は、妬みを構成する代表的な感情として「切望」や「劣等感」など、6種類の感情を挙げる⁵²。その中で、ロンを一番強く左右している感情は、自分の短所や、相手より自分が劣るという「劣等感」である⁵³。

Lois Tyson (2006) によれば、伝統的な男性性は肉体的に強力であり、感情に溺れることなく、禁欲的である。そして、男性性は恐怖と痛みを隠し、泣くことや感情的な圧倒などの弱点を示さず、何事も失敗しないことである⁵⁴。

ロンは蜘蛛恐怖症である。『秘密の部屋』では、巨大な蜘蛛アラゴグ (aragog)⁵⁵に襲われ、パニックに陥ったこともある。しかし、彼は愛する人々を危害から守ろうとする気持ちは強い。特に妹ジニーをととても大切にしている。ジニーが怪物に連れ去られた時、ロンは自分も死んでしまうかもしれないのに、ジニーを助けに秘密の部屋へ向かう。ロンはハリーと共に怪物バジルスク (大蛇) を倒し、史上最強の闇の魔法使い、ヴォルデモートから、無事ジニーを救助することができ

⁵² Parrott, W.G., "The emotional experiences of envy and jealousy.", *Emotions in Social psychology*, Ed. G. W. Parrott, Philadelphia: Psychology Press, 2001, pp.306-320.

⁵³ ロンと同様に、弱い性格を持っている男性キャラクターは、ネビル・ロングボトムである。シリーズ初期の彼は、なにをやっても失敗ばかりで、自分に自信が持てない性格であった。特に恐怖心を抱いていたスネイプ先生が担当する授業では、彼は普段以上に失敗する。

⁵⁴ Tyson, Lois. *Critical Theory Today: A User-Friendly Guide*, London: Garland Publishing, Inc, 1999.

⁵⁵ 人なみの知能を持ち、言語が話せる巨大な蜘蛛

た。このようにロンは愛する人々を危害から守ろうとする保護本能は男性の特徴として見ることができる。しかし、ロンは前述したように、恐怖と心配、依存的な面も見せている。

Heilman & Donaldson (2009) によると、主人公の男性性 (protagonist's masculinity) は、他の男性より強くなければならないと主張する⁵⁶。ハリーが独立したキャラクターであろうと依存的であろうと、ロンはハリーより依存的であると考えられる。結局、ヘゲモニックな男性階層構造では、ロンの方がハリーよりステレオタイプの男性性を持っていないと思われる。そして、ロンもハリーと同様に、固定された男性性を示さず、アイデンティティはパフォーマンスティブに行われていることが分かる。

[ルビウス・ハグリッド]

『ハリー・ポッター』の中で、ジェンダー固定観念を一番無視したキャラクターはルビウス・ハグリッド (Rubeus Hagrid) である。ハグリッドは時たますごく男性的であり、男性の力と肉体的な面貌を見せるが、女性らしい感情が発達している。すなわち、ハグリッドは男らしい反面、母親のような優しさ、両方を持っているキャラクターである。

Wannamaker (2006) によると、ハグリッドが伝統的な男らしさと母親のような性質を持っていると述べている⁵⁷。Wolfgram (2002) は、ハグリッドを暴力 (violence) や支配 (domination) などの物理的行為より、愛 (love)、悲しみ (sadness)、同情心 (compassion)、心配 (worry) と表現するのが一般的だと述べている⁵⁸。すなわち、ハグリッドのいかつい容貌とは違い、内面は全く正反対で反転の特徴があるキャラクターだと見ることができる。ハグリッドは心が弱くて何度も涙を見せる。『賢者の石』では、ハリーの両親が死んだと言いながら泣き、またその話をハリーに説明する時も泣いている。最後のシリーズ『死の秘宝』では、ハリーが死んだと思い込んで泣いてしまう。これらはハグリッドの女性性が良く現れる部分である。

ハグリッドのジェンダーの固定観念の破壊は、伝統的女性の手仕事をするこ

⁵⁶ Heilman and Donaldson, op. cit., p.155.

⁵⁷ Wannamaker, op. cit., p.160.

⁵⁸ Wolfgram, Susan. "Gender Informed Parenting: A Review of the film Harry Potter and the Sorcerer's Stone: What Not Hermione Granger?," *Journal of feminist Family Therapy*, 14(3), 2002, pp.101-132.

でも見ることができる。例えば、原作でハグリッドは自分の小屋で、常に、ハリー達に直接料理をもてなす。ハグリッドは、森のすべての生物に対して献身的に世話をする。特に、彼は三頭犬のフラッフイー (Fluffy) を育み、ドラゴンの卵をこっそり孵化させて自分の子のように保護する。ハグリッドは孵化したドラゴンに「ノーバート (Norbert)」という名前をつけて、自分を「ママ」と呼ばせている。

ハグリッドは、前述したように、『ハリー・ポッター』で最も「情動的なキャラクター (emotional character)」であり、伝統的なジェンダー規範を壊すキャラクターである。以上のようにハグリッドは、既存のジェンダー役割を転覆する。

[ダンブルドア]

『ハリー・ポッター』の世界は、異性愛規範 (heteronormativity) のシステムに基づいている。異性愛規範は、異性愛が好ましいものであり、唯一受け入れられる性的指向であると考えられることである⁵⁹。

しかし、ローリングはインタビューを通じて、ダンブルドアのことはずっと同性愛者であると考えており、ゲラート・グリンデルバルドに恋愛感情を抱いていたことがあると語った⁶⁰。

彼女は聴衆からの質問を受けつけた際、ダンブルドアに「恋人」がいたかどうかを問われた。

「ダンブルドアはゲイです」と彼女は答え、かなり昔に善と悪の魔法使いの戦いで撃退したライバル、ゲラート・グリンデルワルトに恋していたとつけ加えた。

一瞬息をのんだ聴衆からは、拍手が起きた。

「みんながそんなに喜んでくれるのなら、もっと早く言えばよかったわ」と彼女は述べた。

(BBC News, 20 October 2007)

⁵⁹ ジョー・イーディー、『セクシュアリティ基本用語事典』、金城克哉訳、明石書店、2006年

⁶⁰ BBC News, 20 October 2007

このため、ジェンダー的な側面でアルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore) とゲラート・グリンデルバルド (Gellert Grindelwald) の関係に多くの関心が集中してきた。特に、シリーズのファンたちは、スピノフ映画新作『ファンタスティック・ビースト』で、若きダンブルドアとグリンデルバルドの恋物語が描かれるものだと期待していたようである。ところが、この仮定された関係は、8本の映画『ハリー・ポッター』はもちろん、2本の『ファンタスティック・ビースト』にも登場しない。

ローリングは、原作及び映画の中でラブロマンスが描かれないにもかかわらず、同性愛者間のラブロマンスが描かれることを匂わせてファンを誘導する「クィア・ベイティング (Queerbaiting)」⁶¹を行なっている。つまり、ローリングはクィアを再現するような発言を通じて、LGBTQ+の読者をはじめ、世間の注目を集めようとするが、実際にはクィアを再現しないことで、同性愛を不快に感じるかもしれない一般の人々や同性愛嫌悪者の非難は避けようとしている。

『ハリー・ポッター』は、原作者ローリングの要請によって、原作に忠実に映画化されている。シリーズの読者と、観客はローリングのクィア・ベイティングについて「性的指向を利用している」と批判している⁶²。LGBTQ+に対する理解が深まり、権利運動が盛んになった昨今では、クィア・ベイティングの厳しい目が向けられるようになっている。

作家ローリングの発言がどうであれ、実際には、原作と映画では、異性愛の世界だけが描かれており、同性愛の存在に言及がなく、ダンブルドアがゲイという発言は、暗黙的に作品の中で無視されている⁶³。

第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』におけるジェンダー表象

1. 『指輪物語』での女性キャラクター

『指輪物語』は「男性たちの冒険」を描いた作品である。指輪運搬者のフロド

⁶¹ クィアあるいはクィア (Queer) とは、元々は「不思議な」「風変わりな」「奇妙な」などを表す言葉であり、同性愛者への侮蔑語であったが、1990年代以降は性的少数者全体を包括する用語として肯定的な意味で使われている。

⁶² Morgan, Richard. It's not enough for J.K. Rowling to say her characters are queer. Show it to us. *The Washington Post*, 2019.3.19.

⁶³ Pugh, Tison, and David Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J.K. Rowling's Harry Potter Series.", *Children's Literature Association Quarterly*, 31(3), 2006, p.260-281.

から始まって、彼と一緒に動く「旅の仲間」も、悪方のサウロンとサルマン、オーク、ゴラムも全員男性である。『指輪物語』にもエオウィン(Eowyn)とガラドリエル(Galadriel)、アルウェン(Arwen)のような善側の女性キャラクターがいるが、「旅の仲間」に参加しない。また、善方はもちろん、悪役の女性キャラクターもいない。そして、戦場に出る女性がエオウィンしかいない。『指輪物語』において、女性キャラクターの登場は、極めて制限的であるが、その中でも比重が大きい女性キャラクターは、前述したエオウィンとガラドリエル、アルウェンである。特に、エオウィンは、『指輪物語』におけるジェンダー研究において、盛んに議論されるキャラクターである。

[エオウィン]

エオウィンはローハン王セオデン (Théoden) の姪で、セオデン王はペレンノール野での戦いを前に、彼女に王位を譲り渡す。これは死を覚悟して出征する状況を前提にした王位継承である。エオウィンは死を覚悟し、男性同様に参戦することを望むが、女性であるために戦場に出るのは許されなかった。これは好意的性差別に該当すると言える⁶⁴。つまり、女性は男性の愛情と保護が必要な無能で弱い人であるという差別のことを表す⁶⁵。しかし、エオウィンは周囲の人々の引き止めにもかかわらず、ドラッグキング(drag king)⁶⁶に扮して参戦する。

近寄るにつれて、メリーは馬上の人が編んだ長い髪を黄昏の光にきらめかせた婦人であることに気づきました。しかしかの女は兜をかぶり、戦士のように胴までの鎖かたびらをつけて、腰には剣を吊るしていました。

(小説『王の帰還』(上)、130頁)

⁶⁴ ホビットのメリー(Merry)も、エオウィンと同様に、一人の戦士としての扱いを受けなかった。

⁶⁵ Dardenne, B., Dumont, M., & Bollier, T., "Insidious dangers of benevolent sexism: Consequences for women's performance.", *Journal of Personality and Social Psychology*, 93(5), 2007, pp.764-779.

⁶⁶ ドラッグ(Drag)は、一般的には通常特定の性役割と関連付けられる服装を、他方のジェンダーを持つ者が着用することを指し、「クロスドレッシング(cross-dressing)」の一種と定義する。男性が女性性を強調するメイクや服装をすると「ドラッグクイーン(drag queen)」と呼んで、逆に女性が男性性を強調して表現する「ドラッグキング(drag king)」という。ドラッグキングは、主に男性の姿に異性装した女性パフォーマーのことを表す。このようなクロスドレッシングは文学と歴史的な例では見つけることができる。ウィリアム・シェイクスピアの『ヴェニス商人』のポーシャは、変装して商人アントニーオを救う。そして、フランスの国民的英雄のジャンヌダルクは髪を短く切り、男装して甲冑を身に付けて戦場に行った。

ドラッグキングは、主に男装した女性パフォーマーのことを表す。エオウィン
はガラドリエルとアルウェンとは異なり、男装した戦士であっても、鎧を着て刀
を持って馬に乗る「中つ国」の戦闘に直接参加するローハン唯一の女性である。
Fredrick & McBride (2001) はエオウィンが男装をして戦闘に参加したのは、戦
闘が男の役割であることを前提とするものであり、ジェンダー・ステレオタイプ
を強化することだと指摘する⁶⁷。

また、Marion Zimmer Bradley (1968) も彼女がナズグールの魔王を殺すことが
できたのは、男性に変装したからだということを示唆しており、これは問題であ
ると主張する⁶⁸。しかし、エオウィンはドラッグキングを通して既存のジェンダ
ー・アイデンティティに抵抗し、ジェンダー転覆を可能にするパフォーマンスを
遂行しているとも言える。これは、すべてのジェンダーはドラッグであり、ドラ
ッグはジェンダーのパロディであるからである。そして、このようなドラッグは、
演じる人の生物学的な性と、演じられるジェンダーの統一性に不調和を起こす。
これは、「ジェンダーは模倣の構造を持つ」からである⁶⁹。エオウィンは戦う女性
として描かれているが、最終的には剣を捨てて、ファラミアと結婚する、という
結びになっている。

[ガラドリエル]

もう一人の女性キャラクターであるガラドリエルは、「中つ国」の最強の女性
エルフとして知恵と共感能力、洞察力などの面で、夫のケレボルンを凌駕すると
描写される。そして彼女は強靱な意志の持ち主であり、サウロン(死人占い師)の
力に対処するために、「白の会議」を組織する。こうした強靱な意志と強いリーダ
ーシップは前に述べたように、男性性の特性であり、ガラドリエルは男性性の特
性を持っていると言える。

ガラドリエルの主な役割は、彼女の贈り物を持った「旅の仲間」をサポートし
て、傷ついて帰ってきた者たちに癒しを与えるという「母性的」とも言える役割

⁶⁷ Fredrick, Candice & Sam McBride. *Women Among the Inklings: Gender, C.S. Lewis, J.R.R. Tolkien, and Charles Williams*, Westport, CT: Greenwood, 2001, p.113.

⁶⁸ Bradley, Marion Zimmer. "Men, Halfings and Hero Worship.", *Tolkien and the Critics*. Eds. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbaro, Indiana: University of Notre Dame Press, 1968, p.116.

⁶⁹ バトラー、ジュディス 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、1999年、242頁((Butler, Judith, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge, 1990))

を遂行する⁷⁰。すなわち、彼女は「旅の仲間」に危機を警告し、ロスローリエン (Lothlórien) を出立する際、彼らにこれからの冒険において役立つ適切な武器を渡す。

ガラドリエルの贈り物としては、アンドゥリルの鞆と緑の石、金のベルト、小さな銀のベルト、ガラズリムの弓矢と矢筒、灰色の小箱、ガラドリエルの三筋の髪の毛、ガラス瓶などがある。これらのガラドリエルの贈り物やアドバイスは、遠征隊が彼らの目標を達成するために役立ち、彼女の知恵は、彼らが悪と戦うことができるように手助けする。

David Pretorius (2002) と Donald P. Richmond (2002) はガラドリエルを聖母マリア (Virgin Mary) と比較することができるかと主張している⁷¹。Romuald Lakowski (2007) も白く純粋なイメージ (white, pure imagery) のガラドリエルは聖母マリアがモデルであると述べている⁷²。Nancy Enright (2007) によると、トールキンもガラドリエルが聖母マリアの多くの特性を持っていることを認めたという⁷³。

ガラドリエルは、強靱な意志や強いリーダーシップの男性性と、愛情の深く養育の女性性をあわせ持っていると考えられる。しかし、戦争での彼女の役割はアルウェンほど受動的ではないが、エオウィンとは異なり、戦士として描かれてもいない。

[アルウェン]

アルウェンは裂け谷 (Rivendell) の支配者エルロンドの娘であり、アラゴルンの配偶者である。エルフの中で最高の美女であるルーシエン・ティヌーヴィエル (Lúthien Tînúviel) に最も似ていて「ルーシエンの再来」と言われる。フロドは裂け谷で彼女に初めて会ってその美貌に感嘆する。

アルウェンは美しい女性であるが、ガラドリエルと同様に賢い女性としても描かれる。そして彼女は非常に神秘的である。例えば、彼女は遠征に先立って不安

⁷⁰ Łaszkiwicz, Weronika. "J.R.R. Tolkien's Portrayal of Femininity and Its Transformations in Subsequent Adaptations." *A Journal of English Studies*, 11, 2015, pp.15-28.

⁷¹ Pretorius, David. "Binary Issues and Feminist Issues in LOTR." *Mallorn*, 40, 2002, p.37.

Richmond, Donald P., "Tolkien's Marian Vision of Middle-Earth." *Mallorn*, 40, 2002, p.14.

⁷² Lakowski, Romuald. "The Fall and Repentance of Galadriel." *Mythlore*, 2007, pp.91-104.

⁷³ Enright, Nancy. "Tolkien's Females and the Defining of Power." *Renascence: Essays on Values in Literature*, 59(2), 2007, pp. 93-108.

に思うフロドの心理状態に気付いて⁷⁴、フロドに自分の宝石のネックレスを与え、平静を保たせる。

アルウェンは原作ではほとんど活躍せず、実家の裂け谷で婚約者であるアラゴルンが戻ってくる日を待って静かに過ごしているだけである。実質的にやることといえば、原作の中では、アラゴルンと彼の軍隊のために旗を作る程度である。Enright (2007) は、こうした彼女のアラゴルンに対する感情と行動を「アラゴルンへの献身」と述べる。特に、父の反対にもかかわらず、永遠の命を放棄し、犠牲と人間の希望を捨てなかった彼女を「愛から死につながるキリストのような選択に映る」としている⁷⁵。

[ゴールドベリ、ロージー、ロベリア]

ゴールドベリは川の娘 (River-daughter) と川の女神の娘 (River-woman's daughter) と呼ばれる女性で、トム・ボンバディルと共に暮らしている女性である。トム・ボンバディルは如何なる地位や名誉、財宝や秘宝、またどんな恐怖にも関心がなく、あくまでも自身が望むままに生活している。

ゴールドベリは強い女性だが美しく心も優しく描写されている。例えば、彼女はボンバディルが保護したフロド一行を家で歓迎し、食事をふるまって、「雨の日は、ゴールドベリがきれいにする日」と話すなど、家庭的な女性に描かれる。

『指輪物語』では、役割は少ないが、ジェンダーの観点からみると重要なホビットの女性が2人いる。そのうちの一人はビルボの別れの宴の場面に登場するロベリア・サックビル=バギンズ (Lobelia Sackville-Baggins) で、彼女はビルボ・バギンズの従兄弟であるオソ・サックビル=バギンズ (Otho Sackville-Baggins) の妻である。トールキンは彼女を手癖の悪い (kleptomaniac tendencies)、欲張り (greedy) で、無礼な (impolite) 中年の女性に描いた。このため、批評家はトールキンをミソジニスト (misogynist) と非難する⁷⁶。しかし、彼女は半オークであるシャーキー (Sharkey) のシャイア掃討から自分自身を守るために、傘を使って抵抗する姿を見せる。

もう一人のホビットの女性は、サムが想いを抱いていたロージーである。サム

⁷⁴ Ibid., p. 98

⁷⁵ Ibid., p. 98

⁷⁶ Neville, Jennifer. "Women.", *Reading The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Classic*, Ed. Robert Eaglestone. London: Continuum, 2005, p.101.

は、遠征の時、ローズのことを思い浮べる。指輪戦争後ホビット庄に帰還して、彼は彼女に好意を打ち明け、結婚する。このように、ロージーが伝統的な女性の役割を示している⁷⁷。このロージーと比べ、ロベリアが傘を使って抵抗するという勇気ある姿を見せることによって、ホビットの女性が必ずしも家父長制に囚われた女性ではないことを表す。

この他にも「中つ国」にはヨーレス (Ioreth) という Gondor 人の女性がいる。彼女は Gondor のもの知り (wise-woman of Gondor) と呼ばれ、ミナス・ティリスの療病院に勤める女性の中で最年長の老女である。彼女はおしゃべりな人物だが、古い知識に精通してファラミア (Faramir) を回復させるのにも役立つ女性である。

以上で説明した女性は、エオウィンを除けば、基本的に戦いの場面には参加しない。『ロード・オブ・ザ・リング』は、「旅路」より「戦争」に比重を置いて話が展開される。したがって、その戦争に女性がいないということは、彼女たちを物語の中心から外していると考えられる。結局、『指輪物語』では、戦いに赴くのは男性であり、女性登場人物は、戦争に行く人を見守るか、帰ってくるのを待つ存在であるか、というような役割の周辺的な位置を与えられるにとどまっている。

Lewis&Currie (2002) によると、トールキンは、女性の役割について、伝統的な見解を持っていて⁷⁸、Fredrick & McBride (2001) は彼の作品の中で家父長制社会 (patriarchal society) のジェンダー・ヒエラルキー (gender hierarchy) を見ることができたと主張している⁷⁹。Łaszkiwicz (2015) も、トールキンの小説に登場する女性キャラクターは、受動性 (passivity)、無意味 (insignificance)、ステレオタイプの役割 (stereotypical roles) への批判を受けているとしている⁸⁰。

こうした女性登場人物の周辺化 (marginalization) には、トールキンが『指輪物語』をまとめたのが 20 世紀の前半であったという時代的制約も影響しているだろう。

そして、トールキンが『指輪物語』で、女性を受動的で補助的なイメージで描

⁷⁷ ロベリアは、ビルボとフロドは親戚であるが、袋小路屋敷がビルボからフロドに譲られたことで彼を妬む。しかし、水の辺村の合戦後、息子のロソが殺されたことを知って失意し、遺産の全てをフロドに譲る。

⁷⁸ Lewis, Alex, & Elizabeth Currie. *The Uncharted Realms of Tolkien: A Critical Study of Text, Context and Subtext in the Works of J. R. R. Tolkien*, Oswestry: Medea Publishing, 2002, pp.181-193.

⁷⁹ Fredrick & McBride, op. cit., p.109.

⁸⁰ Łaszkiwicz, op. cit., p.15-28.

写することは、トールキンの個人的な関心や経験の影響も大きいとすることができる。特に、トールキンはアングロ・サクソン文学・文化に強い影響を与えた「北欧神話」に多くの関心を持っていた。彼の関心と知識は『指輪物語』をはじめとする創作に大きな影響を与えた。Brenda Patridge (1983) によると、トールキンが夢中になっていた古代のノルウェーとキリスト教の神話は、すべての分野で女性の完全かつ積極的な参加に反対している⁸¹。その点がトールキンに影響を与えたのであろう。

2. 『ロード・オブ・ザ・リング』での女性キャラクターのジェンダー・アイデンティティ

前述したように、『指輪物語』に登場する女性キャラクターはそれほど多くない。エルロンドの娘アルウェン、ロスローリエンの女王ガラドリエル、ローハンの姫エオウィン、トム・ボンバディルの妻ゴールドベリ、サムスの妻ロージー、ビルボの親戚ロベリア、 Gondor 人 ヨーレスなどである。しかし、映画では、ゴールドベリとヨーレスなどは登場しない。また、ロベリアもビルボの誕生日パーティーのエピソード中に少し登場するだけで (図 3-12)、『指輪物語』後半、自分の身を守るために、傘を使って抵抗する姿は見るできない。



『ロード・オブ・ザ・リング』

〈図 3-12〉 ロベリア

⁸¹ Partridge, Brenda. "No Sex Please – We're Hobbits: The Construction of Female Sexuality in The Lord of the Rings.", *J.R.R. Tolkien: This Far Land*, Ed. Robert Giddings, London and Towtown, New Jersey: Vision and Barnes & Noble, 1983, p.194.

原作には登場するが映画では描かれない女性キャラクターに代わりに、監督であるピーター・ジャクソンによってエオウィンとアルウェン、ガラドリエルのような主要登場人物の役割と比重などが強調または変容させられた。

彼女たちは『指輪物語』で非常に美しい女性に描写されている。『指輪物語』で描いたキャラクターの外見を映画の中でのキャラクターと比較するのは難しいことだが、映画の中でも主要キャラクターのセリフを通して美しさを知ることができる。原作でエオウィンは美しい女性と描写されて花に例えられる。アラゴルンにはエオメル (Éomer) に、エオウィンを「あなたの国で最も美しい女性」と言い、彼女をユリに例える。ファラミアも「妖精の言語でも比べられないほど美しい」と言い花に例える。このようなエオウィンの外的描写はエオウィンの女性性を強調するものとみることができる。

L. Mulvey (1975) によると、古典的なハリウッド映画で、中心的な様々な装置は、すべて男性観客が男性主人公と同一視することを容易にするために寄与し、女性はスクリーンの中に性的対象に展示されることで、男性観客に視覚的快楽を与えたという⁸²。エオウィンの美しさについて述べた人々が、すべて男性であることを考えると、『ロード・オブ・ザ・リング』も男性の観客の視覚を収容していると思わなければならない。

John Stephens (1992) によると、内面的な強さ (inner strength) は、男性性に対応し、外見の美しさ (outer beauty) は女性性に相当する⁸³。エオウィンと、ガラドリエル、アルウェンの外観の反応は、『ロード・オブ・ザ・リング』の中、「中つ国」も女性性が強調されていると見ることができる。

[エオウィン]

エオウィンは『指輪物語』でのように、「中つ国」の戦闘に直接参加するローハン唯一の女性である。唯一戦いの場に立ち、物理的に最も男性たちと近い距離にいて、ローハンの盾持つ女戦士である。

『王の帰還』で、エオウィンの兄エオメルは彼女に「War is the province of men (戦争は男の領分だ)」と言い戦争から排除させようとするが、彼女は戦闘に直接参加する。

⁸² Mulvey, L., "Visual pleasure and narrative cinema.", *Screen*, 16(3), 1975, pp.6-18.

⁸³ Stephens, John. *Language and Ideology in Children's Fiction*, Essex, UK: Longman, 1992, p.19

エオウィンはペレンノール野の戦いで、「No man can kill me（人間の男が私を殺すことは出来ない）」と言った巨悪の化身、ナズグールの魔王に向かって「I am no man（わたしは人間の男ではない）」と言って、魔王を殺す。彼女が言った「I am no man」で「man」を人ではなく「男」として使用し、悪役の台詞に応酬する（図 3-13）。これは彼女が人としてではなく、「女」であるため、彼を殺すことができたという点を強調した台詞とも解釈できる。これは、「男、女」という性別カテゴリーがいかに虚構なのかを示してくれるシーンである。



『王の帰還』

〈図 3-13〉 ナズグールの魔王と戦うエオウィン

Robert Giddings と Elizabeth Holland (1981) によると、エオウィンとアラゴルンの恋物語は、イギリスの詩人アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson) による詩、「国王牧歌 (Idylls of the King)」での円卓の騎士であるランスロット (Lancelot) 卿と、アストラットのエレイン (Elaine of Astolat) の恋物語と類似している⁸⁴。エレインは、ランスロット卿と出会い恋に落ちるが、ランスロット卿はエレインの愛を受け取らず宮廷に帰ってしまう。エオウィンもアラゴルンに想いを寄せたが、彼は彼女を受け入れることはなかった。

このようにエオウィンとアラゴルンの愛は、エレインとランスロット卿の愛と似ているが、いくつかの大きな違いがある。エレインはランスロットとの愛が叶わないことであると分かって、何も食べずに死んでしまうが、エオウィンは愛が終わったことが分かっても、悲しまない。つまり、彼女は、女性は受動的で家庭的な役割をしなければならないという固定観念を破る女性である⁸⁵。

⁸⁴ Giddings, Robert & Elizabeth Holland., *J. R. R. Tolkien: The Shores of Middle-earth*, London: Junction Books, 1981, pp.86-94.

⁸⁵ Dawson, Deidre A., "Review-Essay: The Ring Goes Ever On.", *Tolkien Studies: An Annual Scholarly Review*, 8, West Virginia UP, 2012, pp.143-241.

エオウィンは、角笛城でアラゴルンに思いっきり愛を告白するなど、積極的な役割を果たす。これはアラゴルンとアルウェンの関係のような、女性が受動的な宮廷恋愛 (Courtly Love : 貴婦人に対する中世ヨーロッパの騎士道的恋愛) とは異なるものである。

ペレンノール野の合戦のあと、負傷と黒の息に冒されていたエオウィン、ファラミアは運び込まれ、アラゴルンに治療を受ける。療養中にファラミアとエオウィンは出会い、恋に陥ることになる。ファラミアは、エオウィンと自分が平等であると信じて、彼女を抑圧しようとはしない⁸⁶。

こうしたエオウィンの恋物語とその後の治癒 (healing) のプロセスは、独立的な女性の強い我意の変換 (self-willed transformation) とみなされる⁸⁷。しかし、戦争が終わった後、エオウィンは剣を置き、ファラミアと結婚するという結びになっている。これについて、高橋 (1999) は、彼女の「男装」や「参戦」は人生の一時期、すなわちヘテロセクシュアル (異性愛) な関係に入る前のひとときのものに限られているとしている⁸⁸。

Butler (1990) によれば、人間の「ジェンダー (gender)」は、人間の行為に基づいて決定される⁸⁹。このような観点から見ると、エオウィンは「男装」や「参戦」を介して、従来のジェンダーの固定観念に挑戦して、ジェンダー転覆的な行為を遂行する⁹⁰。しかし、エオウィンは、最終的には剣を置き、結婚することにより、ジェンダー転覆は発生しない。

[アルウェン]

エルロンドの娘であるアルウェンは原作では少ししか触れられていない。アルウェンは、『指輪物語』を映画化した Ralph Bakshi のアニメーション、『The Lord of the Rings』(1978) や Rankin / Bass のアニメーション、『The Return of the King : A Story of the Hobbits』(1980) にも登場しない (図 3-14)。

⁸⁶ Hatcher, Melissa McCrory. "Finding Woman's Role in The Lord of the Rings.", *Mythlore*, 25(3), 2007, p.51.

⁸⁷ Ibid., p.52.

⁸⁸ 高橋、前掲書、87 頁

⁸⁹ Butler, 1990, op. cit.

⁹⁰ 「ドラッグ」が、性差別的/異性愛主義的な規範を強化しているのか、それとも攪乱(subvert)しているのかは、フェミニズム理論における主要な論点の一つである。Butler (1999)によれば、映画においてドラッグは、ジェンダー規範を強化することも出来るし、攪乱することもできる二面性があり、その判断は個々の観客の見方によっても大きく異なる。つまり、演出と演技者の意図を超え、映画の登場人物と自分を同一視する観客はドラッグを転覆的に認識するが、ドラッグを他者化する観客はジェンダー規範の単純なパロディに過ぎないと判断する。



左) <https://www.amazon.com/Lord-Rings-Movie-Poster-Animated/dp/B0016D7XQE> 右) [https://lotr.fandom.com/wiki/The_Return_of_the_King_\(1980_film\)](https://lotr.fandom.com/wiki/The_Return_of_the_King_(1980_film))

〈図 3-14〉『The Lord of the Rings』(1978) と『The Return of The King』(1980)

原作を映画化されたとき、当然のことだが登場人物に対して、その役割、キャラクターなどに多少の変更がある。ジャクソンは、『ロード・オブ・ザ・リング』で、新しいキャラクターを追加しようとはせず、アルウェンの設定を大幅に変えて、「エルフ戦士 (elf warrior)」、「強い女性」像を演出した⁹¹。したがって、映画ではエオウィンだけでなくアルウェンも戦士になる。『旅の仲間』で、魔王にモルグルの剣に刺され瀕死のフロドをアルウェンが助け出すシーンがある (3-15)。原作では、グロールフインデルという男のエルフが重傷を負ったフロドを助けるが、映画ではアルウェンに変更されている。



『旅の仲間』

〈図 3-15〉モルグルの剣に刺され瀕死のフロドを助けるアルウェン

ジャクソンは、最初は、女性観客を確保するために、より多くの女性キャラクターを登場させ、アルウェンを「情け容赦ない戦士 (ruthless fighter)」として、

⁹¹ Hatcher, op. cit., p.53.

エルフ軍と一緒に「ヘルム峡谷 (Helm's Deep)」戦闘に登場させようとしたが、トールキンのファンたちの抗議にアラゴルンとの愛の關係に重点を置いた⁹²。

ジャクソンは、『指輪物語』とは異なり、アルウェンの役割を強化したが、『ホビット』のタウリエル (Tauriel) のような強いエルフは創造しなかった。タウリエルは、トールキンの原作小説には登場していない強い女性エルフである。

最後に、ジャクソンは、アルウェンを強い女性に仕立てるとともに、原作には無いオリジナルな要素を追加して、アラゴルンとアルウェンの愛をよりロマンティックに描いた⁹³。例えば、映画の中では、アルウェンはアラゴルンとの別れ際に、「私の命と共に」と言って「夕星 (Evenstar)」という贈り物を託す。その宝石は、愛の象徴で、アラゴルンの心の中で常に支えになる。映画ではアラゴルンとのロマンスの要素を強化するためにエオウィンとの三角關係を導入するなどして、広い観客層へのアピールを狙った⁹⁴。

今まで説明したように、アルウェンはトールキンの原作とは異なり、映画では強い女性だが、話が後半に進むにつれ、受動的なキャラクターに変わって行く。つまり、映画の序盤では、アルウェンは強い独立心と意志を持ったキャラクターとして描かれるが、映画の終盤では、アラゴルンを愛し、彼を補佐し、彼に勇気を与える役割になる。これは、アラゴンの戴冠式で内気なアルウェンの姿を通し明確になっている⁹⁵ (図 3-16)。



『王の帰還』

〈図 3-16〉 戴冠式でのアルウェンとアラゴルン

⁹² Jackson in Appendices of TT, From Book to Script 00:12

⁹³ 原作で、男女間の恋愛の描写はほとんどない。結婚で結ばれるカップルは、エオウィン - ファラミア、サム - ロージー、アルウェン - アラゴンの3組である。しかし、具体的な愛情を表現する場面はほとんどない。

⁹⁴ 伊達桃子「映画になったファンタジー—現代ファンタジーの挑戦」、『社会科学雑誌』、第12巻、2015年、12頁

⁹⁵ Ruiz, B. D., "Re-reading The Lord of the Rings: Masculinities in J.R.R. Tolkien's Novel and Peter Jackson's Film Adaptation.", Doctorial Dissertation, University of Granada, 2015, p.281.

[ガラドリエル]

一方、ガラドリエルは、『指輪物語』のように、映画でもサウロン（死人占い師）の力に対処するために、「白の会議（White Council）」を組織して、先を見通す優れた洞察力で国家的決断を下す。そして、彼女の贈り物を持った「旅の仲間（the Fellowship of the Ring）」をサポートして、傷ついて帰ってきた者たちに癒しを与えるという「母性的」とも言える役割を遂行する。ガラドリエルは、強靱な意志や強いリーダーシップの男性性と、愛情の深く養育の女性性をあわせ持っていると見ることができる。これらの彼女の能力と役割に加えて、ジャクソンは、映画の中でナレーションを担当させ、ガラドリエルが「中つ国」での権力者であることを明らかにする⁹⁶。

以上、エオウィンやガラドリエル、アルウェンの3人とも、物語の始めは、男性性が強い女性としても描かれているが後半には受動的に変化するキャラクターとして描かれており、『ロード・オブ・ザ・リング』におけるキャラクターのジェンダー・アイデンティティは、パフォーマティブに構築されていることが明らかである。こうしたことは、結局『ロード・オブ・ザ・リング』も、女性に関しては家父長制の制度の枠組みで構成されていると言える。

小説と映画は二つの異なるメディアで、物語に対する叙述方式が違う。映画『ロード・オブ・ザ・リング』は、原作『指輪物語』とは異なり、ジェンダー面では、ストーリー（物語の筋）と登場人物の役割の比重などが一部変更されている。

ジャクソン監督の変容の評価は様々である。つまり、映画を見た観客は、映画における「原作」との相違を、ただ否定的にとらえる観客と、「原作」を大きく毀損していなかったという肯定的にとらえる観客に分けられる。これらのファンたちの反応は、彼らが作ったファン・アート（Fan Art）とファン・フィクション（Fan Fiction）などを介して知ることができる⁹⁷。

ファンたちは『指輪物語』と、これをもとに作られた映画では満足しない部分を補完したり、もっと開発したい部分を見つけて、自分たちのアイデアを組み合わせて作る。特にトールキンの作品に登場する女性キャラクターの受動性は能動

⁹⁶ Łaskiewicz, op. cit., p.23.

⁹⁷ 『ロード・オブ・ザ・リング』のファン・アートの中で代表的なものは、ケイト・マディソン（Kate Madison）が監督した『希望の誕生（Born of Hope）』（2009）である。この映画は、非営利映画で、アラゴルンの両親のアラソルン（Arathorn）二世とギルライン（Gilraen）との話に焦点を当てたものである。ケイト・マディソンはイギリスのケンブリッジ出身の映画製作者、監督、プロデューサー、俳優である。

的に変容して、『指輪物語』とは違うキャラクターを開発して登場させたことなどにたいして彼らなりの解釈をしている。

3. アラゴルン、フロド、サムのジェンダー・アイデンティティ

原作においてアラゴルンは、ローハンの王センゲル (Thengel、セオデンの父) と Gondor の執政エクセリオン二世 (Ecthelion II、デネソール二世の父) に仕えるなど、人間の中で最も強い存在である。そして、彼は「一つの指輪」の誘惑を乗り越えることのできる、強い精神力を持つ人間である。原作でのアラゴルンは最初から強い伝統的英雄として描写されているのに対し、映画でのアラゴルンは王として成長していく姿を見せている。

映画の中でアラゴルンは、「死者の軍勢」を連れて戦争に行くように助言するエルロンドに、自分の命令には彼らは多分従わない、と言って断る。しかし、エルロンドがアラゴルンに王として命じれば従うはずだ、という説得を受け入れて「死者の軍勢」を引き連れるなど、自分の意見があってもそれを無理強いしたりしない。

アラゴルンの先祖であるイシルドゥア (Isildur) は、サウロンの指から奪い取った一つの指輪を葬ることを拒んだことで、人間の弱さの象徴のように描かれているキャラクターである。このため、アラゴルンはイシルドゥアの世継であることを隠し、Gondor に帰還して王座につくことを躊躇する。またアラゴルンは、「黒の息⁹⁸」に冒されたファラミアとエオウィンほか多数の人々を、治癒能力で救うヒーラーとしての役割をするなど、前述の Spence & Helmreich (1978)⁹⁹ などが言う女性性として捉えることができるかもしれない。しかし、物語が進むにつれてアラゴルンは穏やかだが、断固たる意志を持った強力な戦士へと変貌する。

強力な能力を持つが、自己主張をあまりせず、他人の意見を謙虚に受け入れて補佐するアラゴルンの男性性を、Holy A. Crocker (2005) は「新しいタイプの男性性」と主張している。Crocker (2005) は、トールキンは覇権的なタイプの男性性を擁護するのではなく、差異 (difference) と自主性 (autonomy) を許容する男

⁹⁸ 黒の息は、ナズグールがもたらす病気のような呪魔であり、黒の影とも呼ばれる。

⁹⁹ Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J., "The Personal Attributes Questionnaire: A measure of sex role stereotypes and masculinity-femininity." *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 43, 1974.

性を追求しているという¹⁰⁰。これは『指輪物語』での真の力(true power)は、謙虚さ(humility)、癒やし(healing)、愛(love)と地上の支配(earthly dominance)の放棄(renunciation)から出てくるという Enright (2007) の主張と一致する¹⁰¹。

アラゴルン以外にも、『ロード・オブ・ザ・リング』において善側にあるキャラクターの中で、「ヘゲモニックな男性性」を持っている人物はいない¹⁰²。『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する男性キャラクターはジェンダー・パフォーマンスを介して、「ヘゲモニックな男性性」から脱して、ジェンダー・アイデンティティを再構成している。トルキンが生きた時代は、男女の役割が今に比べて厳しく、「ヘゲモニックな男性性」が支配的であった時期である。しかし、トルキンは、時代に比べて相対的に進んだ男女平等観を持って「ヘゲモニックな男性性」¹⁰³を描写した。ジャクソンは、さらに、「非ヘゲモニックな男性性」を創造している。それがフロドであり、サムである。

『ロード・オブ・ザ・リング』におけるホビットの男性は、低い身長や子どものような無邪気さにより、思春期の少年と類似している。それにより完全な成人として見なすことはできないので、ジェンダー・アイデンティティと役割は排除されたり無視されたりする。例えば、映画の中で、戦闘に参加するためにメリーがまるで子供のようにエオウィンに抱えられて、馬に乗せられて、戦場へ行く様子は滑稽である。たとえ身長が低くても、彼はもうれっきとした成人男性である。白雪姫が七人の小人の「男性性」を認めていないようにエオウィンにも、ホビットは男ではないようである。

『ロード・オブ・ザ・リング』に登場するホビットの女性が少なく、その役割も微々たるものであることについて一部の批評家は、トルキンが性的なテーマを避けるために、女性を排除したと主張している¹⁰⁴。つまり、ホビットは、背が低く、子供のような行動をするので、彼らの相手である女性を性的に描写することは適切ではないと考えたからだというのである。このように、ホビットの男性のジェンダーは、伝統的な男性性とはみなされない。

¹⁰⁰ Crocker, Holy A., "Masculinity.", *Reading The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Classic*. Ed. Robert Eaglestone, London: Continuum, 2005, pp.116-119.

¹⁰¹ Enright, op. cit., p.106.

¹⁰² 悪側にあるモルゴスとサウロンは権威的であり、支配的な特性を持っており、「ヘゲモニックな男性性」に近い。

¹⁰³ ヘゲモニックな男性性は、男女間の支配と従属を示すが、トルキンは『指輪物語』において、アラゴルンやフェアラミアなどのような男性性と女性性を共に合わせ持つキャラクターを作り出した。

¹⁰⁴ Green, William H., "Bilbo's Adventures in Wilderland", *New York: Bloom's Literary Criticism*, Ed. Harold Bloom, 2008, pp.29-30.

ジャクソンはサムとサムスの結婚式で、花嫁のブーケをゲストの群衆に投げる演出をする。多くの西洋文化では、花嫁がウェディングブーケを未婚の女性へ投げ、ブーケを受け取った女性が次に結婚できると言われている。サムとサムスの結婚式での花嫁のブーケは、ピピンが受け取る (図 3-17)。そして、ピピンは負傷したメリーの世話をし、サムはフロドのために料理をする。



『王の帰還』

〈図 3-17〉 サムとサムスの結婚式で、花嫁のブーケを受け取るピピン

フロドとサムは、ジェンダーの面で最も多様な解釈と多くの義論がある。もともと、フロドとサムとの関係は、『ロード・オブ・ザ・リング』の中で、代表的な主従関係である。しかし、Scott Kleinman (2005) によると、サムとフロドを接続する絆は「クィア(queer)」であり、忠義 (fealty) や尊敬 (homage) に対する公式の誓い(oath)に基づいたものではないかと言っている¹⁰⁵。David Craig (2001) と Roger Kaufman (2007) などの一部の批評家たちも彼らの関係に同性愛的な要素があると主張する¹⁰⁶。

映画で同性愛と見ることができるシーンは、キリス・ウンゴル (Cirith Ungol) 塔の階段でフロドとサムが眠るシーンである (図 3-18) ¹⁰⁷。このシーンは、他の「旅の仲間」の関係では見られない親密な場面である。たとえば他のメンバーは

¹⁰⁵ Kleinman, Scott., "Service.", *The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Trilogy*, Ed. Robert Eaglestone, New York: Continuum, 2005, p.148.

¹⁰⁶ Craig, David. M., "'Queer lodgings': gender and sexuality in The Lord of the Rings.", *Mallorn*, 38, 2001, pp.11-18.
Kaufman, Roger. "Heroes Who Learn to Love their Monsters: How Fantasy Film Characters Can Inspire the Journey of Individuation for Gay and Lesbian Clients in Psychotherapy.", *Using Superheroes in Counseling and Play Therapy*. Ed. Lawrence Rubin, New York: Springer, 2007.

『ロード・オブ・ザ・リング』には、フロドとサムとの以外に、ピピンとメリー、エルフのレゴルラスとドワーフのギムリとの関係も友情と同性愛が入り混じっているような印象を与える。このように、男性を中心とした仲間同士の友情や絆は、物語の重要な側面を占めている。

¹⁰⁷ Ruiz (2015) は、このようなフロドに対するサムとの行動は、母の愛に似ていると主張する。
Ruiz, op. cit., pp.23-38

手でやさしくなでる (strokes) ことやキスなどをしない。つまり、フロドとサム
の関係ほど物理的に親密には見えない。



左、右) 『王の帰還』

〈図 3-18〉 キリス・ウンゴルで、フロドを抱いているサム

Esther Saxey (2005)¹⁰⁸は、『指輪物語』でサムがフロドの手を握って、額にキスをして撫でる行為はセオデン王に忠誠を誓い、手の甲にキスしていたメリーの行動のようなものと主張する。つまり、フロドに対するサムの行動は、庭師が主人に敬意を表する慣習的な行動と同じであるとしている。

Anna Smol (2008)¹⁰⁹によると、ジャクソン監督は、原作を脚色してキリス・ウンゴルのシーンを撮影したという。つまり、原作に出てくるキスシーンや手を握るシーンは、撮影しなかった。これは原作通りに映画化したら、同性愛と思われると考えたからである。

しかし、Smol (2008) は「指輪の幽鬼」の剣に刺され負傷したフロドが裂け谷で目を覚ましたとき、フロドに会いにきたサムの様子は、同性愛として読み取れると述べている(図 3-19)。このシーンは、サムが他の「旅の仲間」とは異なり、フロドに近寄らずに見つめることだけであるが、Smol (2008) は観客がこのシーンを見て、エロティックな興奮を感じることができると述べている。

¹⁰⁸ Saxey, Esther. "Homoeroticism.", *The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Trilogy*, Ed. Robert Eaglestone, New York: Continuum, 2005. pp.132

¹⁰⁹ Smol, Anna. "Male Friendship in The Lord of the Rings: Medievalism the First World War, and Contemporary Rewritings", *The Ring Goes Ever On: Proceedings of the Tolkien 2005 Conference: 50 Years of The Lord of the Rings*, Ed. Sarah Wells, Coventry, UK: The Tolkien Society, 2008, p.324.



『王の帰還』

〈図 3-19〉 目さめたフロドと、フロドを見つめるサム

こうした映画の変容は、ジャクソンの考えとは異なり、『ロード・オブ・ザ・リング』の同性愛的な解釈をより拡大させたのかも知れない¹¹⁰。

『ロード・オブ・ザ・リング』でフロドを見つめるサムの視線にクリアな欲望が込められているにしても、サムとフロドの関係が実質的な同性愛関係には及ばなかったのは彼らの関係が上下、主従関係による心理的抑圧に起因すると考えられる。

同性愛は、男性同士または女性同士の間での性愛や同性への性的指向を指すが、これらの定義をフロドとサムの関係に適用すると、前述したように、明らかに彼らの関係は同性愛とは異なる部分が出てくる。むしろ、彼らの関係は、ブロマンス (Bromance)¹¹¹に近いと考えられる。ブロマンスは男と男の間の愛情を意味する言葉で、友情に近い愛を意味する。単に濃い友情から深くはロマンチックな雰囲気加味されることもあるが、性的な関わりはないのが特徴であり、ホモソーシャルな親密さの一種とされる。

以上のように、映画でのフロドとサムの関係には、異性愛が正常とされる社会の異性愛規範を逸脱する瞬間、すなわち、「クリアな瞬間 (queer moments)」と見ることができると考えられるが、サムがロージーと結婚することで、同性愛問題は一段落される。前述のフロドとサムの関係をクリア関係に焦点を当てた場合は、サムの異性的結婚は説明することができなくなる。戦争が終わり、サムはロージーと結婚する。これは、フロドとサムにとってホモソーシャルな絆の終焉を

¹¹⁰ 特に、スラッシュ・フィクション (Slash fiction) 作家の関心を引き起こして多様に解釈された。スラッシュは、TV 番組、映画、本に登場する男性間の友情を性的関係にリセットして作り、論難が多いファン・フィクションである。

¹¹¹ ブロマンスは、brother と romance の合成語であり、男性同士の性的な関わりはないものの、近い関係のことを表す。同性同士の間での性愛や性的指向を指す 同性愛とは異なる。Robinson et al.(2017)によれば、ブロマンスは、同性同士の間での性愛や要求がなくても、二人の間に愛が存在できるという進歩的な考えに基づいていると主張する。

Robinson, S., Anderson, E., & White, A., "The Bromance: Undergraduate Male Friendships and the Expansion of Contemporary Homosocial Boundaries.", *Sex Roles*, 2017.

意味する。ジェンダーは異性愛者と同性愛者として固定されたものではなく、彼らのパフォーマンスによって介入され、再専有される。

結局、サムスのジェンダー・アイデンティティは、パフォーマンスという観点からすると、「男」、「女」というジェンダーの二分法はもちろん同性愛に限定することができないことを示す。

第四節 終わりに

第二章では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に現れるジェンダー・アイデンティティをパフォーマンスの観点から考察を試みた。その結果を説明する前に『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の変容(アダプテーション)におけるジェンダー表象の変容について簡単に説明する。

『ハリー・ポッター』の場合、アルフォンソ・キュアロン (Alfonso Cuarón) の第三作『アズカバンの囚人』以降、原作の変容が見られる。特に、マイク・ニューウェル (Mike Newell) の第四作『炎のゴブレット』では、原作で重要な役割をするロンの第三兄パーシー・ウィーズリーをはじめ、ウィンキーとドビー、パーテミアス・クラウチ、コーネリウス・ファッジなどの周辺キャラクターが消え、または比重が縮小された。しかし、ジェンダー表象はあまり変容がなかった。

『ロード・オブ・ザ・リング』も、原作とキャラクターは同じであっても、映画の中の役割が強化、または削除されるキャラクターがいる。例えば、アルウェンは、『指輪物語』のアルウェンより重大な役割を演じており、積極的にフロドたちのために行動をする(強い女戦士のイメージを示す)。さらに、ガラドリエルの場合はナレーションを担当させて、彼女が権力者であることを明らかにする。しかし、ボンバディルの妻で、妖精を連想させる美しい女性として描写されているゴールドベリーは、『ロード・オブ・ザ・リング』では完全に消えた女性キャラクターの例とすることができる。以上のように『ロード・オブ・ザ・リング』は、原作の持っていたジェンダー観が十分に映像化されていないことが分かる。

以下では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の中のジェンダー表象が持つ意味をより具体的に見てみる。まず、二つの作品の中に共通して現れたジェンダー表象である。

第一に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での各キャラクターのジェンダー・パフォーマンス性は「魔法世界」と「中つ国」という空間性¹¹²、キャラクターたちの特殊性（年齢、善人と悪人など）に応じて、様々なジェンダーが存在し、ジェンダー・アイデンティティはパフォーマンスに行われている。そして、ジェンダー・アイデンティティは、不変的で、固定的なものではなく、パフォーマンスに構築されていく。ジェンダーがパフォーマンスであるということは、ジェンダー規範が、時代や文化などを横断して同一の意味を持つことが決してないということの意味する。結局これは、「男」、「女」というジェンダーの二分法に収まるものではないことを表す。

第二に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は家父長制の批判的な視点を盛り込んでいる。二つの映画はジェンダーにおける支配的イデオロギーを無条件には受容せず、部分的にはあるが強い抵抗も試みている。特に、『ハリー・ポッター』でのハーマイオニーとジニー、『ロード・オブ・ザ・リング』でのエオウィンとアルウェンなど女性キャラクターなどを通じて、既存の伝統的な家父長制下での受動的で、補助的な女性性とは異なる強い姿を見せてくれる。

第三に、第二の議論と対立するものだが、女性キャラクターたちの活躍と成功が男性的領域、すなわち、戦場でのエオウィンの活躍、クィディッチのゲームでのジニーの活躍など男性的能力を発揮する場合にのみ可能であるという点では、家父長制の理念の批判から自由ではない。特にエオウィンは男装を介して行われたという点は既存のジェンダー規範や異性愛中心主義をさらに固定化させるとみることができる。

第四に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』で読み取ることができる肯定的なジェンダー・アイデンティティは「男性性」と「女性性」が調和した「両性具有」を持つキャラクターたちによってである。つまり、『ハリー・ポッター』におけるハリーとロン、そして、『ロード・オブ・ザ・リング』におけるアラゴルンなどでは、「ヘゲモニー的男性性」を見つけることができず、「両性具有」が発現したときに、むしろ強い力を持つことを示す。

次では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』でのジェンダー表象の違いをみしてみる。

¹¹² ジェンダーは、空間や地域などの差異と交差しながら多様な形態をとることが知られている。『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、物語の時空間的背景が異なる。

第一に、『ハリー・ポッター』では、クィア問題に特別な言及がないが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、複数の学者によってフロドとサムの関係をクィア関係とみる研究が多い。しかし、二つの映画では、『テルマ&ルイーズ』(Thelma and Louise, 1991) と『メゾン・ド・ヒミコ』(2005) のようなジェンダー転覆的なキャラクターは登場しない。

クィア問題は、既存の異性愛的ジェンダー規範を転覆することで、最近のディズニー映画でも、このような試みをみることができる。その代表的な例は、『アナと雪の女王』(Frozen, 2013)である。『アナと雪の女王』でのエルサのジェンダー・アイデンティティは、男性/女性の二分法で表現することができず、彼女のセクシュアリティも異性愛/同性愛の区分に還元されない。つまり、エルサのジェンダーは同性愛者(レズビアンや姉妹愛)か異性愛者かと固定されたものではなく、彼女のパフォーマンスによって絶えずに可変され、再専有(re-appropriation)することができると言える。

それでは、なぜ男と女の境界を明確にしようとするのか。Butler (1993) によれば、男と女の境界は異性愛規範を維持するため区分する¹¹³。つまり、異性愛規範が、男女の区分を有意味にするものである。そして、ジェンダーが多様であり、単純に男女に二分できるものではないということは、異性愛が「自然」「正常」であり、同性愛を含むそれ以外の性愛を「不自然」「異常」とする異性愛規範を否定するものである。

第二に、『ハリー・ポッター』は、『ロード・オブ・ザ・リング』に比べて「母性愛」が大きく強調される。モリーに代表される母の犠牲、「母性愛」は『ハリー・ポッター』で繰り返されるテーマである。彼女の愛情は子供だけでは飽き足らず、ハリーやハーマイオニーにも注がれ、実質的な母親の役割をする。彼女は特に、ハリーを家族の一員として迎え、世話も良くしてくれる代理母の役割をする。特に、モリーがベラトリックスとの戦いで勝利したのは、子供たちに対するモリーの「母性愛」によるものということができる。また、ハグリットは男性であるが、味方に接するときは母性愛が表出する。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、ジェンダーの多様化と転覆の試みを通して家父長制に挑戦し、クィアに対する議論が行われるよう

¹¹³ Butler, J., *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of 'Sex'*, New York: Routledge, 1993.

にもなったが、それにも関わらず女性キャラクターの受動的・消極的な姿を見せてくれる。観客は、このような映画の中のキャラクターと同一視する傾向があり、家父長制イデオロギーを再生産する機能をすることができる¹¹⁴。特に、子供と青少年の思考はまだ未熟であるので、映画のキャラクターを自分と同一視する可能性もあり、無批判的に収容する危険もある。したがって子供と青少年たちにジェンダーに対する固定観念と同性愛などに偏見をなくすことができる環境づくり（例えば、映画観覧前のジェンダー教育など）が必要である。

¹¹⁴ Chaudhuri, Shohini. *Feminist Film Theorists: Laura Mulvey, Kaja Silverman, Teresa de Lauretis, Barbara Creed*, NY : Routledge, 2006, pp.64-95.

第三章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種表象

第一節 初めに

ファンタジー小説と映画に登場する種族は、一般に、人間、人間に似た姿を持つ種族、人間とエルフ¹の間に生まれた子ども、だいたいの場合人間よりも小さく髭を生やした老人のような外見であるドワーフ、吸血鬼、ファンタズマ、精霊、ジャイアントなど、多様である²。

以下では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種の定義と種類について考察する。

[『ハリー・ポッター』]

まず『ハリー・ポッター』では、人間は大きく魔法使いとマグルに区別することができ、魔法使いは、血統によって純血、半純血、マグル出身魔法使いに分類される³。純血とは、家系のなかにマグル、つまり魔法使いではない者もしくはマグル生まれが一人もいないことである。厳密にはマグルの血が混じっていない個人、一族のみで続いてきた家系を指す。純血は、古い歴史を誇る有名な家系である場合がほとんどであり、マルフォイ、ブラック、ポッター、ウィーズリー、ゴースト家がこれに該当する。彼らは代々、純血同士が結婚して血統を維持しており、特にマルフォイ、ブラック、ゴースト家の場合は、スリザリン⁴出身の闇の魔法使いを輩出したという点で、家系のプライドが高い。

半純血とは、マグルと純血の間で生まれた魔法使いをいう。つまり、先祖のなかに少なくとも一人以上のマグル、マグル生まれの人物が含まれている魔法使いのことである。ハリーとスネイプ、ヴォルデモートが半純血魔法使いに属する。ヴォルデモートの場合、彼の母は由緒正しい「純血」の魔女であるが、彼の父はマグルであり、彼

¹ 現代のファンタジー作品におけるエルフは、ヨーロッパの伝承における妖精、小妖精のエルフ族とは異なる。特に、トルキンの世界のエルフ族は、心身ともに極めてすぐれた人間として創造した種族である。エルフとともに、『ロード・オブ・ザ・リング』では、ドワーフ、ホビット、オークなども異種族として、受け入れられる。

² Terry Brooks(2001)はファンタジーにおける種族を分ける基準として、身の類似性、個体数、生殖能力、異性、文化などを挙げている。

Brooks, Terry. *The Writer's Complete Fantasy Reference*, Cincinnati: Writer's Digest Books, 2001.

³ Sean Smith(2001)によると、純血魔法使い、半純血魔法使い、マグル出身魔法使いはそれぞれ異なる人種である。

Smith, Sean. *J. K. Rowling. A Biography*, London: Michael O'Mara Books Limited, 2001, p.184.

⁴「スリザリン」は、ホグワーツ魔法魔術学校に置かれている4寮の一つである。スリザリンは才知溢れる優秀な生徒を求めているが、狡猾さが特徴と言われており悪印象が強い寮である。

自身は「半純血」である。闇の魔法使いのヴォルデモートは純血主義者としてマグル出身者の排除を目論んでいる。彼はほとんど純粋血統の出身である部下たちに、自分が半純血であることを隠す。

このような魔法使いの世界とは異なり、現実の世界の人々は、マグルと呼ばれる。つまり、マグルは魔法使いまたは魔女ではなく、魔法を使うことができる能力を有していない一般人である。2003年度版のオックスフォード英語辞典にはマグルが、特殊な活動や能力に精通していない人間を意味する単語として掲載された⁵。そしてマグル出身魔法使いとは、両親がマグルである魔法使いを意味する。

一方、『ハリー・ポッター』のなかの魔法省は、生物(Creature)を、動物(Beast)・存在(Being)・霊魂(Spirit)の3つに分類している。こうした生物の区分と定義は、ローリングが架空の著者ニュート・スキヤマンダー(Newt Scamander)のペンネームを用いて刊行した『幻の動物とその生息地』⁶に詳しく書かれている。

『幻の動物とその生息地』によると、『ハリー・ポッター』の世界観で、「Being」は魔法社会のルールを理解し、そのルールを作っていくための責務を引き受けることができるほどの知性を持ったすべての生物である⁷。

ヒトたる存在とも訳される「Being」には、ハウスエルフ、巨人、人狼、ヴィーラ、小鬼などがある。この中で、ハウスエルフは、一家に隷属して、一生奉仕と労働の義務を持つ人種として、労働の対価を全くもらえない奴隷階級に属する。混血巨人族はハウスエルフのように、特定の魔法使い家に隷属してないが、それでも魔法世界の下層階級として描かれている。人狼は狼に変わる人間を指し、二つのアイデンティティを持ち、魔法世界で排斥されるヒトたる存在である。また、アクロマンチュラ⁸のように知性を備えた生物であっても、魔法世界のルールを守ろうとする可能性がない場合は「獣」に該当する。そして、人魚やケンタウロスのように、人類の条件は十分に満たすが、自ら、「Being」に分類されることを拒否した場合もある。

⁵ ローリングによる造語である「マグル」(BBC ニュース, 2003.3.24)は、オックスフォード英語辞典に、「a person who lacks a particular skill or skills, or who is regarded as inferior in some way」として登録されている。

⁶ 『幻の動物とその生息地』(Fantastic Beasts&Where to Find Them)は、『ハリー・ポッター』の世界観における魔法生物に関する書籍、またそれを元にした映画シリーズ(ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅)の名称である。

⁷ 「Being」と区分されている種のうち、小鬼、巨人、ハウスエルフ、ヴィーラなどは厳然人間と紙相違にもかかわらず、人間との間で子孫を作ることが可能である。

⁸ アクロマンチュラ(Acromantula)は、人なみの知能を持ち言語が話せる八つ目の巨大な蜘蛛である。

[『ロード・オブ・ザ・リング』]

『ロード・オブ・ザ・リング』での人種区分は『ハリー・ポッター』とは異なる特徴を持つ。トールキンは『指輪物語』と『シルマリルの物語』で、人種・民族・親族・親戚など多様な用語を使用しているが⁹、「中つ国」における人種は人間、エルフ、ドワーフ、魔法使い、ホビット、およびオークである。

このうち人間は、創造神イルーヴァタールによって造られ、エルフの次に世に送り出された第二の民である。かれらはイルーヴァタールから、いわゆる「贈り物」である死 (mortality) を与えられていた。このため、人間は老いや病によって容易に肉体の死を迎えることになる。「中つ国」の人間という人種の中には、エダイン、ヌーメノール人、ドゥーネダイン、ヌーメノール人、ハラドリム、そして東夷など多くの民族がいる。人間の外見は、身長、背、肌や髪の色などが様々だが、おおむね現実の人間と同じ生物と描写されている。

エルフは、イルーヴァタールの子供たちで人間と似ているが、人間ではない人種である。エルフは、明るい肌や優れた視力を持って、審美的で創造的な能力を持っている点で、人間とは異なる。しかし、エルフと人間を分ける最大の差異は、エルフは不死であり、人間は限りある命しか持たないということである。

ホビットは、『ロード・オブ・ザ・リング』の主人公フロド・バギンズが属する人種である。『ロード・オブ・ザ・リング』の主人公がエルフや魔法使いのような古い存在ではなく、現代人に最も近い姿で描かれているホビットという事実は、作品を評価する際に非常に重要である。主人公フロドは、決してヒーロー的な人物ではなく、迷い、葛藤する、言わば平凡な人物である。

ドワーフ¹⁰は創造神のイルーヴァタールに作られたエルフや人間と異なり、ヴァラ¹¹の一人であるアウレが作り出した人種として、後にイルーヴァタールがその存在を認めて彼らに命を与えた。そのため、ドワーフを「イルーヴァタールの養子」ともいう。彼らはエルフや人間より背は低く小柄であるが、非常にがっしりとしている。

以上のような『ハリー・ポッター』と『ロードオブザリング』での人種をまとめたのが<表 4-1>である。

⁹ Fimi, Dimitra. *The Creative Uses of Scholarly Knowledge in the Writing of J.R.R. Tolkien*, Cardiff School of History and Archaeology, Cardiff University, 2005.

¹⁰ ドワーフは『ホビット』では欲と不機嫌に満ちた人種に描写されたが、『ロード・オブ・ザ・リング』では遠征の充実一員として優れた人種に変化する。

¹¹ イルーヴァタールによって作られた架空の神格である。

〈表 4-1〉 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種とヒトたる存在

『ハリー・ポッター』		『ロード・オブ・ザ・リング』	
“人間”	魔法使い、マグル	“Man ¹² ”	人間（エダイン、ヌーメノール人、ドゥーネダイン、ハラドリム、東夷）、エルフ、ドワーフ、ホビット
“Being”	ヒトたる存在(ヴィーラ、巨人、小人、泣き妖怪、ニンフ、屋敷しもべ妖精)		

一方、映画では、主要キャラクターは、主に白人の俳優たちによって演じられる。『ハリー・ポッター』の場合、10分以上登場する25名の主要キャラクターは全員が白人である（表 4-2）。

〈表 4-2〉 映画『ハリー・ポッター』における主要キャラクター

主要キャラクター	性別	人種	俳優		国籍
Harry Potter	M	半純血	Daniel Radcliffe	白	England, UK
Ron Weasley	M	純血	Rupert Grint	白	England, UK
Hermione Granger	F	マグル生まれ	Emma Watson	白	UK
Albus Dumbledore	M	半純血	Michael Gambon	白	Ireland, UK
Rubeus Hagrid	M	巨人/半純血	Robbie Coltrane	白	Scotland, UK
Severus Snape	M	半純血	Alan Rickman	白	England, UK
Lord Voldemort	M	半純血	Ralph Fiennes	白	England, UK
Draco Malfoy	M	純血	Tom Felton	白	England, UK
Ginny Weasley	F	純血	Bonnie Wright	白	England, UK
Minerva McGonagall	F	半純血	Maggie Smith	白	England, UK
Neville Longbottom	M	純血	Matthew Lewis	白	England, UK

¹² トールキンは大文字で始まる Man を男性だけでなく、人種全体を示す際に使い、小文字で始まる man は、どんな人種であれ、大人の男性を指すときに使用した。例えば、アラゴルンやレゴラスを man と呼ぶのは正しいが、Man ではない。

Remus Lupin	M	人狼/半純血	David Thewlis	白	England, UK
Sirius Black	M	純血	Gary Oldman	白	England, UK
George Weasley	M	純血	Oliver Phelps	白	England, UK
Fred Weasley	M	純血	James Phelps	白	England, UK
Horace Slughorn	M	純血	Jim Broadbent	白	England, UK
Luna Lovegood	F	不明	Evanna Lynch	白	Ireland, UK
Barty Crouch Jr.	M	純血	Brendan Gleeson	白	Ireland, UK
Dolores Umbridge	F	半純血	Imelda Staunton	白	England, UK
Arthur Weasley	M	純血	Mark Williams	白	England, UK
Lucius Malfoy	M	純血	Jason Isaacs	白	England, UK
Dobby	M	ハウスエルフ	Toby Jones (声)	白	England, UK
Uncle Vernon Dursley	M	マグル	Richard Griffiths	白	England, UK
Bellatrix Lestrange	F	純血	Helena Bonham Carter	白	England, UK
Gilderoy Lockhart	M	半純血	Kenneth Branagh	白	Ireland, UK

出典：IMDb(Internet Movie Database) をもとに筆者作成

『ロード・オブ・ザ・リング』は、『ハリー・ポッター』と同じように、白人俳優の割合が高い。特に、シリーズに10分以上登場する主要キャラクターは16名で、すべて白人である(表4-3)。

〈表4-3〉『ロード・オブ・ザ・リング』における主要キャラクター

主要キャラクター	性別	人種	俳優		国籍
Frodo	M	ホビット	Elijah Wood	白	American
Samwise	M	ホビット	Sean Astin	白	American
Aragorn	M	人間+エルフ	Viggo Mortensen	白	American
Gandalf	M	魔法使い	Ian McKellen	白	England, UK
Pippin	M	ホビット	Billy Boyd	白	Scotland, UK

Merry	M	ホビット	Dominic onaghan	白	Germany
Gollum	M	ホビット	Andy Serkis	白	England, UK
Legolas	M	エルフ	Orlando Bloom	白	England, UK
Gimli	M	ドワーフ	John Rhys-Davies	白	England, UK
Theoden	M	人間	Bernard Hill	白	England, UK
Boromir	M	人間	Sean Bean	白	England, UK
Eowyn	F	人間	Miranda Otto	白	Australia
Arwen	F	エルフ	Liv Tyler	白	American
Bilbo	M	ホビット	Ian Holm	白	England, UK
Elrond	M	エルフ	Hugo Weaving	白	Nigeria
Faramir	M	人間	David Wenham	白	Australia

出典：IMDb(Internet Movie Database) をもとに筆者作成

これは、本来は白人ではない人種のキャラクターにもかかわらず白人俳優がキャスティングされることを表すホワイトウォッシング (Whitewashing) に近い。非白人のキャラクターを白人化するのは、人種差別的な行為だとして以前から多くの非難を受けてきた。

『ドクター・ストレンジ』(Doctor Strange、2016) では、チベットの神秘主義者エンシェント・ワンの役割を白人俳優のティルダ・スウィントン (Tilda Swinton) が引き受けて議論の的になった。エジプトが背景である『キング・オブ・エジプト』(Gods of Egypt、2016) は、主要登場人物をすべて白人にキャスティングして非難された。

『ロード・オブ・ザ・リング』に登場するオーク族とオルク族のほとんどは白人俳優が黒の顔扮装をして演技したものである。それは、肌色というのは、仮面のようなものであって、かぶったり、外したりできる。つまり、白人のキャラクターであっても黒人が演技することができ、黒人のキャラクターでも白人が演技することができるということである。

以下では、こうした内容を参考にしながら、ポストコロニアル観点から『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する多種多様な人種がどのように映像的に描かれ、各人種の描き方はどのように違うのかについて考察する。両映画のストーリーに潜む歴史と現在の力関係に着目し、登場する人種、種族の支配と被支配の有り様から、人種、種族の差別や抑圧の形態を明らかにする。

第二節 『ハリー・ポッター』における人種表象

1. マグルと純血の魔法使い

『ハリーポッター』での魔法世界は、原作も映画も、表面的には肌色による人種差別は存在しないが、比喩的な人種層の魔法生物を創造して人種差別問題の存在を表わす。つまり、魔法界の中であって、人種の異なりによる差別化、区別化は、魔法族かマグルか、人間かヒトたる存在かによって表象している¹³。

まず、魔法族かマグルかによって区分される人種差別について見てみる。マグルは、魔力を持たない「普通の人間」を指す。ハーマイオニーの両親やペチュニア・ダーズリー (Petunia Dursley) のように血縁に魔法使いがいる者などを除けば、マグルの大半は魔法使いや魔女の存在を知らない。

魔法界では、純血の魔法族を中心に、マグルや「マグル生まれ」の魔法使いを差別する傾向が少なからず見られる。例えば、hogwarts創始者のひとり、サラザール・スリザリン (Salazar Slytherin)¹⁴は純血主義を提唱し、マグル生まれの魔法族や彼らを擁護する魔法族を排除しようとする。また、マルフォイ家などは、純血の魔法族でありながら、マグルやマグル生まれの魔法族と親密になることを「血を裏切る者」として冷遇する。

マグルとマグル生まれの魔法使いに対する差別意識は、魔法使いだけではなく、彼らに仕えるハウスエルフも持っている。ブラック家のハウスエルフ、クリーチャー (Kreacher) はマグル出身のハーマイオニーを徹底的に憎悪して無視する。クリーチャーの、このような差別と偏見はシリウスの母親をはじめとする純粋血統のブラック家から学習した結果である。

ヴォルデモートが政権を握った後、マグルに対する差別は、ひどくなり、嫌がらせや、危害が加えられる。その例の一つがヴォルデモート一派によるマグル生まれの魔女や魔法使いを捕まえる「マグル狩り」¹⁵である。マグル生まれであるハーマイオニー

¹³ 坂田薫子「ハリー・ポッターのイギリス(1):『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」、『日本女子大学英米文学研究』、49号、2014年、125-142頁

¹⁴ hogwartsの4人の創設者の一人であるサラザール・スリザリンによって秘密の部屋に封印されたバシリスクは、『秘密の部屋』で、マグル生まれの魔法使いを攻撃する。

¹⁵ Neumann(2006)によれば、「マグル狩り」は17世紀のヨーロッパのマレフィキウム (maleficium) と類似している。マレフィキウムとは、魔女の悪意による行為で、魔術を用いて、人々や動物に被害を与えることである(上山, 牟田 1997)。

Neumann, I. B., "Pop Goes Religion: Harry Potter meets Clifford Geertz", *European Journal of Cultural Studies*, 9(1), 2006, 91-92.

上山安敏/牟田和男編『魔女狩りと悪魔学』、人文書院、1997年、147-148頁

も例外ではない。ハーマイオニーは、「人さらい」たちに捕まって拷問を受ける。

アンブリッジは、「マグル生まれ登録委員会」の委員長になり、マグル生まれの魔法使いや魔女を弾圧する。彼女は、マグル生まれであるということだけで、魔法使いの杖を奪ったと疑い、拷問をした。原作では死者も出た残酷な弾圧であったと描かれているが、映画ではこのような場面は完全に削除されている。

Julia Eccleshare (2002) は、こうしたヴォルデモート一派による「マグル狩り (Muggle-torture)」が、アメリカの白人至上主義の秘密結社、「クー・クラックス・クラン」(Ku Klux Klan)¹⁶に似ていると述べている¹⁷。

ヴォルデモート支配下のマグルへの差別を示す例は、魔法省の入り口に建てられた新しい像から知ることができる。この像は、魔法使いと魔女が華やかな玉座に座り、数百人のマグルを踏んでいる形状をしており、像の台座には、「Magic is Might (魔法は力なり)」と刻まれた石板も載っている。このように、この像は魔法族がマグルを支配すべきであることを示している。

純血に対するヴォルデモートの強迫観念 (obsession) は、20 世紀のヨーロッパとアメリカにおいて、白人こそが他の人種より優越していると主張する論理と類似している¹⁸。特に、多くの『ハリー・ポッター』の研究者はヴォルデモートとヒトラーの類似点を指摘する。

例えば、Mikhail Lyubansky (2006) は、反マグルの政治システムは、読者にヒトラーとナチスの反ユダヤ主義 (anti-Semitism) と人種イデオロギー (racial ideology) を連想させると述べている¹⁹。

ヒトラー²⁰もヴォルデモートも、他民族や他種族の血を引いているが、その事実を否

¹⁶ Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*. London: Continuum, 2002, p.80

¹⁷ クー・クラックス・クラン(Ku Klux Klan)とは、アメリカの秘密結社、白人至上主義団体である。南北戦争後、南部地方で黒人排斥を目的として結成され、現在でも、全米で 5000 人が「クラン」と名のつく組織に所属しているといわれる。

浜本隆三『クー・クラックス・クラン: 白人至上主義結社 KKK の正体』、平凡社新書、2016 年

¹⁸ Mendelsohn, Farah. "Crowning the King: Harry Potter and the Construction of Authority.", *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, Ed. Lana A. Whited. Columbia and London: U of Missouri P, 2002, p.7.

¹⁹ Lyubansky, Mikhail. "Harry Potter and the Word That Shall Not Be Named." *The Psychology of Harry Potter*, Ed. Neil Mullholand, Dallas: Benbella Books Inc., 2006, pp.233-248.

²⁰ 英紙デイリー・メールなどの報道によると、ヒトラーの親族39人からDNAを採取し検査を行ったところ、そのDNAはヒトラーがユダヤ民族に生物学的に関連するものだったという。

Hall, Allan. DNA tests reveal 'Hitler was descended from the Jews and Africans he hated', Daily Mail, August 24, 2010. (<https://www.dailymail.co.uk/news/article-1305414/Hitler-descended-Jews-Africans-DNA-tests-reveal.html>, 2021 年 1 月 27 日閲覧); So, Jimmy. DNA Tests: Hitler Descended From Jews, Africans?, CBS News, October 25, 2010. (<https://www.cbsnews.com/news/dna-tests-hitler-descended-from-jews-africans/>, 2021 年 1 月 27 日閲覧)

定する²¹、という共通点がある(Ostry, 2003; Reagin, 2011; Barratt, 2012)²²。つまり、ヒトラーの先祖の中にユダヤ人がいる可能性があり、ヴォルデモートの父親は、魔法使いではなく、マグルである。それにもかかわらず、ヒトラーとナチス・ドイツは、アーリア人こそが最も優れている人種であり、その純血を守るために、アーリア人以外の血が混ざることとを恐れて、非アーリア人であるユダヤ人やジプシーなどを虐殺する²³。ヴォルデモートも、徹底的な「純血主義」であり、魔法使いだけの世界を作ろうとか考え、マグル生まれの魔法使いや彼らを庇う者への殺戮を繰り返す。

『ハリー・ポッター』における人種問題は階級問題と密接な関連がある。これに関連した議論は、第四章で詳しく論じるが、『ハリー・ポッター』の魔法世界は、魔法使いと非魔法使いとを区分し、さらに魔法使いを純血、半純血、マグル生まれ等の階級に分け、純血主義者魔法使いの人種的優越性を強調し、彼らの地位を永続化しようとするものである。

2. ヒトたる存在に対する偏見と差別

前述したように、魔法世界の中にあつて、人種による差別化、区別化は、人間かヒトたる存在かどうかによって表象している。魔法使いは、自分たちとは異なる人種であるヒトたる存在について差別意識を抱く。これは、『ハリー・ポッター』原作と映画においての人種問題は、前述したマグルとマグル生まれの魔法使いだけではなく、複雑に絡み合うことが示されている。魔法使いによるヒトたる存在への差別は、現実の人間世界における人種差別に類似している。

以下では、このことについて詳しく述べる。

[巨人族/混血巨人族]

魔法世界では巨人族と巨人族混血は原作でも映画でも、文明化されず、暴力的であり、野蛮な魔法生物に描写される。これは巨人族混血のハグリッドを通してよく分か

²¹ 前述したように、魔法世界において、純血、半純血、マグルなどはそれぞれ異なる人種に該当する。したがって、現実世界と魔法の世界を同一視すれば、半純血であるヴォルデモートは混血である。

²² Ostry, Elaine. "Accepting Mudbloods: The Ambivalent Social Vision of J.K. Rowling's Fairy Tales.", *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol, Westport: Praeger, 2003, pp. 89-101.

Reagin, Nancy R. *Harry Potter and History*, Hoboken: John Wiley & Sons, Inc, 2011.

Barratt, Bethany. *The Politics of Harry Potter*, New York: Palgrave Macmillan, 2012.

²³ ただし、ヒトラーとナチ・ドイツのアーリア人種観は、ナチス特有のものでもない。アーリア人＝光の力、ユダヤ人＝闇の力という二元論は、すでに19世紀から広くヨーロッパ全体に見られた発想である。

原田一美 「ヒムラーのアーリア人種観とその帰結」、『パブリック・ヒストリー』、第2号、2005年、108頁

る。ハグリッドはhogwartsの「魔法生物飼育学」の教授であるにもかかわらず、ドラコをはじめとする大多数の生徒にはまだ無知で暴力的な巨人の森番として扱われる。

また、「日刊予言者新聞」の記者リータ・スキーター (Rita Skeeter) はハグリッドの出自を告発し、「血に飢えた狂暴な巨人」を教授に任命したダンブルドアを非難する。そして、アンブリッジは巨人混血のハグリッドへの敵対心を躊躇せずに表わして、彼との会話の中で、まるで劣った生物とコミュニケーションするように非常にゆっくり、はっきりと彼女の言葉を伝える。そしてハグリッドの授業を無視、軽蔑し、彼の小屋を急襲して解雇しようとする。

「善」に属すると考えられる魔法省の大臣コーネリウス・ファッジ (Cornelius Fudge) も、「巨人」という違う人種に対して偏見を抱いていると表現している²⁴。さらにハグリッドと懇意にしているロンも、巨人族に強い先入観を示し、ハリーやハーマイオニーさえもハグリッドを彼らと同等に思わないことを暗示する。

魔法世界において、こうした巨人族混血に対する偏見と差別意識は、ハグリッド本人さえも持っている。これはハグリッドの異父弟である巨人族グロウプ (Grawp) を通してよく表現されている。ハグリッドは巨人群の中で、グロウプを発見し、彼をhogwartsに連れてきて、魔法使い (白人) のように行動する方法を教えて、グロウプを魔法世界の「文明化された社会」に完全に同化させようとする。これは魔法使いがハグリッドにとった態度と似ている。ハグリッドは魔法使い (白人) は文明化され、知的であるが、巨人族と巨人族混血は野蛮で無知な他者として見ていることになる。つまり、ハグリッドの内面に形成されているこうした意識は、グロウプより自分の方が知的な存在であるという意を表す。

これは、Frantz Fanon (1986) のいう「黒い皮膚・白い仮面」に似ている。彼によれば、黒人が抱く劣等コンプレックスは、白人を憎みつつ、白人になりたい、白人に近づきたいと願う矛盾した感情から成り立っている²⁵。しかし、ハグリッドのグロウプに対する態度や行動は、彼の天性ではなく、魔法使いたちによる価値観操作の影響である。

結局、ハグリッドは自分の行動が魔法使いたちによる支配の産物であることに気付かないまま、魔法使いたちの価値観を受け入れていると考えられる。

²⁴ ダンブルドアは、魔法世界の平和のために、巨人族に使者を送って和解するべきだと助言するが、ファッジは無視する。

²⁵ Fanon, Frantz. *Black Skin, White Masks*, Trans. Charles Lam Markmann, London: Pluto, 1986, p.88.

[人狼]

巨人族や混血巨人族と同様に人狼²⁶も、魔法世界において偏見と差別を受ける「ヒトたる存在」である。

原作では、人狼は毛が多くて図体が大きい狼と描写される。しかし、映画の中の狼は、人間と同じような容姿をしているが、ゴラムのように痩せており、体には毛がほとんどない。これは映画の中の人狼が、原作よりもっと悲惨な存在として描かれていることを表す。

人狼のうち、リーマス・ルーピン (Remus Lupin) は「闇の魔術に対する防衛術」(Defense Against the Dark Arts) を教えるhogwartsの教授である。原作『アズカバンの囚人』においてルーピンは、生徒に愛情を持っており、人気もあった。しかし、人狼である正体が明らかになったことで、人狼は人間にとって危険な存在であるという固定観念のため、ルーピンは生徒や生徒の父母たちから強い圧力を受け、辞任する。

映画においては、ルーピンは生徒の父母たちに自分の正体が明らかになる前に自ら辞退する。このことは、映画では人狼の差別を浮き彫りにさせないことで、差別の存在を否定しようとするものである。



『アズカバンの囚人』

〈図 4-1〉 自ら辞退する人狼のルーピン教授

[小鬼]

ローリングは、小鬼を「つり上がった黒い目」、「浅黒い肌」をもつ生き物として描写している。Giselle Liza Anatol (2003) は、ローリングのこうした描き方から、小鬼をオリエント的他者として解釈している²⁷。映画『ハリー・ポッター』でも、小鬼は

²⁶ 人狼は、普段は人間であるが、満月になると狼に変身する。ルーピンは、少年時代、グレイバック(狼人間)がライアルに復讐したときに咬まれ、人狼となった。

²⁷ Anatol, Giselle Liza. "The Fallen Empire: Exploring Ethnic Otherness in the World of Harry Potter." *Reading Harry Potter: Critical Essays*. Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003.

体が小さいにもかかわらず、長い先の尖った鼻と耳、長い指と鋭い爪をもっているヒトたる存在として描かれる。

小鬼は、巨人とは異なり賢く、「グリングotts」(Gringotts) という銀行も経営しており、魔法世界の魔法使いの生活と密接に結びついている。しかし、小鬼は魔法使いの命令を受けることを嫌うだけでなく、むしろ彼らに敵意を抱いている。小鬼が魔法使いたちに対して敵意を抱く原因となったのは「杖の規制」である。

魔法世界における杖は、魔法使いや魔女のみが持つことができる²⁸。杖がなければ、魔法使いや魔女は魔法を使うことができない。そのため、杖は魔法使いと非魔法使いを区分する重要な魔法道具となる。魔法世界の杖の使用規則第3条によると、「ヒトにあらざる生物は、杖を携帯し、またはこれを使用することを禁ず」としている。つまり、小鬼やハウスエルフといったヒトたる存在は杖の所有や使用を禁じられている。魔法使いが小鬼やハウスエルフへの支配を容易にするために禁じたものである。これは、小鬼やハウスエルフに対する明確な差別に当たる。

原作では、こうした杖の禁止に反発して小鬼が小鬼の反乱(Goblin Rebellion)を起こしたと描かれている。ところが、その反乱がどのようなものであったかは、原作はもちろん映画でも、詳しく描かれていない。しかし、小鬼の反乱は、魔法使いの抑圧や差別に対する小鬼の闘争であり、魔法世界で魔法史の授業や試験で言及されるほどの大事件であり、彼らに深く記憶されているのである。

[ハウスエルフ]

原作『ハリー・ポッター』において、ハウスエルフ²⁹は、自分の持ち主に権利を縛られ、一生、奉仕を強制される奴隷のような存在として描かれている。ハウスエルフはしばしばアフリカ系アメリカ人に例えられる(Horne, 2010; Carey, 2003)³⁰。特に、ハウスエルフの英語は不完全で、1930-40年代のハリウッド映画などに登場するアフリカ系アメリカ人の喋り方(Carey, 103-104; Barratt, 48³¹)とよく比較される。

²⁸ 魔法使いや魔女であっても、原則的に未成年で退学になった際には、杖は没収され折られてしまう。また、逮捕された魔法使いや魔女も杖は使えない。

²⁹ 『ハリー・ポッター』におけるハウスエルフのイメージは、トルキンの作品に登場するエルフのイメージとは異なる。原作『ハリー・ポッター』に登場するハウスエルフは、自分の持ち主に縛られ、奴隷のような生活をするが、トルキンの作品では、エルフは美しく善なる存在である。

³⁰ Horne, Jackie C., "Harry and the Other: Answering the Race Question in J. K. Rowling's Harry Potter.", *The Lion and the Unicorn*, 34(1), 2010, p.81.

Carey, Brycchan. "Hermione and the House-Elves: The Literary and Historical Contexts of J. K. Rowling's Antislavery Campaign.", *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003. pp.103-104.

³¹ Barratt, op. cit., p.48.

こうしたハウスエルフの奴隷状態に関心を持って耳を傾ける者はハーマイオニーである。映画では全く触れられていないが、ハウスエルフが不当な扱いを受けていることに反感を抱き、「ハウスエルフ解放戦線(S.P.E.W)」なるものを設立した。

しかし、ハウスエルフたちは自分たちの待遇改善や地位向上を目指して腐心しているハーマイオニーをまるで異常で危険な存在であるかのように見る。特に、不本意ながらクラウチ(Crouch)家へ奉仕から解放されたウィンキー(Winky)は、解放されたことをむしろ、恥辱だと感じ、酒浸りになり、ハーマイオニーを嫌がる。

マルフォイ家への奉仕から解放され、自由になったドビーも、ハリーを新しい「主人」のように慕い、彼に献身的に尽くす。こうしたことは、ハウスエルフたちが魔法使いや魔法の価値観と規範を何の抵抗もなく受け入れることを表す。しかし、それはハウスエルフたちの「天性」ではなく、魔法使いの術によってこの種族に植えつけられたものである。つまり、魔法使いや魔法の価値観と規範がハウスエルフたちに内在化されている。

シリウス家のハウスエルフであるクリーチャー(Kreacher)も、魔法使いの「純血性」に深くこだわっていたシリウス家の価値観を内面化して、「純血」でない魔法使いたちを侮蔑し、母親に背いて家を飛び出したシリウスを憎む。

ハーマイオニーのS.P.E.W.活動に対してハリーとロン、ハグリッドなどは無関心な態度を示す。例えば、ハリーは自分が個人的に親しくなった被抑圧者に対して同情したり好意を示したりするばかりで、その被抑圧者を生み出す社会構造を変革することにはほとんど興味を示さない。

Prasida (2013)によると、これは暗黙的(implicit)人種差別に該当する³²。暗黙的人種差別は、個人の意図と意識の影響が排除された無意識的な差別であり、ヴォルデモートをはじめとする純血主義者による表面に現れる差別、つまり、明示的な人種差別とは区別される。

以上のように、『ハリー・ポッター』原作では、ハウスエルフ、巨人族や人狼などがおかれた社会的な状況を通して、他人種もしくは少数民族に対する現代社会の差別、偏見や無関心を指摘しているが、ハウスエルフや巨人族など「劣った人種」として描くのは、差別的な描き方であると指摘される。

³² Prasida, P., "Racism in Harry Potter Series.", *International Journal of English and Literature (IJEL)*, 3(5), 2013, p.29.

『ハリー・ポッター』映画では、人狼ルーピンのルーツが知れ渡る前の辞退、純血主義の魔法使いのハウスエルフたちに対する差別的な行動や、ハーマイオニーの SPEW 活動に関する部分を削除し、人種間の違いは認めながらも、人種の違いによる差別の存在を否定しようとする。

3. 人種多様化と非白人の周辺化

『ハリー・ポッター』における人種表象を明らかにするためには、前述した魔法世界の比喩的な人種だけでなく、各キャラクターを演じる俳優たちの人種表象も検討しなければならない。ホグワーツ魔法魔術学校には、白人だけではなく、黒人、アジア人の生徒など、非白人の生徒が在籍している。

非白人の生徒を例に挙げると、まず、アフリカ系のキャラクターには、ハリーたちの友人であるディーン・トマス (Dean Thomas) や、ジョージ・ウィーズリー (George Weasley) の妻となるアンジェリーナ・ジョンソン (Angelina Johnson) がいる。

また、チョウ・チャンは中国系であり、パーバティ (Parvati) とパドマ・パチル (Padma Patil) はインド系である。

『ハリー・ポッター』原作と映画では、一見すると、肌色の異なる人種間の争いはないように見える。人種についての具体的な言及を避けることで、人種的マイノリティは問題にならないことを強調していると考えられる。つまり、ホグワーツの生徒たちを多様化させることで、多文化主義を擁護しようとしているのかもしれない。しかし、こうしたことは、非白人を見えない存在にするので問題となる。

『ハリー・ポッター』は、ハリー、ロン、ハーマイオニーなどの白人キャラクターの目を通して描かれる物語であり、白人キャラクターを中心に物語は展開される。前述した<表 4-2>から分かるように、『ハリー・ポッター』において、主要キャラクターは白人である。映画『ハリー・ポッター』に、10分以上登場する主要キャラクターは25人であるが、その中で非白人は一人もいない。ハリーの友人である非白人のアンジェリーナ・ジョンソンとディーン・トマスなどは作品の中心プロットでは、ほとんど役割がない。

白人中心的な思考は、『ハリー・ポッター』原作と映画、両方に含まれている。特に、キャラクターの描写に人種的偏見が存在する。例えば、ディーンは、映画『死の秘宝 PART1』を除いた全作品に登場するキャラクターであり、ロンの妹であるジニーの

彼氏としての役割もする。原作でディーンは、「ロンより背が高い黒人 (A black boy even taller than Ron)」として描かれている。ローリングは、このように暗黙的に人種差別的な用語である「黒 (black)」という用語を使用して、「white」のロンと対比させる。こうした描き方に対して、Prasida (2013) は人種差別的な用語である「black」より、「浅黒い肌の少年である (a dark-skinned boy)」と言った方が適切だったと主張している³³。しかし、こうした主張は、ディーンが特定の人種に限られることを避けるだけであり、彼が白人ではないことは変わらない。つまり、彼の肌色が「black」であれ、「dark」であれ、白人でないことは明らかである。

こうした例は、hogwartsの生徒であり、ダンブルドア軍団の一員でもあるアンジェリーナの描写でも現れる。ローリングは彼女を「長く編んだ髪をした背の高い黒人少女 (a tall black girl with long, braided hair)」と表現し、白人と対比させる³⁴。

『ハリー・ポッター』原作と映画の中で、非白人でありながら比較的比重のあるキャラクターは、中国系と思われるチョウ・チャンである。しかし、チョウ・チャンはその名から、人種差別問題を内包している。チョウ・チャンの名前は、東洋人を、特に東アジア人を卑下する名称 Ching Chang Chong を連想させる。これは作品の中で比重が大きくななくても、他の非白人の名前に力を入れたのとは対照的である。例えば、インド系であると推察されるパドマ・パチル (Padma Patil) とパーバティ・パチル (Parvati Patil) 姉妹は、ヒンドゥー教に登場する女神の名前を借用し、リー・ジョーダンやアンジェリーナ・ジョンソンは、黒人の間でよく見られる名字を選んでいる。もしローリングがキャラクターの作名を、東洋人を卑下する目的で使用したとしたら、それは深刻な人種差別であり、そうではないならば、アジア文化に対する自分の無知をさらけ出すことになる。

³³ Prasida, op. cit., p.28.

³⁴ Lyubansky, op. cit., pp.233-248.



『不死鳥の騎士団』

〈図 4-2〉 パチル (Patil) の姉妹とチョウ・チャン

ローリングはまた、『ハリー・ポッター』のスピノフ作、『ファンタスティック・ビースト』でのナギニ役が、アジア人卑下だと思われ、東アジアへの理解が不足していると批判を受けている。ナギニは、『ハリー・ポッター』でヴォルデモートが手足のようにこき使うヘビであるが、『ファンタスティック・ビースト』では、人間として登場する。議論になったのは、ナギニが、実際には東洋系の女性だったという設定である。つまり、東洋系のキャラクターだからといって、必ずしも肯定的に描写される理由はないが、『ハリー・ポッター』の世界観に登場する数少ない東洋系のキャラクターが、人種差別的な名前を持ち、悪役の手下で消費されたことに対する不満が沸き上がったと解釈される。

ナギニの事態が表す問題は、作家が『ハリー・ポッター』の全般にわたって主張していた「魔法世界のメタファーを通して、人間社会の人種差別に反対する」という重要なテーマを正面からないがしろにすることである。

結局、『ハリー・ポッター』においての多文化主義は、主要キャラクターである「白人」の周りに非白人がいるトークンニズム (tokenism) に過ぎないと考えられる。トークンニズムとは、形式だけの平等や差別撤廃の建前主義を意味する。つまり、人種トークンニズムは、社会や組織が人種平等に関心を持っている点を示すために象徴的に非白人を非常に少ない数で配置することを意味する。

原作『炎のゴブレット』のクリスマス・ダンスパーティ (The Yule Ball) のシーンにおいても、人種差別と思われるところがある。

ローリングは、クリスマス・ダンスパーティにおいて、セドリック・ディゴリー (白人) と中国系のチョウ・チャン、フレッド・ウィーズリー (白人) とアフリカ系のアンジェリーナ・ジョンソン、ロン (白人) とインドやパキスタン系と推定されるパドマ・

パチル、ハリー（白人）とパーバティ・パチルなどをカップルにし、人種間の交流と和合を強調する。

ローリングが彼らの人種的背景についての言及を避けることは、先に述べたように、ホグワーツ魔法魔術学校では、人種差別や偏見といった問題は、存在しないことを強調するためであると思われる。しかし、非白人女性のパートナーは、全員、白人男性であり、アジア系男性と白人女性の組み合わせは存在しない。また、シリーズ全体をひっくるめてアジア系男性のキャラクターは登場しないということで批判を受けており、Anatol (2003) は、『ハリー・ポッター』を帝国主義的であり、保守的な作品であると評価している³⁵。

一方、映画『炎のゴブレット』では、非白人のアイデンティティを強調する場面を見ることができる。例えば、ダンスパーティーでチョウ・チャンは、中国のチャイナドレスを連想させるパーティー服を着て登場し、パチル姉妹は、インドの伝統的な衣装のような姿で登場する。このシーンは、原作では描かれていないもので、原作ではセクシュアリティが強調されている。原作でのパチル姉妹の描写は以下の通りである。

パーバティは寮の階段下でハリーを待っていた。とてもかわいい。ショッキング・ピンクのパーティードレスに、長い黒髪を三つ編にして金の糸を編み込み、両方の手首には金のブレスレットが輝いていた。

(小説『炎のゴブレット』(下)、静山社、2002年、81頁)

原作では、彼女たちの衣装を通して、人種アイデンティティを把握することはできない。映画の中の彼女たちのパーティー服は、人種や文化的背景を明確にする。これは、一般的なドレスを着てパーティーに参加したハーマイオニー、ジニー、フラーなどとは異なる衣装である(図 4-3)。

Nadia Adelia (2019) によれば、映画は、チョウ・チャンとパチル姉妹の民族衣装風のドレスを通して非白人が白人とは異なる人種であるということを明らかにしている³⁶。つまり、イギリス人であるハーマイオニーとジニーはもちろん、フランス人のフラーでさえ、白人は一般的なドレスを着る。しかし、同じくイギリス人であるチョウ・チャンとパチル姉妹は、中国やインドを連想させる衣装を着ている。これは白人が着

³⁵ Anatol, op. cit., p.186

³⁶ Adelia, Nadia. "Stereotyping and Othering of Non-White Characters in "Harry Potter" Movies." *Kata Kita*, 7(1), 2019, p.20.

る服が一般的なものであり、白人文化 (White culture) が行動基準 (standard of behavior) であるという白人優越主義を示す³⁷。

結局、原作は非白人を見えない存在にしているが、映画は人種のアイデンティティを強調しており、それが逆に差別につながっていると考えられる。



(Cho Chang / Parvati / Fleur / Hermione) 『炎のゴブレット』

〈図 4-3〉 ダンスパーティでの衣装

本来、民族衣装は、それぞれの歴史や思想、文化を反映し、様々な形態と形式を持っている。民族衣装と関連して問題となるのは文化の盗用 (Cultural appropriation) である。

文化の盗用は、ある文化圏の要素を他の文化圏の者が流用する行為を示す。イギリス人として、イギリス以外の民族衣装のようなドレスを学校のパーティーで着るのは、文化盗用の問題を招く可能性がある。

チョウ・チャンとパチル姉妹の場合、イギリス人とはいえ、それぞれ中国系とインド系とされ、文化の盗用は適用されず、その文化的アイデンティティを強調したものとみることができる。しかし、重要なことは、彼女たちの映画の中の役割が、原作とあまり変わらず、セクシュアリティの強調のみにとどまっているということである。もちろん「原作に忠実な映画を作りたい」という作家の要求に応じて、ストーリーラインとプロットの変更は難しかったと判断される。

『ハリー・ポッター』原作と映画は、「マグル」や「ヒトたる存在」に対する差別の問題を取り上げ、人種差別に反対する立場をとる。そして、『ハリー・ポッター』は善

³⁷ Gulati-Partee, Gita & Maggie Potapchuk. "Paying Attention to White Culture and Privilege: A Missing Link to Advancing Racial Equity." *The Foundation Review*, 6(1), 2014, pp.25-38.

悪や優劣は人種で決まるものではないということを見せてくれる。これは、善側の代表であるハリーと、悪側の代表であるヴォルデモートが同じ「半純血」であることを通じて分かる。また、ローリングは最後の戦闘が終わった後、hogwartsの大広間でのシーンを通じて、人種間の和合を描いている。

マクゴナガルが寮の長テーブルを元通りに置いたが、もう誰も、各寮に分かれて座りはしなかった。みんなが交じり合い、先生も生徒も、ゴーストも家族も、ケンタウルスも屋敷しもべ妖精も一緒だった。

(小説『炎のゴブレット』(下)、静山社、2002年、81頁)

このシーンを通して、『ハリー・ポッター』での人種間の葛藤は、今後問題にならないことを暗示している。しかし、『ハリー・ポッター』は、善悪を問わず、主要キャラクターはすべて白人で、魔法世界を覆う葛藤は完全に「白人の目を通してナレーションされ、その人物の行動を介してのみ決定される」ということが分かる³⁸。

また、Prasida (2013) が指摘するように、純血を特権化 (Privileging) し、半純血とマグル生まれを二等市民 (second class citizens) で扱うことは、イギリスの非白人の迫害 (persecution) 文化の枠組み (cultures framework) と似ている³⁹。

これらのことから、『ハリー・ポッター』における人種表象は、以下の結論を導くことができる。『ハリー・ポッター』の原作には、ローリングが意識的であれ、無意識的であれ、イギリス帝国主義のイデオロギーが隠されていることがわかる。イギリス帝国主義の特徴については、様々な議論がなされてきたが、本論文と関連して重要な特徴は、「支配」と「排除」である。帝国主義者たちは、高貴な血統を持っているのは自分たちだけであり、植民地の人々は、抑圧され支配されても満足しなければならないという意識を持った。これは『ハリー・ポッター』でも同じであり、ハウスエルフのような「ヒトたる存在」は、自分の持ち主に縛られ、奴隷のような生活をする。

また、イギリス帝国主義が対外的膨張を強行することで、被支配層を通常の人種で完全に排除してしまったように、『ハリー・ポッター』は、非白人を周辺化している。つまり、ローリングは、hogwartsの生徒たちを多様化させることで、多文化主義を擁護しようとしているのかもしれない。しかし、このような態度は、非白人を見えな

³⁸ Lyubansky, op. cit., p.233-248.

³⁹ Prasida, op. cit., p. 29.

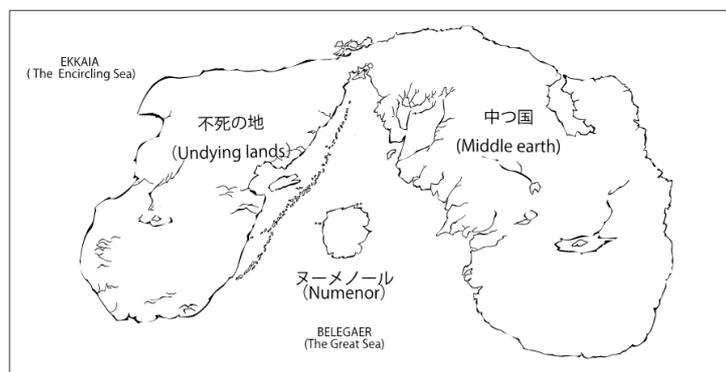
い存在にするので問題となる。

そして、『ハリー・ポッター』における巨人族と狼のような「ヒトたる存在」は、マグルの世界の「異邦人」に近い。異邦人は、社会集団の構成員が共有する固有の「文化のタイプ」を共有しない人を指す⁴⁰。魔法世界での魔法使いたちは、「ヒトたる存在」を自分たちとは全く別の存在として見て警戒する。ハーマイオニーのように彼らを暖かく見つめる視点もあるが、これも彼らを「助けるべき存在」、「かわいそうな存在」としか見ていない。

第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』における人種表象

1. 「中つ国」の地域と人種差別

トールキンの著書『シルマリルの物語』(Silmarillion)によると、アルダ(Arda)は「中つ国」の唯一神エル・イルーヴァタール (Eru Ilúvatar) とアイヌア (Ainur) によって作り出され、マンウェが支配した世界である。『指輪物語』の舞台となる「中つ国(Middle Earth)」は、アルダの中の一つの大陸である。すなわち、〈図 4-4〉から分かるように、「中つ国」は地図上の右にある大きな大陸であり、左の大きな大陸は不死の地 (Undying lands) である。ここには、神格である「ヴァラ (Vala)」や「マイア (Maia)」、「エルフ」が住んでいる。そして、二つの大陸の間にある大きな島はヌーメノール人が住んでいる国である。



出典：David Day (2001)⁴¹を参考に作成

〈図 4-4〉 アルダ全図

⁴⁰ Simmel, G., "The Stranger.", *Georg Simmel: On Individuality and Social Forms*, Ed. Levine, D. N., Chicago, IL: University of Chicago Press, 1971, pp.143-150.

⁴¹ Day, David. *Characters from Tolkien: A Bestiary*, London, Chancellor Press, 2001.

「中つ国」は、エルフの森、人間の国、モルドール(サウロンの拠点)、ホビット庄、ナルゴスロンド(要塞都市)などが存在し、さらに未知の大地もある空間である。しかし、この多元的空間は、冥王サウロンが率いる闇の勢力と、自由の民の勢力に二元化されている。この二つの勢力は「中つ国」における地理的位置によって区分されている。すなわち、「中つ国」の東部地域は主にサウロンの領土で、人間属の様々な民族は彼と同盟を結んでいる。一方、西部地域はサウロンと反目する人々が住んでいる。西部地域は合理的で人道的で崇高な人々、サウロンに反目する人々、そして支配と専制の脅威の物語から成り立っている。「中つ国」の善人は、ほとんど白人であり、悪人は非白人で構成されており、人種差別主義の議論が起こっている。

世の中の事象を善と悪の二つに分類する事は、マニ教的の善悪二元論である。マニ教の善悪二元論は、世の中の事象を善と悪の二つに分類する事で世界を理解しようとする思想である。そして、植民地の世界にはマニ教的善悪二元論しかない⁴²。

こうした善と悪の二分法的思考は、「中つ国」の生態系の保護に対する認識の問題においても適用される。『指輪物語』の「中つ国」では、人間、エルフ、ドワーフ(小人)、エント(木に似た巨人)、ホビットなどの善側の連合軍は、自然と共生し、調和する様子が描かれている。しかし、悪の帝王であるサウロンの軍隊(オークとトロールなどで構成)は、地下の鉱物を採掘しながら、自然環境を無差別に破壊する姿が描かれている。

『ロード・オブ・ザ・リング』でも、善側の連合軍は自然との調和を重視するが、悪側は自然を破壊する様子で描かれている。以下、これについてももう少し詳しく述べる。

ホビット庄は、ホビットらが住む地域である。ホビット庄の風景は、映画『旅の仲間』で見ることができる。映画は、ホビット庄の穏やかで牧歌的な風景と平和な暮らしを営む住民の姿をユートピア的に描き出している(図4-5)。

⁴² ファノン、フランツ『地に呪われた者』、鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、2015年(Fanon, Frantz. *Les damnés de la terre*, François Maspero, 1975)



『旅の仲間』

〈図 4-5〉 ホビット庄の風景と子供たち

エルフ族が住む裂け谷 (Rivendell) の自然も美しく描写され、エントの生息地であるファンゴルン (Fangorn) も樹木の茂った林が描かれている (図 4-6)。



『旅の仲間』

〈図 4-6〉 裂け谷とファンゴルン

一方、「中つ国」における悪側は、モルドールとアイゼンガルドの自然環境を無差別に破壊する (図 4-7)。冥王サウロンがいる暗黒の国モルドールは、噴火している火山があり、荒涼とした大地の地下には、戦争のための基地がある。Charles Moorman (1968) は、モルドールが産業的で科学的であり、黒いエンジンや工場は、ホビット庄の穏やかな農地と対照的であると主張する⁴³。また、魔法使いサルマンの居城として用いられていたアイゼンガルド (Isengard) は、武器を鑄造するための深い穴となっている。アイゼンガルドは産業化と関連する特徴が最も著しく描写されているところである。サルマンは美しいオルサンク (Orthanc) の自然を毀損し、ワグ (Warg)⁴⁴とオーク

⁴³ Moorman, Charles. "The Shire, Mordor, and Minas Tirith", *Tolkien and the Critics. Essays on J.R.R. Tolkien's The Lord of the Rings*, 1968. Eds. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbaro, Notre Dame and London: Notre Dame University Press, 1976, pp.201-217.

⁴⁴ 鋭い嗅覚を持った凶悪な狼である。映画では、ハイエナのような風貌の獣として登場する。

を集めて武器を製造するとともに、地下要塞と鍛冶屋でオルサンクを満たす。

Charles A. Huttar (1975) はアイゼンガルドを「産業化された地獄」と呼び、産業的なものと、田園的なものを対比させている⁴⁵。



『旅の仲間』

〈図 4-7〉 モルドールとアイゼンガルド

産業化に対する否定的な見方が直接現れるシーンは、フロドがガラドリエルの鏡⁴⁶を通して、炎に包まれたホビット庄の未来の光景を見る場面である⁴⁷。つまり、『旅の仲間』で、フロドはガラドリエルの鏡を通して、「一つの指輪」がサウロンに戻り、ホビット庄が炎に包まれ、街の人々が奴隷にされる未来の光景を見る (図 4-8)。ガラドリエルの鏡は、命令によって過去・現在・未来のさまざまな光景を映し出す水鏡である。



『旅の仲間』

〈図 4-8〉 燃えるホビット庄と奴隷にされたホビット族

⁴⁵ Huttar, Charles A., “Hell and the City: Tolkien and the Traditions of Western Literature.” *Lobdell*, 1975, pp.135-136.

⁴⁶ 命令によって過去・現在・未来のさまざまな光景を映し出す水鏡である。

⁴⁷ 原作では、荒れ果てたホビット庄と表現され、それもフロドではなく、サムが見た幻影である。ホビット庄に侵略してくるオーク族と、奴隷にされるホビットたちは、映画でしか見ることができない場面である。

その後、ホビット庄を建て直すために、サムはロスローリエンでガラドリエルから受けた「灰色の小箱」を使用する。その箱に入っていた種子は、荒廃したホビット庄に美しい草木を蘇らせてくれる。

以上のように、『ロード・オブ・ザ・リング』において、「中つ国」の環境を破壊するのは、黒人とされるオークであり、それに対抗して、自分たちの領土と自然を保護しようとする側は、善側の連合軍(白人)と描かれており、人種差別とみなされる。また、白人優越主義者が生態リスクを認知して、生態系の保護のためには、人間さえ排除できるというエコファシズム (Ecofascism) ⁴⁸との類似性とみることができる。

そして、善と悪の二分法的思考は、「西欧＝善」、「非西欧＝悪（ないしは悪にはならないように西欧が見守らなければならない存在）」で定義される西欧中心の二項対立の思考を問題視する「ポスト・コロニアリズム」(post-colonialism) とも関わる。

その代表的な例が指輪戦争の後、アラゴルン王がサウロンに支配されていたハラドリムと東夷を解放し、自由を与えたことである。ドゥーネダイン(Dúnedain)の王であるアラゴルンはハラドリムと東夷に文明が生まれ、他の人種と平和に暮らす方法を教えていると主張することで、ドゥーネダインの優秀さを強調した。

王からのこの赦は、民族間の平和と繁栄をもたらした。しかし、この赦は、また違う差別行動と言える。つまり、貴族の血(Dúnedainの血)がハラドリムと東夷に彼らの戦争を止めるように言うときだけ、彼らは長期にわたる平和を達成することができるので、これは劣った人種に対する優越性として見ることができる。これは自分よりさらに弱い立場にある人々にたいして支配的な言説を行使することであり、他方において、自らを支配する言説をつくりあげることである。

『ロード・オブ・ザ・リング』で他者を文明化するというこのモチーフは白人優越主義、19世紀の帝国主義侵略を正当化した帝国主義的思想を示す。植民地開拓者である白人が未開のアフリカとアジアの教師であると考えたことと類似している。

1899年、イギリスの詩人 Joseph Rudyard Kipling は「白人の責務(The White Man's Burden)」で、米国が野蛮で未開のフィリピンを文明化させ、貧困から救うために国を支配したと言った。西欧の植民地支配を野蛮な人種を支援しようとする西欧人の義務感表出と思いながら、その意識を「負担、重荷(burden)」と表現した。

⁴⁸ エコファシズムは、環境保護や動物愛護などを理由に、異論を排除して全体主義的な政策を推進し、権威主義や人権抑圧などを正当化する思想や傾向を指す。

2. 肌色と人種階層化

人種差別は、異なる身体や文化の特徴をもっている人たちを、警戒したり、軽蔑したりすることで、ある人種が本質的に他の人種より優れていると思うとき、発生する。今もなお、世界には「白人こそが最も優れた人種である」という固定観念を持つ人が存在する。このような現実と同様にファンタジー小説や映画においても人種差別が存在する。しかも、ファンタジーの世界での差別は種差別にまで拡大される。すなわち、ファンタジー小説や映画における種差別⁴⁹は、人種差別はもちろん、非人間差別も含む広義の意味の差別が行われている。

これまで白人は人種の一つと考えられず、いつも「ただの人間」、普遍的な人間存在の象徴、すべての人間の規準となるものとして存在した。

薄い肌色の方が好まれることは、植民地主義の歴史に深く根ざした問題である。白人たちは、「白」を「丁寧、理性、美しさ、優越性」に結び付け、「黒」は「野蛮、非理性、醜さ、劣等感」と結び付けた⁵⁰。つまり、白人たちは黒人たちに「白」は肯定的な価値であり、「黒」は否定的な価値であるという二分法を固定化させた。また、彼らは「外見」が自分たちと似ている被植民地の人々を優遇したと述べた⁵¹。

こうした「白人と非白人(有色人)」という二分法は、白人、非白人それぞれの内部に、より肌色が薄いほうが優れている、美しいと思われる「カラーリズム」(colorism)⁵²にも影響を与えている。カラーリズムは、世界中の多くの地域に存在する社会的な悪弊で、その地域の歴史的経緯や制度などによって、様々な形で生まれている。例えば、インドではカースト制度、アジアでは旧植民地宗主国との結びつきから、より肌色が薄いほうが優れている、美しいと評価される⁵³。

⁴⁹ ヒト以外の生物に対する差別。Singer(1975)によれば、種差別は自分自身が属する種の利益を擁護する一方で、他の種の利益を否定する偏見と態度である。

Singer, P., *Animal Liberation: Towards an End to Man's Inhumanity to Animals*, London: Paladin Granada Publishing, 1975.

⁵⁰ Hunter, M. L., "The Persistent Problem of Colorism: Skin Tone, Status, and Inequality.", *Sociology Compass*, 1(1), 2007, pp.237-54.

⁵¹ Keith, V. M. & Carla R. M., "Histories of Colorism and Implications for Education.", *Theory into Practice*, 55, 2016, pp.4-10.

⁵² 特にある一つの人種(または民族)の中において、肌色の濃淡で差別すること。小説家 Alice Walker が 1983 年に発表した、自分のエッセイ『In Search of our Mother's Gardens』で初めて使用した用語で、同じ人種内で、肌色に基づいて行われる偏見的または偏愛的待遇を意味する。

⁵³ Mariam, Simra. Daring To Be Dark: Fighting Against Colorism In South Asian Cultures, HuffPost, May 17, 2017.

(https://www.huffpost.com/entry/daring-to-be-dark-fighting-against-against-colorism-in-south_b_58d98c5fe4b0e6062d923024, 2021 年 1 月 25 日閲覧)

[中つ国の人種と社会的ヒエラルキー]

「中つ国」の人種間には、社会的ヒエラルキーが存在する。つまり、「中つ国」には、「農民 (peasants)」を代表するホビット、「貴族 (aristocrats)」のエルフ、「民主主義の支配者の地位 (democratic rulership) の増進者」、「助長者 (promoters)」の人間、「工場労働者 (factory workers)」と「重労働者 (hard laborers)」であるドワーフなど、人種は階層化されている⁵⁴。

Marjorie Burns (2006) も人種差別と関連して問題になるのは、「中つ国」が非常に階層的であり、かつ人種的階層の最上位にエルフと魔法使いがいることであると述べる⁵⁵。

そして、さらに『ロード・オブ・ザ・リング』は、『指輪物語』より人種差別的であると批判を受けている。Anderson Rearick (2004) によると、トールキンが「人種差別主義者」と評価されるのは、多くの批評家たちが映画に基づいて原作を評価するからであると述べている⁵⁶。つまり、批評家の評価は、『指輪物語』そのものに対する評価ではなく、『ロード・オブ・ザ・リング』に対する評価であるという。

このような内容に基づいて、この節では、映画の中の「中つ国」に住んでいる人種について分析する。

[エルフ]

エルフたちは、人間に似ているが、人間よりはやや細身で、髪の色は氏族にもよるが金、銀、黒など多様であり、肌は白い。ガラドリエルとアルウェンはエルフを代表する女性エルフであり、白い肌がバックライトによって、より白く輝き、神秘的に描かれる(図 4-9)。これは白人の白い肌が優れているという暗示を含んでいるのだろう。

⁵⁴ Drout, Michael D.C., *J.R.R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*, Routledge, 2013, p.104

⁵⁵ Burns, Marjorie. "King and Hobbit: The Exalted and Lowly in Tolkien's Created Worlds". *The Lord of the Rings 1954-2004*. Eds. Wayne G. Hammond & Christina Scull, Milwaukee WI: Marquette University Press, 2006, pp.139-41.

⁵⁶ Rearick, A., "Why Is the Only Good Orc a Dead Orc? The Dark Face of Racism Examined in Tolkien's World." *Modern Fiction Studies*, 50(4), 2004, p.863.



『旅の仲間』

〈図 4-9〉 ガラドリエルとアルウェン

「白」は純粹さや高貴さを印象づける色彩として使用され⁵⁷、白い肌は高貴な身分と富と権力の証として存在し続けてきた⁵⁸。白い肌は、社会でより高い階級、より多くの資本、より多くの権力を確保してくれる指標であり、さらに女性にとっては、より純粹で美しい女性性を構成する要素として機能してきた⁵⁹。

アルウェンは、『旅の仲間』において、冥王サウロンの支配下の黒の乗り手（指輪の幽鬼/ナズグル）であるアングマールの魔王の剣に刺されたフロドを助けることになる。

映画の中で、黒の乗り手は、黒いマントと頭巾を身につけて黒い馬に乗り、アルウェンを追いかけてくる。白馬（アスファロス）に乗ったアルウェンは、フロドを前に乗せて走って、黒の乗り手から逃げる。そして、アルウェンに挑発されて川に入った黒の乗り手が、白く泡立つ波の馬たちに蹴散らされて水に飲まれる⁶⁰。このシーンで、カメラは黒の乗り手と白馬に乗ったアルウェンを同じ場面の中に配置しながら、対比させる（図 4-10）。

⁵⁷ 川原有加 『『旅の仲間』に見る色彩表現の機能と効果：人物描写の場合』、『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』、10号、2009年、180頁

⁵⁸ 石田かおり 「「美白」意識の解釈学的現象学」、『駒沢女子大学研究紀要』、20号、2003年、4頁

⁵⁹ 西欧での肌色は、白と有色人を警戒にする権力の問題で扱われている(Hunter, 2005)。同時に「Black is Beautiful」などの運動は、白い肌だけを追求、肯定することを、人種主義的なものと認識されることに貢献した。マイケル・ジャクソン(Michael Jackson)、サミー・ソーサ(Sammy Sosa)、ビヨンセ(Beyonce)など、多くの黒人セレブたちの肌色が議論の対象となるのは、それだけ肌色が権力とアイデンティティの問題と密接であるからだろう。また、Jha(2016)はインドでは明るい色の肌が美の規範とされており、暗い色の肌を持つ女性は、結婚や就職の問題で差別される現実を指摘し、肌色が「構造的な不平等」を形成すると主張する。

Hunter, 2002, op. cit., pp.175-193.

Jha, M. R., *Global Beauty Industry: Colorism, Racism, and the National Body*, NY: Routledge, 2016.

⁶⁰ 馬形状の波は、アルウェンがローマ神話で海の神ネプチューン(Neptune=ギリシャ神ポセイドン)の馬と類似したシーンを演出して、アルウェンがネプチューンのような神的能力を持っていることを示している。



『旅の仲間』

〈図 4-10〉 白馬に乗ったアルウェンと黒馬に乗った黒の乗り手

[人間]

原作では、ローハン (Rohan) の地域の人間であるロヒアリム (Rohirrim) は、白い肌で金髪、背が高く、アングロ・サクソン人 (Anglo-Saxons) と似ている。映画の中で彼らは、ヴァイキング時代の戦闘用ヘルメットのような防具を着用している (図 4-11)。このため、Sophie Hinger (2014)⁶¹や Laura Crossley (2014)⁶²は、ピーター・ジャクソンがロヒアリムの文化にヴァイキングの特性を取り入れて、ロヒアリムのイメージを創り出したと主張する。



左: Uppsala University Museum



右: 『王の帰還』

〈図 4-11〉 ヴァイキング時代のヘルメットとロヒアリム(エオメル)

「中つ国」の人種はそれぞれ違う外見と能力などを持っていると描写されているが、前述したように、共通的なことは、善人は白人に近い様子をしているということである。

⁶¹ Hinger, Sophie. "Tolkien and the Viking Heritage". University of Vienna, Master's Thesis. 2014.

⁶² Crossley, Laura. Multicultural Middle-earth: Constructing "Home" and the Post-colonial Imaginary in Peter Jackson's The Lord of the Rings, Film International, June. 30, 2014. (<http://filmint.nu/multicultural-middle-earth-constructing-home-and-the-post-colonial-imaginary-in-peter-jacksons-the-lord-of-the-rings/>, 2021年1月23日閲覧)

[ハラドリム]

ハラドリムは「中つ国」における悪人として描写される。原作では、ゴンドールの南部に位置するハラド (Harad) に住む彼らは、黒い目や黒く長い編髪をした色の浅黒い男たち (swarthy men) で、「残虐にして身の丈すぐれたハラドリムたち」と呼ばれていると描写されている。このため、ハラドリムは北アフリカの人々の典型的な特徴を持っていると言える。

ハラドリムが、映画に登場するのは『二つの塔』である。ハラドリムは、原作では北アフリカの人々と思わせるが、映画の中では、黒と赤のターバンを巻いたパキスタンとアフガニスタンで活動するタリバン (Taliban) と類似した姿で登場する (図 4-12)。



左：『二つの塔』 右：<https://armamentresearch.com/night-vision-devices-used-by-taliban-forces/>

〈図 4-12〉 ハラドリムの歩兵とアフガニスタンのタリバン

このようなハラドリムの姿は、観客たちに非白人に対する恐怖心をさらに増加させる。『二つの塔』は 9・11 が発生してから 1 年後の、2002 年 12 月に公開された。このときは、アメリカがアフガニスタンとイラクで戦争をしていた時期で、イスラム恐怖症 (Islamophobia) が蔓延した。映画のタイトルである『二つの塔』は、世界貿易センターのツインタワー (the World Trade Center's Twin Towers) を連想させ、観客が持つ、非白人に対する恐怖感を増大させるのだろう。

ハラドリムはペレンノール野の戦いでも、巨大な象のような獣「オリファント (Oliphanten)」に乗って、ゴンドールとローハン騎馬隊を大いに苦しめる。これも、非白人であるアフリカやインドの戦象部隊を連想させる (図 4-13)。



左：『王の帰還』 右：インド陸軍(Official Indian Army Web Portal)

〈図 4-13〉 ハラドリムのオリファントとカルタゴ軍の戦象

[東夷]

東夷 (Easterlings) も「中つ国」における悪人として描写される。東夷は東方からやって来た人々を呼ぶ言葉で、古くからモルゴス⁶³やサウロンの影響下にあり、エルダール⁶⁴やその友人である人間たちと対立している。

『指輪物語』に描かれた東夷の姿は、身長が低く、肌色は褐色で、目と髪は、黒い東洋人に近い。東夷が東洋人とみなされるようになったのは本拠地「リューン (Rhûn)」と関係がある。リューンとは「東」の意で、おおむね「東夷」の出身地である東方の地を指すが、地域名に入る「～フン (hun)」からも分かるように、ローマ時代にヨーロッパを侵攻したフン族との関連性が非常に大きいことを表している。

彼らは映画の中で、戦盾で武装し、金色の鎧と赤い衣をつけた重装歩兵として登場する。東夷は、フロドがモルドール北部に存在する「モルドールの黒門 (モランノン)」を突破しようとする場面や、ミナス・ティリス (Minas Tirith)⁶⁵の攻防戦でアングマール魔王⁶⁶とグロンド (Grond)⁶⁷によって大門が破壊された際、オークと共に城内へなだれ込む場面に登場する。

⁶³ 『シルマリルの物語』の登場人物。エル・イルーヴァタールによって作られたヴァラールの一人で、諸悪の根源である。

⁶⁴ ヴァラールの招致に応じて、クイヴィエーネンから西方のアマンへの移住したエルフ。

⁶⁵ ゴンドールの首都であり、「守護の塔」を意味する。

⁶⁶ モルドールの作り出した不死の魔物で、9人の指輪の幽鬼の首領である。

⁶⁷ 『シルマリルの物語』に登場する暗黒世界の鉄槌、または『指輪物語』に登場する巨大な破城槌。



『王の帰還』

〈図 4-14〉 東夷

[オーク]

次に悪の勢力を代表するオークについて見てみる。オークは、古記英語による作者未詳の英雄叙事詩、『ベアオウルフ』に登場する「オーク＝ナス(Orc-néas)」から取ったものであり、オーク＝ナスは、『ベアオウルフ』では、体に宿る邪悪な魂のようなものとして描かれる。ところで、オークを「人種」と見るか、またはこの世のものではない悪、たとえば「悪魔」と見るかは、「中つ国」の人種問題を論じる場合、重要な前提条件となる。オークを「人種」として見る場合は、白人たちが連合して非白人への恐れや憎悪を正当化し、戦うことになり、人種差別の問題となる。しかし、オークを単に「悪魔」として見ると、人間やエルフ、ドワーフが力を合わせて悪と戦うことになる。この問題を解決するための糸口として、オークの誕生過程を探ってみる。

オークの誕生過程は『シルマリルの物語』に詳細に書かれている。オークは、エルフ族がモルゴスによって捕らえられ、拷問や日の当たらない牢に閉じ込められるなどして変質してしまった姿であると言われている。したがって、ここではオークをエルフが墮落して変質した人種と見て、原作と映画の中でのオークを分析する。

トールキンは、オークを最も美しくないモンゴル型の劣化した型と書いていて、東洋人に対する人種的偏見をある程度持っていたと推測される。

このようなトールキンのオークに対するイメージは、映画『ロード・オブ・ザ・リング』の中で、より一層怪物になる。映画の中のオークは、鋭い歯と変形された顔をして、暗い鉄製の鎧を着て、不潔で残酷に見える。トールキンは『シルマリルの物語』や『指輪物語』でオークの肌色が黒いとは描いてないが、映画は黒い怪物のような姿で登場して、人種差別的なキャラクターになっていると批判されている。もちろん、トールキンは『シルマリルの物語』で、オークの黒い軍(The Black Army of Orcs)という表現を使用する。しかし、トールキンによると、それは冥王サウロン(The Dark Lord Sauron)のように「Black」は「黒」ではなく「暗」の意味であり、冥王サウロン

を支持する邪悪な軍隊のことである。つまり、これはオークが「中つ国」に闇を持って来るので用いられた比喩的な表現である。しかし、監督のピーター・ジャクソンは、黒いモンスターにしている。

オークの姿だけではなく、ヘルム峡谷 (Helms Deep) での戦闘シーンの描き方も人種差別的である。ピーター・ジャクソンは、『ロード・オブ・ザ・リング』の『スペシャル・エクステンデッド・エディション』で、ヘルム峡谷の壁を這う数多くのオークの姿は、サイ・エンドフィールド (Cy Endfield) 監督のイギリス映画『ズール戦争 (原題: Zulu)』からインスピレーションを得たと述べている⁶⁸。1964年制作の『ズール戦争』は大英帝国と南アフリカのズールー王国との間で戦われたズールー戦争中の『ロルクズ・ドリフト (Rorke's Drift) の戦い』を描いた作品である。この映画は、帝国主義の侵略を示している作品である。19世紀に、アフリカに進出しようとした帝国主義に対抗したズールー王国の戦士たちより、イギリス軍を英雄的に描いている。

オークは、複数の部族があり、代表的なオークは山岳のオーク、モルドールオーク (Mordor Orcs)、ウルク＝ハイ (Uruk-hai) などである。この中で、ウルク＝ハイはサルマンによって変形されたオークで、他のオークは光に弱い、彼らは光を嫌わないオークである。そして、映画『ロード・オブ・ザ・リング』では、サルマンの妖術によってオークと人間を掛け合わせて造り出した種族と説明される。

映画の一作目『旅の仲間』では、ウルク＝ハイの首領格の「ラーツ (Lurtz)」が登場する。このラーツ役にジャクソンはマオリ族出身の俳優ローレンス・マコーレ (Lawrence Makoare) をキャスティングした (図 4-15 左)。マオリの戦士たちとラーツのイメージが似ていたからだという。これはウルク＝ハイを好戦的で野蛮な姿として描いたものではなく、マオリ族のイメージから野蛮な役割にキャスティングしたもので人種差別になる。

⁶⁸ 『二つの塔』スペシャル・エクステンデッド・エディション(DVD、ジャクソン監督のコメント)、ポニーキャニオン



左) 『旅の仲間』

右) jacket2(<https://jacket2.org/>)

〈図 4-15〉 ウルク=ハイとマオリ族

また、『ロード・オブ・ザ・リング』三部作の一作目『旅の仲間』では、黒い肌色のオークのみ登場したが、二作目『二つの塔』では、赤色のオークも登場し、三作目『王の帰還』では、白色または青色のオークも出てくる(図 4-16)。赤色や白色または青色のオークの存在は、オークは黒い肌色という一般的な意識を攪乱する。



左: 『旅の仲間』

中央、右: 『王の帰還』

〈図 4-16〉 様々な肌色のオーク

現実の世界において、白人のように白い肌を持った黒人も存在する。黒人たちの中には、白人として振る舞い、白人としての利益を享受する生き方を選択する者もいる。この行為は「パッシング (Passing)」と呼ばれ、白い肌の黒人にとっては生き延びるためのひとつの手段でもあった。しかし、映画『旅の仲間』や『王の帰還』に登場する赤色や白色または青色のオークはどのような利益も享受していない。したがって、黒い肌色のオークであれ、赤色や白色または青色のオークであれ、白人至上主義を擁護することになる。

3. 人種間の友情と愛

『ロード・オブ・ザ・リング』において、「ロード (Lord)」とは、指輪に対する支配力、他人を支配し従わせる力を持つ支配者、または主人の意味を持つ。すなわち、「一つの指輪 (One Ring)」は、「指輪の中の指輪 (the Ring of Rings)」とも呼ばれる指輪として、エルフに与えられた3つ、ドワーフの7つ、そして人間に与えられた9つの力ある指輪の全てを支配する「ロード」としての指輪である。この「一つの指輪」は絶対悪の力を象徴し、実際に世界を滅亡させるほどの強大な力を持った指輪である。そのため、誰もが「指輪の支配者」になるとすぐに「召し使い (Servant)」に転落するという重要なメッセージが含まれている。したがって、この「一つの指輪」は捨てられ、破棄されるべき悪である。

この「一つの指輪」を捨てに行くための冒険の物語が『指輪物語』である。Joseph Campbell (1972)⁶⁹が定義した人類普遍の神話構造では、主人公が旅を通じて宝物や力を得て共同体に仕えるが、トールキンの作ったこの物語はほぼ唯一の絶対的な力である宝物を破壊するために遠征をする。厳密に言えば指輪を投げ捨てるということは、指輪の破壊ではなく、人間の限りない欲望、特に権力への欲望を捨てることである。

この指輪を捨てる使命を帯びたのは、「旅の仲間」である。「旅の仲間」は、ホビットのフロドを筆頭にバギンズ家の庭師サム、フロドの親戚のピピンとメリー、魔法使いのガンダルフ、闇の森のエルフ・レゴラス、ドワーフのギムリ、人間からはボロミアとアラゴルンを加えた9人で構成される。彼らが仲間になったのは、悪によって命が脅かされる危険性があると認識したからである。

映画『ロード・オブ・ザ・リング』の主演はフロドとアラゴルンである。フロドは「一つの指輪」の破壊という最も重要な任務を引き受けた主要人物であるが、伝統的な英雄ではない。「指輪所持者 (ring bearer)」という重大な役割を負う前のフロドは冒険を嫌い、ただ穏やかな田舎暮らしに満足している典型的なホビットであった。

これに比べて、アラゴルンの英雄的な面は、伝統的な叙事詩に登場する英雄のモチーフをそのまま受け継ぐ。彼の半エルフ (half-elven) の血統は英雄的人物の起源を特徴付ける不滅性や超自然性を示し、 Gondor 王国の正当な後継者であると明かされる過程も、典型的なヒーローモチーフである。

Verlyn Flieger (2004)⁷⁰は、アラゴルンをアーサー王 (King Arthur)、ガラハッド

⁶⁹ Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*, Bollingen, 1972.

⁷⁰ Flieger, Verlyn. "Frodo and Aragorn: The Concept of the Hero". *Understanding The Lord of the Rings: The Best of Tolkien Criticism*. Boston: Houghton Mifflin, 2004. pp.122-145.

(Galahad)、シグムンド (Sigmund)、シガード (Sigurd) などのケルトや北欧の伝統的な英雄たちと比較しながら、彼は王国とアルウェン (Arwen) 姫を勝ち取ったため、伝統的な意味での真の英雄になったという。

「旅の仲間」は遠征を通じて共通の敵に対抗し、人種間の和解と友情を示している。その代表的な例が、レゴラスとギムリの友情である。彼らは、エルフ族とドワーフ族の因縁から、旅の当初は不仲だったが、旅の間に長い時間をかけて信頼を育み、人種間の友情を増進させる役割をする。人種間の友情に関する研究によると、人種間の友情に障壁となる要因は、人種に関する否定的固定観念⁷¹と相手に対する不信⁷²などがある。これらの要因は、人種間の友情関係の発展を妨げるだけでなく、人種差別までつながることがある。レゴラスとギムリの友情は異人種間の友情の妨げになるお互いに対する不信を旅の間に克服して、友情を積んだものである。

一つ注目すべき設定は、善のために集まった「旅の仲間」が、各自の内部には悪の欲望が存在しているということである。つまり、『指輪物語』において善と悪の対立は、外部にのみ存在するものではない。むしろ内部の葛藤が常により大きな危機を孕んでいる。より強い力、より強力な武器のための戦いは、イシルドゥアのように、大きな脅威を呼び起こすだけである。絶対的な悪は、絶対的な恐怖と背中合わせである。

絶対的な力の象徴である「一つの指輪」はゴラムだけでなく、「旅の仲間」であった Gondor の王子ボロミアも指輪の魔力に心を奪われ、フロドに襲いかかる。そして、彼の父である摂政デネソールを Gondor の危機を引き起こした人物にしてしまい、ローハンの王セオデンも悪の勢力の強さに不安を感じていた第 2 部の重要な人物である。さらにフロドさえ、指輪の強さとゴラムの言葉に惑わされて旅を一緒にしていたサムを突き放す。

指輪の破壊という叙事詩としての物語の最高の目標を優先的に念頭におくと、『ロード・オブ・ザ・リング』の真の主人公はゴラムである。それは偶然であろうが必然であろうが「運命の隙間 (Crack of Doom)」に「一つの指輪」を投げる決定的な行動をする人物が、フロドではなくゴラムだからである。

つまり、ゴラムが指輪と一緒に「運命の隙間」に墜落することにより、アイロニカルに、指輪の破壊という任務を果たすことになる。「中つ国」をサウロンから守ったのは、アラゴンもフロドでもないモンスターのゴラムである。しかし、ゴラムはモンス

⁷¹ Leonard, Rebecca, & Locke, Don C. "Communication stereotypes: Is interracial communication possible?", *Journal of Black Studies*, 23(3), 1993, pp.332-343.

⁷² Kohatsu, E. L., Dulay, M., Lam, C., Concepcion, W., Perez, P., Lopez, C., & Euler, J., "Using racial identity theory to explore racial mistrust and interracial contact among Asian americans.", *Journal of Counseling & Development*, 78(3), 2000, pp.334-342.

ターのような敵対的な外部の「悪」ではなく、内在的な悪、すなわち主体の中にある他者としての悪を象徴する。このため、Jane Chance (2001) は、ゴラムはフロドの内面から成長し、実在する闇であるという⁷³。つまり、フロドの内在的な悪が指輪と一緒に破壊されたのである。

このように、「旅の仲間」は善と悪の葛藤を経験するが、最終的に指輪を破壊することに成功する。トールキンとジャクソンは遠征を通じて人種間の友情が、お互いの偏見を克服することができ、異人種間の協力が多くの価値を生み出すという事実を見せようとしたものである。このことはトールキンがエルフと人間、ドワーフとホビットなどの多くの人種を創造した理由であろう。

一方、「旅の仲間」と異人種間の融合のもう一つの例は、エルフのアルウェンと人間のアラゴルンの結婚である。『指輪物語』にはエルフのアルウェンと人間のアラゴルン、人間のエオウィンとファラミア、ホビットのサムとロージーなどのカップルが登場する。エオウィンとファラミアは、人間同士であり、サムとロージーはホビット間の結婚なので、人種問題はないが、アルウェンとアラゴルンには結婚異類婚姻譚という問題がある。異人種間の結婚を通じ、『指輪物語』の作品の中に人種間の葛藤や差別の問題を眺めることができる。これは、現実の世界と対比した『指輪物語』の中に隠されたテーマとみることができる。

エルフと人間の結婚はアルウェンとアラゴルンが初めてではない。『シルマリルの物語』でのベレン (Beren) とルーシエン (Luthien) の場合も、エルフと人間の結婚であった⁷⁴。しかし、どちらの場合も、エルフの女性の父親に人間との結婚を猛反対される。ルーシエンとアルウェンは不滅のエルフである。一方、ベレンとアラゴルンはいつか死ぬ運命の人間なので、父が彼らの愛を反対したのである。ルーシエンとアルウェンは、父が監禁や嘘を辞さないほど反対したにもかかわらず、最終的に許可を得て愛を勝ち取る。そして、アラゴルンと共に定命の生涯を送る選択をする。アラゴルンとアルウェンの結婚は、自分たちの領地の王と王妃ではなく、「中つ国」を守る人間とエルフの連合を象徴する。エルロンドは、指輪戦争が終わり、娘を「中つ国」に残したままガラドリエルとバリノールに向かう。

トールキンの友人である C. S. Lewis は、『四つの愛 (The Four Loves)』⁷⁵を介して

⁷³ Chance, Jane. *Tolkien's Art: A Mythology for England*, Revised Edition, Kentucky UP, 2001, p.145.

⁷⁴ ルーシエンは、イルーヴァタール(中つ国の唯一神)の子らのうち、最も美しいと言われるエルフの乙女である。ルシエンも、『指輪物語』のアルウェン同様エルフとしての不死身の生を捨て、人間であるベレンと結婚した。

⁷⁵ ルイス, C.S. 『四つの愛』、佐柳文男訳、新教出版社、2011年(Lewis, C.S. *The Four Loves*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc.: New York, 1960)

愛を愛着 (Affection)、友情 (Friendship)、エロース的愛 (Eros)、恵愛 (Charity) に分けて説明する。親と子の間の愛をベースにした愛を「愛着」、同じ方向を向いて、同じ関心を持っているので親密な関係になることを「友情」、一般的に「恋に落ちる」と表現されている恋人たち間の愛は「エロース的愛」、父なる神が子なる人間を愛する神の無限なる無償の愛を「恵愛」に分ける。

トールキンとジャクソンはルイスが定義したこのような愛を、登場キャラクターと事件を通して示している。人間としてこの世を生きていく娘アルウェンを眺めるエルロンドの「愛着」、レゴラスとギムリなど旅の仲間の「友情」、アルウェンとアラゴルン、エオウィンとファラミアなどの「エロース的愛」、「中つ国」の未来と希望を説くガンダルフの「恵愛」などである。このように、『ロード・オブ・ザ・リング』において愛は Marion Zimmer Bradley (1968) が述べたように支配的な感情 (dominant emotion) であったが⁷⁶、これらの愛は危険や損失がないのではなく、すべての犠牲の価値があることを示す⁷⁷。

『ロード・オブ・ザ・リング』の三部作は、ニュージーランドの自然や最先端の特殊効果で完成したファンタジーの代表作として挙げられる。特に、映画ではヘルム峡谷の防衛戦やペレンノール野の合戦のシーンは観客を大いに沸かせた。しかし、トールキンの伝えたかったメッセージは、戦争の姿ではなく、人種間の和解や友情であろう。

ジャクソンは、「旅路」より「戦争」に比重を置いて話を展開したが、映画を通じて「中つ国」を救い出すのはエルフでも王でもなく、小さくて軟弱なホビットだったという事実は確実に示した。そして王になったアラゴルンが自分の栄光を小さなホビットたちに譲り渡し揮する姿を通じて、人種や階級に対するジャクソン自身の認識も伝達したと考えられる。

第四節 終わりに

人種は、一般に、肌色、容貌、骨格など身体の形態的特徴を同じくする人の自然的な集団をいう。しかし、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』においての人種の定義は、一般的な人種の定義と大きく異なる。

⁷⁶ Bradley, Marion Zimmer. "Men, Halfings and Hero Worship.", *Tolkien and the Critics*. Eds. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbaro, Indiana: University of Notre Dame Press, 1968.

⁷⁷ Porter, Lynnette R. *Unsung Heroes of the Lord of the Rings: From the Page to the Screen*, Praeger Publishers, 2005.

『ハリー・ポッター』の魔法世界において、人種分類の基準は、現実世界のような肌色ではなく、純血、半純血、マグルなどのような血統の違いである。これに対して、『ロード・オブ・ザ・リング』では、エルフ、人間、ホビット、ドワーフ、オークを人種としている。

以下では、本研究を通じて明らかにされた人種表象の特性を①原作と映画における人種表象の比較、②二つの映画における人種表象の類似点、③二つの映画における人種表象の相違点に分けて述べる。

まず、二つの映画における人種表象の特性をそれぞれの原作と比較した結果は次の通りである。映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の中の人種表象は、ほぼ原作どおりに描かれている。しかし、原作と異なるところもある。例えば、映画『ハリー・ポッター』における非白人のアイデンティティは、原作と異なる。原作では、チョウ・チャンとパチル姉妹の衣装は、セクシュアリティを強調して人種のアイデンティティを把握することができない。しかし、映画『炎のゴブレット』で彼女たちは、人種的・文化的アイデンティティを明確に知ることができるドレスを着てダンスパーティーに参加する。これは衣装を通して、彼女たちが白人と異なる人種と文化的背景を持つことを明確に示される。

映画『ロード・オブ・ザ・リング』においても、原作と異なる部分がある。例えば、一作目の映画『旅の仲間』では、原作には登場しない映画オリジナルのウルク=ハイのラーツ (Lurtz) が登場し、二作目『二つの塔』と三作目『王の帰還』では、黒い肌色のオークだけではなく、赤色や白色または青色のオークも登場する。しかし、そうであっても肌色に関して表象される人種差別を何ら軽減するものではない。

次は、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に共通する人種表象である。

第一、原作『ハリー・ポッター』と『指輪物語』における人種区分はそれぞれ異なるが、一般に、映画に登場するキャラクターの人種区分は肌色が基準となる。肌色を人種区分の基準にした場合、人種的な不均衡が目立つ。映画『ハリー・ポッター』に、10分以上登場する主要キャラクターは、〈表 4-2〉にあるように白人しかいない。これは『ロード・オブ・ザ・リング』でも同様である。『ロード・オブ・ザ・リング』に、10分以上登場する主要キャラクターは16名で、すべて白人である(表 4-3)。

第二に、映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』では、表面的に

は肌色による差別はない。しかし、二つの映画では、現実世界の差別とは異なる型の人種差別が行われている。

映画『ハリー・ポッター』での人種差別は大きく二つに分けて考えられる。一つ目は、純血主義魔法使いによるマグルやマグル生まれの魔法使いに対する差別であり、二つ目は、純血主義魔法使いによるヒトたる存在に対する差別である。

『ロード・オブ・ザ・リング』でも、「旅の仲間」はホビット、エルフ、人間、ドワーフなど異人種で構成し、多文化主義的な姿を見せてくれる。しかし、『ロード・オブ・ザ・リング』での多文化主義的な姿は、「中つ国」の白人だけのものであって、非白人を含む完全なものではない。

第三に、原作『ハリー・ポッター』と『指輪物語』では、人種に対する作家の二面性を見ることができる。

ローリングは、ハリーが半純血の魔法使いであるにもかかわらず、父親が純血であることを強調し、彼が魔法世界において、「選ばれし者」であることを浮き彫りにしている。これは選ばれし者だけが社会を率いるリーダーになれるということであり、ローリングの血統に対する二面性を表す。

トールキンは人種主義に対して否定的な見解を示している。彼は晩年に彼の故郷である南アフリカ共和国で行った講演で、当時猛威を振るった南アフリカの人種差別主義政策「アパルトヘイト (Apartheid)」を嫌悪し、白人至上主義者のナチスにも非常に反対したと知られている⁷⁸。しかし、このようなトールキンの人種観とは異なり、「中つ国」で見ることができる人種イデオロギーには差別意識が存在していることがわかる。前述したように、たとえトールキンが人種差別主義を批判したとしても『シルマリルの物語』と『指輪物語』では、西洋以外の地域、すなわち、アフリカをはじめとする東洋と中南米などを「他者 (the other)」に規定する二分法の考え方が含まれている。

第四に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での戦争は人種間の葛藤と戦いの意味を含んでいるにもかかわらず、善と悪の戦いのみが強調されている。つまり、原作『ハリー・ポッター』と『指輪物語』では、人種問題が内包された善悪の対決が強調されるのに対し、映画では、各キャラクターの詳細な説明と人種問題についての説明が縮小されたまま、善と悪の戦いが強調されている。

⁷⁸ Tolkien, J.R.R., *The Monsters and Critics and Other Essays*. Ed. Christopher Tolkien, London: Harper Collins Publishers, 1997.

特に、『ハリー・ポッター』原作では、魔法戦争 (Wizarding Wars) がマグルやマグル出身魔法使い、半純血に対する純血主義者の人種差別問題を含んでいる戦争であることを明確にしている。しかし、映画では、魔法界の善と悪の勢力の対決だけが強調されている。したがって、原作を読んでいない観客は、善と悪の中に隠されている人種問題が認識できないかもしれない。

次に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種表象の相違点は以下のとおりである。

第一に、『ハリー・ポッター』は、善人と悪人のほとんどが白人であるのに対し、『ロード・オブ・ザ・リング』での善人は、ほとんどが白人であり、悪人はだいたい黒人を含めた非白人である。

第二に、『ハリー・ポッター』における魔法戦争は、前述した通り、純血主義魔法使いが魔法界を支配し、半純血や非魔法族生まれの魔法使いを殺害する、人種差別をめぐる戦いである。しかし、『ロード・オブ・ザ・リング』での戦争は、外部の敵と戦う『ハリー・ポッター』とは異なり、内部の敵とも戦わなければならない。つまり、『ロード・オブ・ザ・リング』においての戦争は、「一つの指輪」を所有しようとする悪人(外部の敵)と指輪を捨ててに行く指輪の仲間(善人)との戦いであり、善人は、指輪の力を欲する欲望(内部の敵)との戦いでもある。

第四章 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における階級表象

第一節 初めに

階級は、一般的に社会内部での仕事・身分・財産等に応じて区別される人々の集団を示すが、多くの研究者によっても非常に広範囲に定義されており、これを明確に規定することは容易ではない。

階級はどのような基準で区分されるのか。カール・マルクス(Karl Marx)は階級を区分するための最も重要な基準として生産手段の所有関係を挙げており¹、Max Weber (1946) は、人々が所有する財貨、地位、職業を挙げている。Weber (1946) は、財力があるとき、それを階級と言い、社会的な威勢があれば、地位 (status)、政治的な力があれば党派 (party) と言う²。しかし、Paul Fussell(1983) は、その3つ、すべてが階級に該当すると主張する³。原純助と盛田和夫(1999)によれば、日本では社会科学分野・特に社会学においてマルクス主義的な立場の人々が階級という語を用い、それ以外が階層の語を用いる傾向がある⁴。

以下では、こうしたことを踏まえて、階級と階層を互換的な概念として使用する。それでは、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』で階級構造はどのように構成され、いくつの階級が存在しているのかみしてみる。

まず、『ハリー・ポッター』での階級を決定する要因と構造についてみることにする。『ハリー・ポッター』で階級を区分するための最も重要な要素は血統である。つまり、純血か、半純血か、または人間 (マグル) かに応じて階級差が見られる。血統による階級は高位から純血、半純血、マグルなどの順に区分される(図 5-1)。

ここでの純血は魔法使いの両親から生まれた魔法使いを指し、半純血は純血の魔法族を片親に持つ魔法使いを意味する。そしてマグルは魔法使いや魔女ではない「普通の人間」を指す。ヴォルデモートはマグルのことを「平民(commoners)」と呼んでいる。

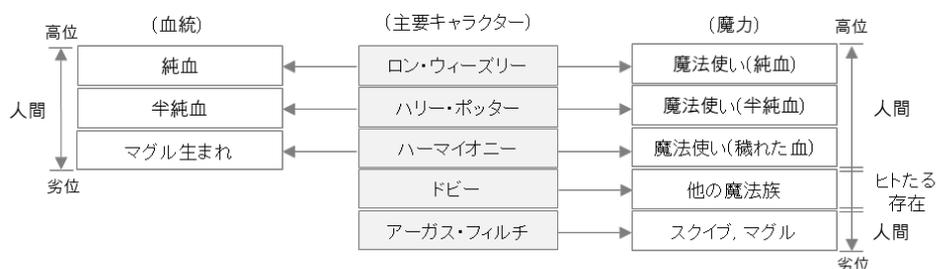
¹ マルクスによると、一つの階級は、その人が社会的生産体制全体で、どのような地位にあるのかに応じて決定され、何よりも、彼らの生産条件と結ぶ関係によって、そして他の階級と結ぶ関係に基づいて決定される。

² Weber, Max. "Class, Status, Party", *Max Weber: Essays in Sociology*, Oxford University Press, Trans. H. H. Gerth & C. Wright Mills, 1946, pp.180-195. Ed. Grusky D, *Social Stratification*, Westview, 1994, pp.113-121.

³ Fussell, Paul. *Class: A guide through the American status systems*, New York, NC: Summit Books, 1983.

⁴ 原純助・盛田和夫『社会階層』、東京大学出版会、1999年、3頁

Brownell et al. (2017)によると、純血はブルジョアジーであり、マグルはプロレタリアートに属する⁵。



〈図 5-1〉 『ハリー・ポッター』における階級構造と主要キャラクター

『ハリー・ポッター』では、以上のような血統だけが階級を決定するわけではない。魔法世界において魔力は血統と一緒に階級を決定する最も重要な要素となる。つまり、血統が同じである場合には、魔力を持っているか、ないかに応じて、階級の違いが見える⁶。例えば、魔法族であるにもかかわらず、魔力を持たぬ者は、「スクウィブ」(Squib)と呼ばれ、マグル生まれの魔法使い(マグルを両親に持つ魔法使い)より上位階級になる⁷。

伊達桃子(2009)も魔力と血統を中心に、『ハリー・ポッター』の中での社会的ヒエラルキーを区分している。伊達によると、社会的ヒエラルキーは、実在の人種や民族ではなく、架空の種族間に存在することで、魔力を持っている高位の魔法使い(純血)から魔力をもたない劣位の魔法使いマグルとスクイブなどに区分される⁸。

血統を基準に考えてみた場合、ハリーと彼の二人の友人、ロンとハーマイオニーは異なる血統である。ロンは魔法使いの父と魔女の母から生まれた純血であり、ハリーは純血の魔法使いの父とマグル生まれの魔女の母の間に生まれた半純血である。しかし、彼らの仲間であるハーマイオニーは両親がともに魔法使いの血筋でないマグル生まれである。

魔法界では出自・血統への差別が存在しており、純血の魔法族を中心に、マグル生まれの魔法使いや魔女を差別する傾向が少なからず見られる。ハーマイオニーも、ド

⁵ Brownell, A., Fernandez, C., Jeffries, M & MacLeod, L., "A Critical Marxist Analysis of Harry Potter.", *The mirror of Erised: seeing a better world through Harry Potter and critical theory*, University of New Brunswick, 2017, p.48.

⁶ マグル社会では、魔法世界のことを知らないで、マグルとマグル生まれの魔法使いの間に階級が存在しない。

⁷ スクイブ(squib)は、一族の恥として忌み嫌われる。場合によってはブラック家のように、一族の家系図から抹消されてしまう。

⁸ 伊達桃子 「ファンタジーの新しい波—『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか」、『社会科学雑誌』、創刊号、2009年、165頁

ラコから軽蔑的・人種差別的に「穢れた血」と呼ばれる。こういうハーマイオニーの例からわかるように魔法世界の階級は、血統が魔力より重要な基準となる。

『ハリー・ポッター』の中での社会的ヒエラルキーは血統と魔力以外にも、経済的条件によっても区分される。特に、経済的条件は階級内の階層・分派の原因となる。例えば、ウィーズリー家は純血でありながら魔法を使うが、経済的に裕福ではない。

物質的、経済的な条件に基づいて階層を区別する場合には、上位層は純血のマルフォイ家である。マルフォイ家はマグルの貨幣や資産に手を出して成功を収めた魔法界でも屈指の資産家である。Brownell et al. (2017) などによると、『ハリー・ポッター』の中流階級は半純血の魔法使いに代表されるが、マグルの世界のダーズリー家も典型的な中流階級に描写される⁹。

結局、『ハリー・ポッター』における階級構造は、基本的に血統、魔力、経済力の順であるが、血統が同じである場合には、魔力が基準になり、血統と魔力が同じ場合には、経済的条件が基準になる。

ところで、『ハリー・ポッター』での階級構造は人種と強く関連している。すなわち、人種の優先順位とほとんど一致する(図 5-2)。『ハリー・ポッター』での上層階級は、純血の魔法使いであるが、純血の中では経済的条件が最優先される。また、下層階級は人狼、ゴブリン、ハウスエルフなどのヒトたる存在である。

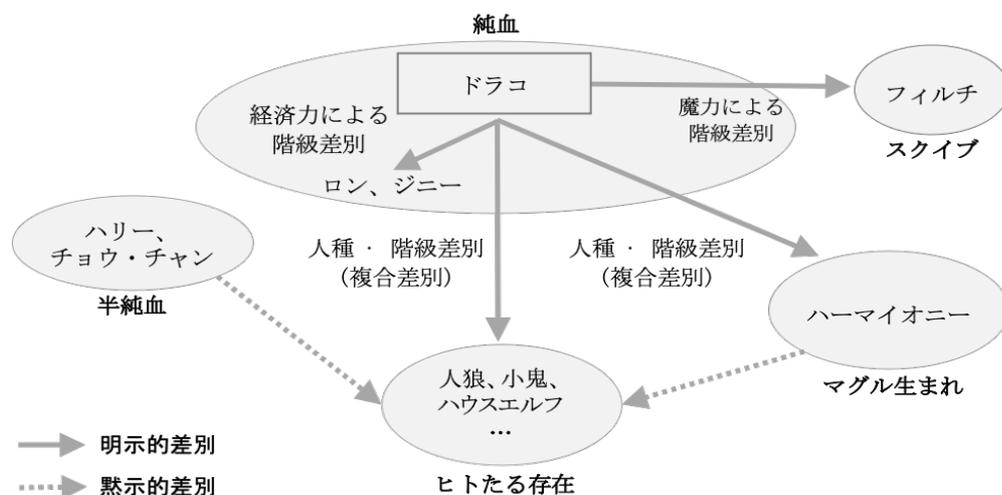
特に、ハウスエルフはヒトたる存在としての人種差別と、主人に仕える下層階級としての階級差別を一緒に受ける。すなわち、ハウスエルフは「複合差別」¹⁰を受けていることになる。上野千鶴子(1996)¹¹によれば、複合差別は、社会的弱者が経験する複数の差別が互いに絡み合い、複雑に入り組んでいる状態である。

⁹ Brownell, A., Fernandez, C., Jeffries, M & MacLeod, L., op. cit., p.48.

¹⁰ 神原(2015)は、一個人が特定または不特定の他者から複数の異なった属性によって複数種の差別を被る場合を、「重複差別」と定義している。

神原文子 「重複差別: 被差別部落の子づれシングル女性の場合」、『現代社会研究』、創刊号、2015年、74-91頁

¹¹ 上野千鶴子 「複合差別論」、『差別と共生の社会学』、井上俊編、岩波書店、1996年、203-232頁



〈図 5-2〉魔法世界における人種と階級の関係

次に『ロード・オブ・ザ・リング』についてみる。

『ロード・オブ・ザ・リング』での「中つ国」も人種間の階層が存在する。『ロード・オブ・ザ・リング』の研究者たちは、「中つ国」における人種間の階層構造を各種族の身体的、精神的な特性に基づいて種族の優劣の差を説明することもある。

Steve Higham (2012) は、エルフ、人間、オークなどの順で階級差を主張する¹²。このような階級構造は、同じ人種内でも存在する。例えば、エルフの場合、ハイ・エルフがウエンヤ語(Quenya)を使用し、灰色エルフがシンダール語(Sindarin)を使用することも階層化の事例とすることができる¹³。

これは、人間とドワーフの場合も同様である。人間の階級構造は王と領主が上位にあり、兵士が下位にある構造であり、ドワーフ族も基本的には王族と貴族、平民で構成されている。『ロード・オブ・ザ・リング』には、ギムリが単独で「旅の仲間」に含まれるが、映画『ホビット』では、それらの階級が明確に表示される。例えば、エレボール遠征へ向かったトーリン (Thorin II) とフィリ (Fili)などは王族、ボフル (Bofur) とビフル (Bifur)などは労働者階級の出身である。ホビット族が暮らしているホビット庄にも王の権威を代行する「セイン」がいて、ホビット庄の公務を務める「庄長」などの役職があり、坑夫(miners)、職人(artisans)小売商人(shopkeepers)、日雇労働者(day-laborers)、農夫などがいる¹⁴。

¹² Higham, Steve. "Ideology in The Lord of the Rings: a Marxist Analysis." Doctoral thesis, University of Sunderland, 2012.
¹³ エルフ語は、大きく分けて、クエンヤとシンダリンの二つの言語に大別される。クエンヤは、アマンに移住したエルフの言語で、シンダリンはアマンに渡らず、「中つ国」に定住したローエルフ(灰色エルフ)の言語にあたる。
¹⁴ Curry, Patrick. *Defending Middle-earth: Tolkien, Myth, and Modernity*, New York: St. Martins, 1997.

このような制度は中世ヨーロッパの身分制度と類似している。中世ヨーロッパの階層構造は、基本的に「王・諸侯」、「貴族・騎士」、「農奴(商人、職人、農民)」の3つの身分から構成されると考えられていた。この中で、騎士は一般に国王や有力な領主(諸侯)を主君として封土を与えられ、臣下として仕える。中世ヨーロッパと類似した「中つ国」の階級構造下では、王は王であり、臣下は臣下であり、戦士は戦士である。彼らにとって優先的に重要なのは血統や家系、地位である。これらの権力による階級構造は、人間の王国である Gondol と Rohan はもちろん Elf 族と Dwarf 族でもみることができる。また、オーク(Orc)社会にも様々な階級が存在する。モリアを含む霧山脈のオルクの「スナガ(Snaga)」は、オーク族の中で最も低い階級である。サuronが創造したウルクと Sarumanが作ったウルク=ハイ(Uruk-hai)は、上位層に属する。映画『旅の仲間』に登場する Lutz や、『二つの塔』の Uglúk が代表的なウルク=ハイである。以上のような階級の差に基づいて、次の節では、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での階級表象と差別について具体的に分析する。

第二節 『ハリー・ポッター』における階級表象

1. マグル社会と魔法社会

『ハリー・ポッター』に描かれる世界はマグル(魔法使い以外の人々)と魔法使いが混住する世界である。すなわち、ハリーが住む世界は同じ土地に住みながら、生活習慣も食べるものも違う2種類の人々が存在する世界である。したがって、『ハリー・ポッター』の、階級問題を明確にするためには、マグル世界と魔法世界を区分して考察しなければならない。

まず、マグル世界での階級問題について分析する。

『ハリー・ポッター』の原作と映画はイギリス・サリー州リトル・ウィンジング、プリベット通り四番地(4 Privet Drive)から始まる¹⁵。サリー州はロンドン郊外に実在する地名であるが、リトル・ウィンジング、プリベット通り4番地は実在しない架空の場所である。このプリベット通り4番地は、マグル世界における階級意識を語るうえで重要である。同じ町に住んでいても、その中のどの区域に家があるか、というこ

¹⁵ 映画『賢者の石』、00:20

とが階級差をはっきりと示すからだ。サリー州はロンドンへの通勤圏で、「豊かで中流の人の住む場所」と知られている。プライベート通り四番地は叔父・叔母の家、ダーズリー一家の家である(図 5-3)。



左：『賢者の石』



右：『不死鳥の騎士団』

〈図 5-3〉 プリベット通り四番地とダーズリー家

Philip M. Shafer (2016) も映画で、ダーズリー家が住んでいるプライベート通り四番地と彼らが着ている衣装などを通して、ダーズリー家が中産階級であると述べる¹⁶。ダーズリー家が中産階級という事実は、叔父のバーノンの職業を通して分かる。『ハリー・ポッター』で、バーノンは会社の重役で登場する。職業は階級の指標として人びとに最も重要視される場合がある。マグル世界において、中産階級の例はハーマイオニー・グレンジャーも同様である。もちろん、マグル世界においてグレンジャー家の社会的階級を示す家族の所得や富については具体的には明示されていない。しかし、彼女の両親の職業を通して推論できる。映画『謎のプリンス』でハーマイオニーは両親が2人とも歯科医師であると話す¹⁷。歯科医師はイギリス社会で中産階級以上、エリート層に分類される¹⁸。このように、『ハリー・ポッター』はマグル社会の中産階級の姿を再現しているが、上流層と下流層の生活を表現する場面は出てこない。

映画が始まってしばらく経ったあとに、社会はマグル世界と魔法世界に区分される¹⁹。ダイアゴン横丁は、マグル世界のロンドンに隠れている魔法世界である。ダイアゴン横丁は魔法使いや魔女が必要とする魔法道具が売られている横丁である。また、魔法世界の政府機関である魔法省もロンドンの地下に設置されている、という設定であ

¹⁶ Shafer, Philip M. “Transfiguration Maxima! : Harry Potter and the Complexities of Filmic Adaptation.”, Doctorial Dissertation, Middle Tennessee State University, 2016.

¹⁷ 映画『謎のプリンス』、56:57

¹⁸ Savage, M., Devine, F., Cunningham, N., Taylor, M., Li, Y., Hjellbrekke, J., Le Roux, B., Friedman, S., & Miles, A., “A New Model of Social Class? Findings from the BBC’s Great British Class Survey Experiment.”, *Sociology*, 47(2), p.234, 2013.

¹⁹ 映画『賢者の石』、18:35

る。地下ではあるが、魔法によって自在に景色・天候を変えられる窓がある。

魔法世界の階級構造は地下八階のアトリウム（エントランスホール）にある黄金塑像を通して明らかに表現されている。『不死鳥の騎士団』に出てくる塑像の姿を見ると、杖を持った魔法使いの像が一番大きく、その周囲には魔女、ケンタウルス、ハウスエルフ、ゴブリンが魔法使いの像を見上げている(図 5-4 左)。これは杖を持った魔法使い、特に純血の男性魔法使いが魔法世界の中心であることを示しており、魔法使いではない生物は杖を所持することもできず、杖を所持した魔法使いと魔女に憧れて生きていかねばならない、劣った存在であることを示している。

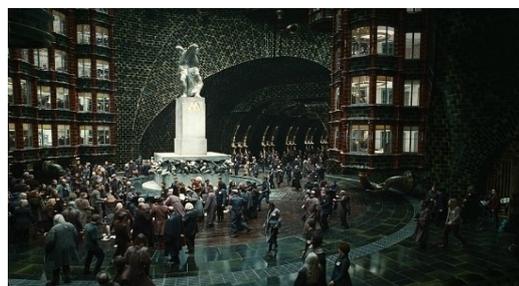
この塑像の姿はヴォルデモートが魔法省を占領した後、変化する(5-4 右)。占領以前とは異なり、占領後の塑像は、魔法使いがマグルの上に立って、ハウスエルフとゴブリンなどの魔法生物は含まれていない。これは彼らを完全に魔法世界の構成員として認めないということを示す。このように魔法省はヴォルデモートの占領下で、より軽蔑的・閉鎖的に変わったことを強調する。

(ヴォルデモートが占領する前)



左：『不死鳥の騎士団』

(ヴォルデモートが占領した後)



右：『死の秘宝 PART1』

〈図 5-4〉魔法省のエントランスホールの塑像

2. 魔法使い間の階級対立と差別

魔法世界にあつて、魔力は魔法族のステータス・シンボルであり、特権である²⁰。これは、本来魔法族の両親に生まれてきた者だけが魔力を持つことができることを意味する。しかし、魔法族であるにもかかわらず、魔力を持たぬ者は、スクイブと呼ばれ、一族の恥として忌み嫌われる。

²⁰ 坂田薫子 「ハリー・ポッターのイギリス(2):『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」、『日本女子大学英米文学研究』、50号、2015年、75頁

純粋血統の魔力を持った魔法使いもまた絶対的な階級の優位に立てるわけではない。つまり、富を持たないと純血の魔法族であっても魔法世界では、差別の対象とされる。これは、同じ血統でも、別の階級的区分が存在し、階級を区分する基準となるのは、資本、富の程度ということの意味する。

純血であると同時に、魔力と富の両方を持つ代表的な家は、マルフォイ家であり、魔法省の大臣さえむやみに近づくことができない絶対的な権力を握っている。このような理由から、『アズカバンの囚人』では、ドラコに傷を負わせたバックビーク²¹は死刑になる。また、マルフォイ家は、クイディッチ・ワールドカップで、魔法省の大臣ファッジから直接ファーストクラスのチケットを貰えるほど、ホグワーツ理事会や魔法省で特別な扱いを受けている。

以上のようなマルフォイ家に比べて、ウィーズリー家は同じ「純血」の魔法族でありながら、父アーサー・ウィーズリーの日々の役所勤めから得られる報酬で生計を立てている。すべてのウィーズリー兄弟たちは、中古店で学用品を購入して使わなければならない貧しい暮らしをしている。このようなウィーズリー家に対して、マルフォイ家の父ルシウスと息子ドラコは地位と富を誇示して、嘲笑する。マルフォイ家がウィーズリー家を差別の対象と見なすとき、マルフォイ家が重んじているものとは、特権階級としての、貴族を含む、上流階級の階級意識なのである。ある階級が自分の階級的特徴を表に出す方法は多様であるが、主に住宅や衣装や移動手段などを通して、自分の階級を表現する。このうち、住宅は上流階級の特徴が明確にあらわれる基準とすることができる。マルフォイ家の邸宅(Malfoy Manor)²²は、大きい門に入ると、まっすぐな長い道があって、庭園には噴水がある(図5-5-左)。家の内部には壮大なリビングルームがあって、クリスタルシャンデリアが天井に釣り下がっていて、暗くて紫色の壁に華やかに飾られている(図5-5-中央)。このリビングルームは、ヴォルデモートと死喰い人の本拠地として使われる。そして地下には分霊箱を探していたハリーたちが死喰い人に捕まって閉じ込められた地下牢がある(図5-5-右)。マルフォイの邸宅は富を象徴するメタファーであるが、陰湿な暗さが存在する空間でもある。この邸宅は、死喰い人の集まりなどにのみ使用されて、日常生活が欠けている空間として表現されている。

²¹ ハグリッドが飼っていたヒポクリーブ

²² マルフォイ家の豪邸の外観のモデルとなったのはハードウィックホール(Hardwick Hall)である。この邸宅は当時、エリザベス1世に次いで英国で2番目に強い権力と資産を持っている女性として知られた「ハードウィックのベス」のために1590年から97年にかけて建てられた邸宅である



左) 外観 中央) 内部・リビングルーム 右) 地下牢 (『死の秘宝 PART 1』)

〈図 5-5〉 マルフォイ家の邸宅 (Malfoy Manor)

ウィーズリー家の住宅の隠れ穴 (Burrow) は、古い家で、いつ崩れてもおかしくない様子である (図 5-6)。リビングルームとキッチンは大家族であるウィーズリー家の規模に比べて狭くて、家具は古くて部屋は散らかっている。この空間で母モリーは家族のために料理をして、時には遊びに来たハリーと一緒に食事をする。作家と監督はたとえ家が狭くて不便な空間であっても、家族の交わりや友人の間の友愛を通じて、ウィーズリー家の日常を肯定的に描いている。



左) 外観 中央) リビングルーム 右) キッチン (『秘密の部屋』)

〈図 5-6〉 ウィーズリー家の隠れ穴 (Burrow)

このようにマルフォイの邸宅が死喰い人の集まりと儀式が行われる場所であることに比べてウィーズリーの家は日常生活を行う住居空間で特徴づけられる。ウィーズリー家とマルフォイ家の階級的特徴はハウスエルフの存在有無によって明確に現れる。マルフォイ家は家事の大半をハウスエルフであるドビーが担当するが、ウィーズリー家のモリーは魔法使いでありながらも、料理や洗濯、子供の世話をするなど日々家事に追われている。

魔法世界で富を象徴するもう一つのアイテムは、クィディッチのほうきである。『秘密の部屋』では、グリフィンドールのクィディッチ・チームとスリザリンのチームが

練習をした日のシーンで、ニンバス 2001（クィディッチ用箒）と呼ばれるほうきを使ってマルフォイの優越感を効果的にシーン化する（図 5-7）。

この日、ドラコらスリザリン・チームはグリフィンボール・チームの前にいきなり登場して、ドラコが新しいシーカーになったこととチームのメンバー全員に買ってあげた最新のニンバス 2001 を誇る。ドラコは父親のお金でスリザリン・チームのメンバーに選ばれたのである。

このシーンでは、ニンバス 2001 を握っているスリザリン・チームの姿とニンバス 2001 を通して自分の財力に対するドラコの優越感を示して、自分を他の階級と徹底的に区分する。このようなドラコの姿にハーマイオニーは「グリフィンボールの選手はお金じゃなくて才能で選ばれてるわ」と言い放つ。



『秘密の部屋』

〈図 5-7〉 マルフォイとクィディッチ

ドラコはお金で自分の欲望を満たす。スリザリン・チームは物質的報酬の対価としてドラコに従属される。このようなドラコの富を誇示する行動と階級意識はマルフォイ家、すなわち彼の家族から再生産されたということが言える。家族は階級再生産が行われる最も重要な単位である²³。

結局、クィディッチゲームは、同じ条件で公正な競技が行われるのではなく、経済的能力で試合を支配することになる。これは、どの社会にでも存在する金と権力の二分法的構造と現代社会の階級問題を魔法世界の中の葛藤と対立としてそのまま再現している²⁴。

フランスの社会学者 Pierre Bourdieu (1986) によれば、上流層は上流階級のハビトゥスを、下層民は下層階級のハビトゥスを内面化している。ハビトゥスは社会的に獲

²³ Bourdieu, Pierre. "The forms of capital." *Cultural Theory: An anthology*, Eds. Szeman, & Kaposy, Greenwood Press, 1986.

²⁴ Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*, London: Continuum, 2002, p.80.

得された性向の総体を意味する。このようなハビトゥスは家族を通じて、まず得られるので、富が代替わりさせるように伝承される²⁵。ルシウスがウィーズリー家の貧困を嘲笑し、ハーマイオニーを下品なマグル出身だと非難するように、ドラコの行動もそれらと同様になる。

『ハリー・ポッター』は、純血主義マルフォイ家とマグルの世界の中産階級であるダーズリー家を通して、物質主義の批判をするが²⁶、同時にハリーが親から受けた「富」を眺めながら純粋に喜ぶ場面は物質主義を認める二重性を示している。虐待を受けた孤児ハリーが魔法世界に戻って親が残した莫大な遺産を受け取るのは、単に自分の隠された地位を取り戻すだけであるという認識を示す²⁷。

結局、『ハリー・ポッター』は、無意識のうちに、資本主義思想が持つ富に対する二重性を示しており、現実の世界の物質的な価値がそのまま幻想の世界に適用されているものと見ることができる。

3. 純血主義の魔法使いによる非魔法使い差別

魔法世界における階級差別は、魔法使いたちの間にあるだけではなく、魔法使いと魔法生物(ハウスエルフ、鬼、巨人族、人狼、半身半馬)の間でも存在する。魔法世界では、魔法使いが魔法生物に対して特権階級とみなされる。それが明らかに分かるのは、原作『炎のゴブレット』である。

原作での純血主義の魔法使いによる、ハウスエルフへの差別はひどいものであった。マルフォイ家のハウスエルフであるドビーは、主人から脅迫、暴力などの非人道的な扱いを受けたにもかかわらず、彼は自分が過ちを犯したせいであると思い、自分の手にアイロンをかけたり、スタンドで頭を殴ったりするなどの自傷行為をする。また、クラウチ家に仕えたウィンキー(ハウスエルフ)は、高所恐怖症にもかかわらず、主人の命令に従って、クイディッチ・ワールドカップ競技場の一段高い場所にある上等な客席で主人を待つ。

ハーマイオニーは、こうしたハウスエルフの窮状に憤りを覚え、ハウスエルフ解放

²⁵ Bourdieu, 1986, op. cit., pp.241-258

²⁶ 『ハリー・ポッター』で中産階級は物質主義のため非難されるが、一般的にハリウッド映画では中産階級が階層判断基盤の基準になる。

Lehman, Peter & Luhr, William. *Thinking About Movies: Watching, Questioning, Enjoying*, 2nd Ed. Malden, MA: Blackwell Publishing, 2003.

²⁷ ハリーの両親は大いなる遺産を残しており、それはグリンゴッツ銀行の金庫に預けられている。ハリーは、ホグワーツ魔法魔術学校に入学する前、ハグリッドに連れられて銀行へ行き、学校生活に必要な資金を下ろす。

戦線(S.P.E.W.: Society for Promotion of Elfish Welfare)を設立、ハウスエルフの待遇改善や法的権利の向上を促進する運動を開始する。

原作でのハウスエルフは、特定の魔法使いを自身の主人とし、その主人や家族に生涯仕え、自身にとって不本意な命令であっても、主人の命令には必ず従わなければならないことが描かれている。しかし、映画の中では、差別に基づくこうした行為は縮小され、ハーマイオニーのハウスエルフ解放戦線活動は削除されている。つまり、映画では、ハウスエルフが純血主義の魔法使いによっていかなる差別を受けているのかが具体的に描かれてない。これは、原作の中の「魔法世界」では、階級問題が厳然と存在するが、映画では、階級の存在は認めながらも、階級の違いによる差別の存在を否定しようとするものである。

現実社会において、階級の違いはさまざまな面で現れる。階級社会であるとされるイギリス社会において、階級を判断する要素は住んでいる場所、話す言葉、通っている学校、着ている服などが挙げられる。特に、階級識別を着ている服をもって示すことは、古くからしばしばなされたことであるが²⁸、『ハリー・ポッター』においても着衣で階級を識別することができる。

『ハリー・ポッター』で衣服は階級を示す要素である。濱田勝宏(2009)によると、社会制度の進化、文明の発達とともに、衣服には地位・身分の表示、社会的役割や職業の明示、その他階級的・階層的要因の表示などが重要な機能となる²⁹。特に、映画という視覚芸術において、スクリーンの中で登場人物たちが身に着ける衣服が大きな役割を果たす。衣服がその人物の職業、社会的立場、経済状態を表現する記号として作用し、映画内容そのものを決定づけることすらある³⁰。

映画の中、リーマス・ルーピンやルビウス・ハグリッド、ゴブリン、ハウスエルフはやぼったい服装や汚い服で、彼らが下層階級であるということを示す。注目するところは、ハウスエルフの衣服は、両価性(アンビバレンス、ambivalence)を持つということである³¹。ハウスエルフの衣服は隷属のしるしであり、主人から衣服を与えられることは、妖精にとって「解放」を意味する(図5-8、9)³²。

実際に、マルフォイ家のハウスエルフであったドビーはハリーの罫に嵌り、ルシウ

²⁸ 西村鞍子「江戸時代における衣服規制: 変遷の概要と性格」、『家政学雑誌』、31号、1980年、438頁

²⁹ 濱田勝宏「服装社会学と社会学(2)」、『文化女子大学紀要』、服装学・造形学研究、40号、2009年、76頁

³⁰ 小阪知弘「スペイン映画『靴に恋して』(2002)における衣服の意味作用」、『関西外国語大学研究論集』、93号、2011年、169頁

³¹ 両価性とは、ある対象に対して、愛と憎しみなどの相反する感情を同時に持ったり、相反する態度を同時に示す。

³² ハウスエルフは隷従の証として、枕カバーやキッチンタオルを体に付けているが、主人から衣服を与えられることは、「解雇」を意味し、主従関係を断つことができる。

スから衣服を与えられ、解放される。ハリーが靴下を本の中に入れてルシウスに渡し、それをドビーに投げ、ハリーが「開けてみて」とドビーに言ってドビーが開けると靴下があり、解放に至る。このように衣服は、『ハリー・ポッター』において、階級的要因として機能している。



『秘密の部屋』

〈図 5-8〉 ドビーを足で蹴るルシウス

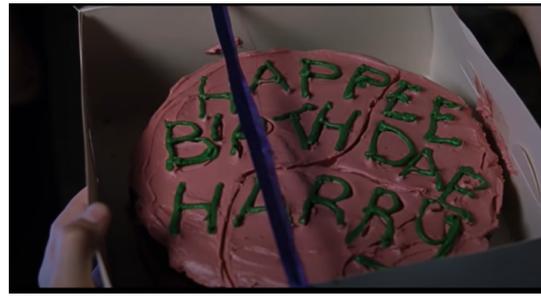
〈図 5-9〉 解放されたドビー

「魔法世界」における階級的特徴は食べ物からもわかる。Bourdieu (1979) によると、食べ物の好みにも社会階層による違いがあることを明らかにしている³³。食べ物の価値は民族性、宗教、階級および社会的グループのしるしであり、象徴である³⁴。

映画『ハリー・ポッター』には、様々なシーンで個性的な食べ物や飲み物が登場する(図 5-10)。『ハリー・ポッター』において食べ物の好みによる社会階層の違いはハグリッドが作った料理により、最も明らかになる。ハグリッドが作った料理が映画で初めて登場するのは、11歳になったハリーのお誕生日ケーキである。映画では、ピンク色のケーキに緑色の文字で、「HAPPEE BIRTHDAE HARRY」と書かれていたチョコレートケーキが登場する(図 5-11)。

³³ ブルデュー、ピエール 『ディスタクシオン』I、II、石井洋二郎訳、藤原書店、1990年(Bourdieu, Pierre. *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Minuit, 1979)

³⁴ Wrangham, Richard. *Catching Fire: How Cooking Made Us Human*, New York: Basic Books, 2009, p.109.



『賢者の石』

〈図 5-10〉 ホグワーツでの食事

〈図 5-11〉 ハグリッドが作った誕生日ケーキ

原作で、ハグリッドはハリーたちが小屋へ遊びに来るとよく手料理をふるまうが、その料理は「固くて歯が折れそうなロック・ケーキ」、「鉤爪入りシチュー」、「イタチ肉のサンドイッチ」などであり、ハリーたちの食欲を失わせる。こうした描写は下層階級であるハグリッドの料理を象徴的に低く評価するためであり³⁵、食べ物は人の階級を区分するために使われている。

坂田(2014)によると、ハグリッドの料理は、食べ物の好き嫌いの違いというよりも、少々野性的で、一步間違えると野蛮さを指し示す表象になりかねないもので、差別を助長するこうした指標の使用は批判を免れないと指摘する³⁶。

Bourdieu(1986)は「無産階級の趣味に対するブルジョワジーの‘嫌悪(disgust)’は知らず知らずに現れる階級間の最も高い障壁である」と説明する³⁷。『ハリー・ポッター』はいわゆる「劣った人種」の食べ物の好みの描写にも、無意識の差別意識が見え隠れしている。

マルクスによれば、階級闘争は、ブルジョワジーとプロレタリアートの間に起こる闘争のことである。つまり、中産階級は存在するが、階級闘争に直接影響を受けることはない³⁸。

『ハリー・ポッター』の魔法世界では、純血主義者の魔法使いがブルジョワジーを代表し、ハウス・エルフがプロレタリアートの表象を担っている。そして、中産階級は、半純血の魔法使いにより代表される。『ハリー・ポッター』では、ハリーを含む、半純血の魔法使いたちが階級闘争に積極的に参加する。このことがマルクス主義の階

³⁵ Park, J., “Class and Socioeconomic Identity in Harry Potter’s England”, *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Anatol, G.L., Westport: Praeger Publishers, 2003, p.185.

³⁶ 坂田、前掲書、73 頁

³⁷ Bourdieu, 1986, op. cit., pp.241-258

³⁸ Amariglio, Jack, Callari, Antonio, & Cullenberg, Stephen. “Analytical Marxism: a critical overview.” *Review of Social Economy*, 47(4), 1989, pp. 415-432.

級闘争とは異なる点である。

この節で説明したように、魔法使いと非魔法使いの間には、明確な階級差があり、魔法使いたちの中でも純血や半純血、マグル出身などの階級が存在するが、非魔法使いたちの間には、いかなる階級の違いも存在しない。例えば、一時期ホグワーツに在職していたルーピン教授と死喰い人の手下の役割をするフェンリール・グレイバックの二人は、同じ人狼であり、階級的な差異はない。また、グリーンゴッツ銀行に勤務するゴブリンや他のゴブリンたちの間でも目立つ階級葛藤や階級的隔たりはない。

これは結局、魔法世界は魔法使い中心の社会であり、非魔法使いは被支配層の弱者としての社会的地位を自覚し、順応しなければならないことを示す。また、彼らの能力や努力だけでは魔法使いへの階級の移動は不可能であることを意味する。

『ハリー・ポッター』における階級間葛藤や闘争は、原作のような純血やマグル、上流階級と下層階級の間で現れるものというよりは、悪の純血主義の魔法使いと善の非純血魔法使いとの善悪の闘争として読み解くことが可能なのである。

第三節 『ロード・オブ・ザ・リング』における階級表象

1. 権力、階級と王権

『ロード・オブ・ザ・リング』において「一つの指輪」は、「中つ国」のすべての生き物を誘惑し、対立の場になるようにする。つまり、「中つ国」を支配する欲望にとらわれてサウロンが創造した指輪は、ボロミアを誘惑し、ゴラムとサルマンを墮落させる。

指輪がゴラムとサルマンを墮落させたのは、指輪が持っている「権力 (power)」のためである。指輪の奴隷になって逃れることができないゴラムも本来邪悪な存在ではなかった。ゴラムはもともとフロドとサムのようなホビット族である。スメアゴル (Smeagol) 時代の彼は、他のホビット族と同様平凡な日常を送っていた。しかし、指輪への欲望が彼を普通のホビットからモンスター・ゴラムに変貌させた。

サルマンが願うことは指輪の力そのものである。つまり、彼は「一つの指輪」を通して得ようとするのは、他の生物に対する「権力」と「支配」である。Aryk Nusbacher (2002) によると、『ロード・オブ・ザ・リング』で善の人物は、サウロンと戦うが、彼らの目標は、単にサウロンとの戦いに勝つのではなく、「一つの指輪」を破

壊することにより、サウロンを削除することである³⁹。

ゴンドールのボロミアとデネソールは勝利のために指輪を利用したくなる。しかし、彼らは指輪を通して勝利を勝ち取ったどころか、自分たちの欲のために、死をもたらす結果を生んだ。指輪は遠征の一員として勇敢で徳のある人物として描かれていたボロミアさえ「他人に対する支配」への食欲さを表わすように導く。

「中つ国」のすべての人種の社会には階級が存在する。しかし、エルフ、人間、ドワーフ、ホビットなど善側の人種内部には、階級差別はみるこができないが、悪側のオーク社会には階級差別が存在する。特に、サルマンに絶対的な忠誠心を見せるウルク＝ハイは、基本的に他のオークを差別する。例えば、映画『二つの塔』で、モルドール組のオークのリーダーであったグリシュナクはウルク＝ハイのリーダーであるウグルクとの対立を引き起こす。グリシュナクはメリーとピピンを食べたいという意見を出す。ウグルクはグリシュナクの意見を無視し、彼の部下を殺す。ウグルクの部下、ウルク＝ハイたちはオークの死体を歓呼しながら食べる。つまり、目的を一緒にした共同体の中で人種等ではない上下関係が存在している。これは「中つ国」に階級社会が存在していることを示している。しかし、このような階級差別が存在するのは悪側だけであり、善側には階級は存在するが階級差別は見えなくなっている。

『ロード・オブ・ザ・リング』が描き出す善側の理想社会は支配階級のないアナキー（Anarchy）な社会である⁴⁰。アナキーな社会とは、社会的、経済的、政治的、支配者がいない社会を意味する。しかし、悪側には、サウロンとサルマンの強い権力による差別が存在する。

どの社会であれ、分化された階級は、分化された生活様式によって同一視されることが出来る。階級の構成員の象徴は行動でよく見えるが、もっと重要なことは、衣装・言語・家族生活・教育・職業・飲食・余暇活動などを含む行為タイプ（patterns of activity）が示すものである。

「中つ国」で階級社会の特性と社会的地位を J. A. Poveda (2004) は、各種族の衣服や身体的特性などを通して説明している。彼によると、衣服の場合、中世階級社会の服装がそのまま反映してホビットは農民の服を着て、騎士の主人公は戦士の服を着ている。また、ヒロインの身体的特徴（ブロンドの髪、きれいな肌など）と上品なイメ

³⁹ Nusbacher, Aryk. J. R. R. Tolkien: Master of the Rings: The Definitive Guide to the World of the Rings, Dir. Stephen Grant, DVD, Good Times, 2002, 2021年1月25日閲覧)

⁴⁰ トールキンは、19世紀イギリスの詩人であり、マルクス主義者である William Morris の影響を受けたという。

ージ (courtly imagery) も階級社会の特徴と社会的地位を表す。『ロード・オブ・ザ・リング』のヒロインの色白の (fair-skinned) 顔は高貴な階級の特徴を示す⁴¹。

こうした人種間の階級的特性に比べて、映画の中で人種内階級社会の特性と社会的地位に対する情報はほとんどない。特に下層階級の生活ぶりを知ることはできない。ただ、サムと彼の妻ロージー・コトン(図 5-12)やブリー村の宿屋「躍る小馬亭」の主人、バーリマン・バタバー (Barliman Butterbur) などのキャラクターが映画に登場するだけである。



『王の帰還』

〈図 5-12〉 サムとロージーの家族

Bourdieu (1986) によると、階級は、経済資本と文化資本の総量と両者の比率の大小により決定される⁴²。特に、文化資本の中で、慣習行動を生み出す諸性向、言語の使い方、振る舞い方、センス、美的性向などを指すハビトゥスの相同性は、同じ「階級」の人間を結び付ける。一般に上流層は、自己の文化に「高潔さ (nobility)」を付与し、他階級との差別を作る。たとえば、王は宮殿での豊富な食品や酒、貴族たちと一緒に時間を通して、民との境界を確実にする。

しかし、ローハンの王、セオデンは権威的ではない。それは角笛城の合戦⁴³に勝利した後、セオデン王と民と一緒に祝う場面からわかる (図5-13)。セオデン王は甥のエオメルとともに民と一緒にお酒を飲みながら楽しさを共有し、階級間の境界をあいまいにする。

⁴¹ Poveda, Jaume Albero. "The imagery in J.R.R. Tolkien's Fantasy of middle-earth.", Doctoral dissertation, University of Alicante. 2004.

⁴² Bourdieuによると、経済資本と文化資本の総量が同じでも、両者の比率の大小により、階級は別の方法で表示される。実業家と経営者などは文化資本より経済資本の方が相対的に大きく、画家や音楽家などは経済資本より文化資本の方が相対的に大きいとされる。

Bourdieu, 1986, op. cit., pp.241-258.

⁴³ 角笛城の合戦は、サルマンの軍勢とローハン軍との間で戦われた合戦である。サルマンの主戦力はオークやウルク=ハイであり、ローハン軍には旅の仲間の一部のガンダルフ、アラゴルン、ギムリ、レゴラスなどが加勢した。



左、右)『王の帰還』

<図 5-13> 一緒にお酒を飲むローハンの王と民

一方、上流層の物質的な豊かさと権力に対する階級の象徴的な違いは、王族などの描写を通じて把握することができる。例えば、『王の帰還』での王座は、権力の位階を明確に示している。<図 5-14>にある大理石で作られた白い王座は、ゴンドール王の王座である。王座は絶対権力を象徴する⁴⁴。デネソール二世はその王座を占めたいが、摂政であるため、座ることができず、代わりにその下の黒い椅子に座っている。つまり、王が不在であっても、デネソール二世は王ではないので、その場に座ることができない。執政は王冠も王笏も持たず、白い杖をその地位の証とした。指輪戦争の時、彼は、王の帰還を拒み、執政職の白い杖を折って自決する。



『王の帰還』

<図 5-14> ゴンドールの王座とデネソール二世

この王座と同様に絶対権力の意味を持つ別の要素は、折れたる剣の「アンドゥリル (Andúril)」である (図 5-15)。アンドゥリルは、アーサー王の「エクスカリバー (Excalibur)」のように、王の資格を象徴する。アンドゥリルはアラゴルンの先祖で

⁴⁴ 王座の絶対権力の意味は、ジョージ・R・R・マーティン著のファンタジー小説シリーズ『氷と炎の歌』を原作とした HBO のテレビドラマシリーズ『ゲーム・オブ・スローンズ』でよく現れる。<鉄の玉座>は、七王国を屈服させ、彼らの武器を奪ってドラゴンの炎で溶けて作った王座で、「絶対権力」を象徴する。

あるエレンディルが使った名刀ナルシルの破片で再製造したもので、エルロンドがアラゴルンに与える。アラゴルンがアンドゥリルを受け入れることは、彼がイシルドゥア（Isildur）の後継者であり、 Gondor の王であるのを受け入れることである。これは王の帰還を意味する。



『王の帰還』

〈図 5-15〉 アンドゥリル (Andúril)

『ロード・オブ・ザ・リング』でアンドゥリルを持つ王の帰還は、血統の正当性と服従を意味するということができる。このような服従は、la Boétieが言う自発的隷従に該当する⁴⁵。自発的服従という社会集団全体の矛盾するイデオロギーがより直接的に見られる映画は、ジョン・ブアマン (John Boorman) 監督の『エクスカリバー』(Excalibur、1981) である (図5-16)。この映画は、アーサー王が持つとされる剣を中心に描かれている。エクスカリバーはブリテン島の正当な統治者の象徴とされる。人々はこの剣に服従をする。幼い少年が剣を抜いたとき、皆がひざを折って子供の戦士に服従を誓う。『ロード・オブ・ザ・リング』の指輪は、エクスカリバーと同様にその代弁される力と武力は最も古典的な方法の服従を強要している。

⁴⁵ 山上浩嗣 「ラ・ボエシ『自発的隷従論』における「友愛」の諸相」、『文学篇』、待兼山論叢、47号、2013年、1-18頁



〈図 5-16〉 映画『エクスカリバー』

トールキンは、彼が創造した「中つ国」に、階層階級構造と強力な中央権力を付与した。特に、「中つ国」の人間社会での君主制⁴⁶は自然に受け入れられている。これは、タイトルを『王の帰還』に決められたこと、そしてアラゴルンの戴冠式から読み取ることができる（図 5-17）。



『王の帰還』

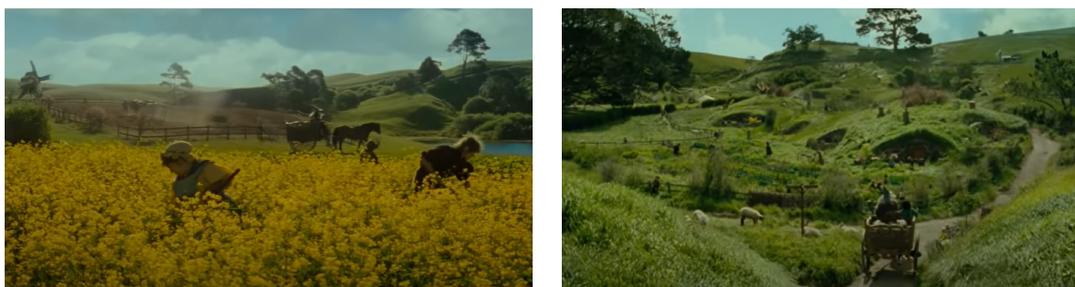
〈図 5-17〉 アラゴルンの戴冠式

『王の帰還』は、 Gondor王家の末裔アラゴルンが長期に渡って国王不在であった Gondor に再び王権を蘇らせる物語である。アラゴルンは、 Isildur の末裔で、 Gondor の王位継承権を持つ唯一の人物である。 Gondor は、正統の王が帰還する日まで、国王を補佐する執政官の支配が認められている。従って、『王の帰還』は正統の王が苦節の末に王権を回復するという典型的な王権神話である。

⁴⁶ 君主制は、至上の権力が単一個人、つまり一人の支配者が統治する国家形態であり、君主は聖別されてその地位に就き、その統治権は通常、世襲・終身である。君主が皇帝である君主制は、皇帝制と言う。
渡邊駿「現代における君主制とそのグローバルな類型化をめぐる政治学的考察：アラブ君主制国家群とその系譜的正統性の解析へ向けて」、『イスラーム世界研究』、第 11 巻、2018 年、256-303 頁

2. 特権階級のない社会

映画『旅の仲間』は、プロローグに続いてホビット庄のテーマ曲と一緒にホビット達が生きていく町を見せながら開始する。農夫が仕事をする姿と子供たちがガンダルフとフロドを追う姿、家畜がいる様子などが暖かい色味で軽快に描かれている（図 5-18）。



『旅の仲間』

〈図 5-18〉 のどかなホビット庄の風景

ホビット庄の姿は、イギリスの田舎の風景が原形として知られているが⁴⁷、映画だけではホビット庄の社会生活の具体的な情報を知ることができない。したがって、彼らの生活は原作を介して把握するしかない。原作でホビット庄は伝統的な階級社会を反映している。ホビット庄には王の権威を代行する「セイン」、大堀町⁴⁸の町長でありホビット庄全体の公務を務める「庄長」などの役職がある。セインは、族長たちの中から選出される。

ドワーフの代表的な仕事は、鍛冶屋（または石工）であるのに対し、ホビットの代表的職業が農夫である。ホビットの日常業務は、農業であり、栽培や収穫に重点を置き、これらの労働は、自分所有の農場（own farms）で行われるか、他人の農場（others fields）の借地（tenants）で行われる。ホビット庄はサムのようにジェントリー（gentry）⁴⁹の使用人として働くか、または、いくつかの坑夫（miners）、職人（artisans）、小売商人（shopkeepers）、日雇労働者（day-laborers）として働く。このようなホビット庄の階級特性は、当時のイギリス社会でジェントリーと呼ばれた階級の生活スタイル

⁴⁷ Curry, op. cit.

⁴⁸ 大堀町は、ホビットたちが住むホビット庄の首府である。大堀町には、町役場と多数の博物館（俗称マゾム館）がある。

⁴⁹ ジェントリは、イギリスにおける下級地主層の総称である。ジェントルマンと同義にも用いられる。

ルを反映する⁵⁰。

映画に出てくるシーンだけでは階級間の境界と葛藤などを把握できないが、社会的階級は存在しても明確な階級差はほとんど存在しないと考えられる。これは、ホビット庄におけるビルボの誕生日パーティーを通して、間接的であるが、把握することができる（図 5-19）。ガンダルフがホビットと付き合っ、老若男女と一緒に踊って楽しむ姿の中に階級間の境界は見られない。John Chancer（2012）が言うように、ホビット庄におけるビルボの誕生日パーティーは、マスターとサーバント、裕福な貴族と大衆の理想的な関係を象徴するパラダイムを表す⁵¹。



『旅の仲間』

〈図 5-19〉 ビルボの誕生日パーティー

ホビット族の社会階級議論において重要なのは、主人公フロド・バギンズと彼に仕える庭師サムである。フロドとサムの関係は、『指輪物語』における代表的な主従関係である。彼は主人を心から敬愛し、つき従い、フロドを支える存在である。

フロドの遠征が成功できたのは、サムのおかげと言っても過言ではない。遠征を開始してから運命の山の炎（Mount Doom）までずっとフロドを補助し、ゴラムと指輪の誘惑に絶えず揺れるフロドを励ます。特に、映画『王の帰還』で倒れたフロドを背負って、運命の山を登る姿はまさしく勇者である（図 5-20）。

⁵⁰ Weidner, Brian N., “Middle-earth: The Real World of J.R.R. Tolkien.”, *Mythlore: A Journal of J.R.R. Tolkien, C.S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 23(4), 2002.

⁵¹ Chancer, John. *The Lord of the Rings: The Mythology of Power*, Kentucky: University Press of Kentucky, 2001.



『王の帰還』

<図 5-20> フロドを背負って、運命の山を登るサム

フロドとサムの関係は、一般的な上下関係ではない。彼らの関係は相互愛情に基づく、真の友情という見方は原作でも映画でも読み取れる。Scott Kleinman(2005)はフロドとサムの関係を「搾取を伴わない従属の一形態」としている⁵²。

原作では、サムはフロドを旦那様 (Master) と呼ぶが、映画ではそう呼ぶことはない。「Mr. Frodo」と呼ぶ時もあるが、気分と状況によって「Frodo!」とも呼ぶ。『ロード・オブ・ザ・リング』では、フロドの友人、メアリーとピピンも一緒に登場する。原作でサムは、フロドはもちろんメアリーとピピンより階級が低い労働者階級に属するので、メアリーとピピンにも敬称をつけて話す。しかし、映画で彼らの関係は、原作での上下関係の意味は弱くなって、友情が強調される。

これは、彼らの友情は、映画の中のいくつかのシーンを通して理解することができる。例えば、<図 5-21>は、『王の帰還』の中のシーンで、フロド、サム、メアリーとピピンが、遠征の全てが終わった後、故郷に帰って酒を飲む場面である。このシーンで、フロドとサムの関係は、所有者と使用人の姿というより友達の間を見せている。



『王の帰還』

<図 5-21> 酒を飲むフロド、サム、メアリーとピピン

⁵² Kleinman, Scott. "Service.", *The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Trilogy*. Ed. Robert Eaglestone, New York: Continuum, 2005, pp.138-148.

ジャクソンは映画の中でサムをフロドの友達に変容しただけでなく、彼の役割を強化する⁵³。特に、『王の帰還』でサムの役割はさらに強化されて、フロドを奨励し、守り、最後まで任務に忠実な、純粋な英雄にサムを変化させた。映画の中でのサムの比重は、映画出演時間を通じて知ることができる。映画の主人公であるフロドが『ロード・オブ・ザ・リング』の最初のシリーズ『旅の仲間』で53分、三作目『王の帰還』では42分間登場し、フロドの出演時間がますます縮小されているように見える。しかし、サムは一作目では24分、三作目では33分間登場し、シリーズ後半に行くと出演時間が増加することが分かる。

この設定は、現代の映画の観客が、主人と使用人の関係を理解して受け入れるのが難しいという考えから、映画で変容させたのであろう。Oystein Hogset (2004)によれば、ジャクソン監督が映画の中でフロドとサムの階級の境界を変容させることにより、遠征中に直面した問題をうまく処理することができるようになったという⁵⁴。

しかし、この映画の変容は、原作に示されたホビット達の階級構造とそれに伴う生活を理解しにくくしたと思われる。つまり、フロドとサムが住んでいるホビット庄にどのような階級があるのか、階級間の関係はどうなのか、どのような文化があるのかを知ることができなくなっている。

『ロード・オブ・ザ・リング』の原作と映画の中で重要なのは、サムを通して分かる友情である。フロドは「中つ国」を去るとき、ビルボと一緒に記録した回想録が入った「西境の赤表紙本 (Red Book)」⁵⁵をサムに託す。その理由は、フロドとビルボとは異なる、サムの視線から書かれていく記録の為である。トールキンが、この「西境の赤表紙本」の記録に期待した価値は、アラゴルンと象徴される英雄の姿ではなく、庭師のサムに象徴される友情と愛の価値であろう。

3. 曖昧化する階級境界

『ロード・オブ・ザ・リング』には、階級の存在が見えにくくなっているが、『ロード・オブ・ザ・リング』の続編である映画『ホビット』においては、階級の存在が明ら

⁵³ Smith, J., & Matthews, J. C. *The Lord of the Rings. The Films, the Books, the Radio Series*, London: Virgin Books, 2004, p.164

⁵⁴ Hogset, Oystein. "The Adaptation of The Lord of the Rings A Critical Comment." *Translating Tolkien: Text and Film*, Ed. Thomas Honegger, Walking Tree Publishers, 2004, pp.174.

⁵⁵ 『西境の赤表紙本』はビルボ・バギンズによって書き始められ、後にフロドに引き継がれ、そしてサムワイズ・ギャムジーによって主に書かれた、第三紀末の歴史および指輪戦争に関する重要な史料集である。

かになる。その代表的な例がドワーフ社会における階級の存在である。

ギムリは、「旅の仲間」の一員である。『ホビット』でビルボと共に冒険をしたドワーフ、グローインの息子である。『ホビット』の時点では若すぎて同行させられなかったが、77年後が舞台となる『ロード・オブ・ザ・リング』でフロド・バギンズの「旅の仲間」加わり、重要な役割を果たした。

映画『ホビット/思いがけない冒険』で、ドワーフ族の階級は、王族と貴族、平民で構成されている。これはエレボール遠征へ向かった13人のドワーフの中で、トーリン、フィリ、バーリン、バーリンの弟ドワーリンは、王族や貴族階級であり、ボフルとビフルなどは労働者階級の出身ということが描かれている。このようなドワーフ族の階級構造において、「富」は重要な意味を持つ。

これは、映画『ホビット』でのドワーフ族の衣装で、より明確になる(図 5-22)。映画の中で衣装を担当した Ann Maskery によると、衣装の色や素材を活用してドワーフの地位と個性を示したという⁵⁶。高い地位にあるトーリン、フィリ、キーリ、バーリン、ドワーリンは、ベルベット (velvets) とブロード (brocades)、パッド入りレザー (padded leathers) などのファブリックを使用し、ミッドナイトブルー (midnight blue)、クラレット (claret)、ティールグリーン (teal green) の色は、上流階級の堂々とした姿を見せようとした。そして、労働者階級のドワーフたちには、茶色と灰色がかったあまり洗練されていない生地 (less sophisticated fabrics) を使用し、オリは、映画製作者が、柔らかくて無邪気であることを望んでいたため、彼には薄いラベンダー色のニット - ベスト、帽子、スカーフ、手袋を着用させた。



⁵⁶ The Hobbit: An Unexpected Journey, Cinema Review
(<http://cinemareview.com>, 2021年1月25日閲覧)



出典：Sibley, Brian. *The Hobbit: An Unexpected Journey Official Movie Guide*, Mariner Books, 2012.

〈図 5-22〉映画『ホビット』におけるドワーフ族の衣装

映画『ホビット』におけるエルフについて述べると、タウリエルは、原作小説には登場しない映画版オリジナルのキャラクターである。彼女は、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズに登場するアルウェン、ガラドリエル、エルロンド、レゴラスより階級の低いエルフであるが⁵⁷、彼女の役割の比重は高い。闇の森の守備隊長である彼女は、レゴラスとキーリとの三角関係にあるという設定である。映画の中に女性キャラクターが少ないという批判に接したピーター・ジャクソン監督と彼の妻フラン・ウォルシュによって映画化の際に新たに創造された⁵⁸。ジャクソンがタウリエルを創造してジェンダー問題については肯定的な影響を及ぼしたが、新たな階級の出現で、原作より階級問題を複雑にさせたといえることができる。

トールキン作を原作としたジャクソン監督による映画化について、C. Valente (2004) は、彼らが生きてきた時代背景と関連付け、説明している。つまり、ジャクソン監督の住む現代は、トールキンが住んでいた時代に比べて、階級の境界が希薄になっている。そのためトールキンが強調した階級の表現は、映画において一部変容している⁵⁹。

J.G. Martin (2010) もジャクソンがアラゴルンをヘゲモニーの持つ人物として描いたら、観客の反応は肯定的なものにはならなかったと述べている⁶⁰。

また、Valente (2004) と Martin (2010) は、小説から映画への変容の際に考えるべきことは、その時代や状況によって異なる観客の視点であると主張している。

⁵⁷ タウリエルは、エルフの中ではあまり位の高くないシルヴァン・エルフ(Silvan Elves)である。

⁵⁸ Konigsberg, R.D., *The Hobbit: Why Are There No Women in Tolkien's World?*, TIME, December 31, 2012.

(<https://ideas.time.com/2012/12/31/the-hobbit-why-are-there-no-women-in-tolkienes-world/>, 2021年1月25日閲覧)

⁵⁹ Valente, C., "Translating Tolkien's epic: Peter Jackson's Lord of the Rings." *Intercollegiate Review*, 40(1), 2004, p.38.

⁶⁰ Martin, Jennifer Grek. "Two Roads to Middle Earth: Comparing the Visualization of J. R. R. Tolkien's The Lord of the Rings and Peter Jackson's The Lord of the Rings Cinematic Trilogy." *Dalhousie Journal of Interdisciplinary Management*, 6, 2010.

しかし、映画の観客は、二つの映画の原作を読んだ人でさえも、彼らが住んでいる年齢、地域、文化などによって原作と異なる解釈をすることができる。重要なことは、原作で言いたかったメッセージが正しく伝わっているかどうかにある。『ロード・オブ・ザ・リング』と『ホビット』でのストーリーと登場キャラクターの変容への理解と解釈は観客の役割だと判断される⁶¹。

第四節 終わりに

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、善と悪の戦いを描くという面では共通している。しかし、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の、二つの原作と映画では、善と悪を眺める観点が違う。善と悪が明確な『ハリー・ポッター』と違い、『ロード・オブ・ザ・リング』は、力の根源である指輪を通して、善悪の境界は曖昧であって、それは指輪を手に入れた者によって決められるということを強調する。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の原作と映画における階級関連の変容を、ストーリーと登場人物で区分して見てみる。

まず、ストーリーの変容をみると、原作『ハリー・ポッター』でドラコは、親の権力と富を通して階級差別をする。これは映画でも同じである。しかし、ハリーの場合は、ダーズリー家で富がなく悲しむ場面が省略されている。また、ハウスエルフに対する差別的な態度も、映画の中で縮小・削除されている。

また、ハーマイオニーのハウスエルフ解放戦線 S. P. E. W (エルフ福利振興協会)活動も映画では描かれていない。しかし、そうだとした場合『ハリー・ポッター』で階級差別がないわけではない。マルフォイ家で代表される上流層は、上流階級のハビトゥスを通して、他の階級を差別している。

映画『ロード・オブ・ザ・リング』でも、サムとフロドのような善の方は、階級間の境界が大きくないように描かれているが、サウロンとオークなどの悪方の場合、肌色と衣装、食べ物などを通じて階級の境界があることがわかる。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の映画は、ストーリー上でだ

⁶¹ 『ロード・オブ・ザ・リング』でのストーリーの変容の例は、前章で説明したように、原作『旅の仲間』では、魔王に刺され瀕死のフロドを助け出すのは、グロールフィンデルであるが、映画ではアルウェンに変更されている。そのようなことへの理解と解釈のことである。

けでなく、登場人物の変容もある。これは、前述したストーリー上の変容と連携しているのだが、『ハリー・ポッター』は、登場人物の排除を介して階級差別的な要素を縮小して、『ロード・オブ・ザ・リング』は登場人物の役割を強化して階級の境界を弱体化させる。つまり、映画『ハリー・ポッター』では、原作では、多くの差別を受けたクラウチ家のハウスエルフ、ウィンキーを排除して、マルフォイ家のドビーの役割を縮小した。『ロード・オブ・ザ・リング』の場合は、主人公フロドに仕える庭師、サムが役割が強化される。特に『王の帰還』でサムはゴラムと指輪の誘惑に絶えず揺れるフロドを励まして守る比重が重い役割である。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の映画の中の階級表象が持つ意味と示唆をより具体的に見てみると、二つの作品の中に共通して現れる階級表象は、以下である。

第一に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』には、さまざまな人種が存在しているが、人種間人種内に階級が存在する。『ハリー・ポッター』の魔法世界において階級構造は、純血、半純血、マグル生まれの魔法使い、マグル、ハウスエルフの順になっており、純血でも魔力と富に沿って階級の差がある。『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」の社会構造は権力構造に基づいて、強力なエルフと王、領主が上位にあり、兵士が下位にある構造であり、ハイエルフとローエルフのように同じ人種でも階層は存在する。

第二に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』で悪と戦って勝つことができたのは、特権意識を持つ上流層ではないことである。『ハリー・ポッター』では、中産階級に分類される半純血の魔法使いと下層階級のハウスエルフなどによって悪と戦うことができた。『ロード・オブ・ザ・リング』の場合は、一見すると上流層が戦いのメインになっているが、実際は現実社会に置き換えるとプロレタリアートともいえる下層のゴラムとサムによって勝利したと言って過言ではない。

第三に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での階級問題は、英国の帝国主義イデオロギーと無関係ではない。『ハリー・ポッター』ではこの高貴な血統 (Englishness) を持つだけで、被支配者たちの階級は宿命とみなし、彼らに対するある程度の強制は正当化されると信じている。そして、『ロード・オブ・ザ・リング』での指輪戦争は、既存の政治体制の擁護と王政の復古に帰結されており、英国の根強い階級体制が安定して理想的なモデルとして認識されるようになっている。このよう

に二つの作品には、作家が意識していたか、意識していなかったに関わらず、いずれにせよ英国帝国主義イデオロギーが含まれている。

次に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での階級表象の違いを見てみる。

第一に、『ハリー・ポッター』では、同じ人種（純血）であっても、階級差別が存在するが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、同じ人種の中では、階級差別がない。『ハリー・ポッター』の場合には、ドラコと父ルシウスは同じ純血であるが、比較的貧困なウィーズリー家族に地位と富を誇示して、上流階級の階級意識を示す。『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」も階級社会である。しかし、『ロード・オブ・ザ・リング』の善側には、主従関係フロドとサムの関係から分かるように、富の格差はあるが、富の格差による差別は存在しない。しかし、悪側には、サウロンとサルマンの権力による上下関係と差別が存在する。

第二に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の両方の血統は重要視されるが、『ハリー・ポッター』では、純血主義の魔法使いが彼らの目的を達成することができなかった。一方、『ロード・オブ・ザ・リング』では、王になる血統は決まっているという事実を、アラゴルンを通して示す。

第三に、二つの作品において階級構造の違いは、中産階級の存在の有無にもある。『ハリー・ポッター』では、マグル世界のダーズリー家と魔法世界の半純血の魔法使いなど、中間層が存在するが、『ロード・オブ・ザ・リング』では、これらのような中産階級は、明確に存在していない。

第四に、『ハリー・ポッター』では、友情と結婚を通して階級間の葛藤と差別を克服しようとするが、『ロード・オブ・ザ・リング』では、友情と結婚を通して人種間の和合を図る。すなわち『ハリー・ポッター』は、半純血の主人公ハリーが、彼を殺そうとするヴォルデモートに対抗して、階級が異なる友人ハーマイオニー（マグル出身）、ウィーズリー（純血）と下位層であるハウスエルフなどと一緒に悪と戦う。また、半純血のハリーと純血のジニーの結婚、マグル生まれのハーマイオニーと純血のロンの結婚、純血のハリーの父親ジェームズと、マグル出身のリリーの結婚などを通して分かる。彼らにとって結婚は、「純血主義」を絶対視するマルフォイなどの考え方とは全く違う姿で、ローリングの階級差別を乗り越えようとする意識を見ることができる。

『ロード・オブ・ザ・リング』での「旅の仲間」の間には、階級差と差別はなく、遠

征を通して共通の敵に対抗し、人種間の和解と友情を深める。その代表的な例が、レゴラスとギムリの友情である。このことについては、前章でも述べたように、彼らは、エルフ族とドワーフ族の因縁から、旅の当初は不仲だったが、遠征を通して不信を克服して、友情を深めることができるようになったのである。

以上、『ハリー・ポッター』の魔法世界と『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」で見られる階級表象の共通点と相違点を見てみた。二つの映画の共通の特徴は、原作と比較して階級を扱う方式が似ているということである。つまり、二つの映画は原作より階級差と差別が縮小された点と、階級問題が、英国の帝国主義イデオロギーとの関係を残したまま作られていることである。マルクス主義のイデオロギーは、一つの信念体系であり、個人の考えはイデオロギーから自由ではない。この不可視的なイデオロギーは知らず知らずに『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』に接した人々、特に若者や子供に吸収されることがあるので、警戒しなければならない。さらにそのイデオロギーが個人と社会を抑圧すると同時に、抑圧しているという事実までを隠蔽する場合、より大きな問題を引き起こす可能性があることを念頭におく必要がある。

結論

最近の南カリフォルニア大学の Annenberg Inclusion Initiative によると、映画の中でもジェンダーと人種、階級差別が現実と同じように存在していることが分かった¹。

『ハリー・ポッター』と『ロードオブザリング』も例外ではなく、多くの研究者からジェンダー、人種、階級の差別があると非難を受けている。ジェンダーの側面では、女性キャラクターが受動的でステレオタイプの役割だけを遂行するという事実である。人種の面では、作品の中に登場する良い人は白人、悪い人は黒人に描写し、人種差別主義が深く根付いていることである。そして、階級の面では、二つの作品の社会構造は、強力な中央権力と富によって区分されていると指摘している。しかし、このような批判は原作を中心に行われており、映画を対象とする研究はまだ不十分である。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』は、小説を映画化し、多数のシーンとキャラクターの役割が縮小または強化された。このため、ジェンダーと人種、階級の面で再現方式も変更されていると考えられる。

本論文は、このような点に着目して、映画『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の中で、ジェンダー、人種、階級がどのように映像的に描かれているのか、また、原作とはどう違うのかを明らかにするとともに、ジェンダー、人種、階級表象の問題点を指摘し、その問題に対してどのように向き合っていくかを提言することを目的とした。

具体的な研究内容と研究方法は、先行研究を批判的に検討した上で、明らかにした。

先行研究を検討した結果、①ジェンダー関連のほとんどの先行研究がフェミニスト的異性愛規範性の観点からの研究に限られている。②ジェンダー、人種、階級に関連する先行研究の大半が、原作に限られている。③ジェンダー、人種、階級を分析するための基準が明確でない、ということがわかった。

本研究においては、こうした先行研究の成果と問題点を踏まえ、映画を中心に、ジェンダー表象は、ジェンダー・パフォーマンス性の観点から登場キャラクターのジェンダー・アイデンティティを明らかにした。また、人種表象は、ポストコロニアル観点から白人至上主義と非白人の周辺化などについて考察し、階級表象は、主にマルクスとブルデューの階級理論に基づいて階級構造と階級差別の要因を分析した。

¹ Smith, Stacy L., Marc Choueiti, Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel Choi., Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018, Annenberg Inclusion Initiative, 2019.

本研究の結果は、①映画のアダプテーションによるジェンダー、人種、階級表象の変容と、②二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の共通点、③二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の相違点に分けて説明する。

① 映画のアダプテーションによるジェンダー、人種、階級表象の変容

まず、ジェンダー表象の場合は、原作とは違って主要キャラクターが映画から除外・縮小されるか強化されることがある。

『ハリー・ポッター』の場合、四作目の映画『炎のゴブレット』では、原作において重要な役割をするロンの第三兄パーシー・ウィーズリーをはじめ、ハウスエルフのドビー、ウインキーなどの役割は、縮小または除外される。パーシー・ウィーズリーは、映画化される過程において物語が変化し、登場しなくなったと思われるが、ドビーの役割縮小とウインキーのキャラクターの排除は、差別されるハウスエルフの姿を意図的に縮小したためであると思われる。

一方、『ロード・オブ・ザ・リング』において、『指輪物語』に登場するゴールドベリーやヨレスなどは、映画に登場しないが、アルウェンの役割は大きく強化される。これは、原作には無いオリジナル要素を追加し、アラゴルンとアルウェンの愛の物語を長く描くことで、映画の中における彼女の役割の比重が増加したためである。

人種表象においても、映画は原作とは異なる部分がある。例えば、『ロード・オブ・ザ・リング』の一作目『旅の仲間』では、映画オリジナルのキャラクターのラーツが登場する。また、二作目『二つの塔』と三作目『王の帰還』では、多様な色のオークが登場する。これは、一般的にオークの肌色は黒いという思考を攪乱するものである。オークの肌色を多様化したのは肌色による人種差別という非難を避けようとするものであると思われるが、彼らもまた、有色人種であるということは変わらない。

階級表象においても、原作とは異なるところがある。『ハリー・ポッター』の場合には、ハウスエルフに対する純血主義の魔法使いの差別的な態度が、縮小または削除されている。純血主義の魔法使いの差別的な態度が、映画で縮小されたのは、前述した人種差別と関連がある。ハウスエルフはヒトたる存在としての人種差別と一緒に、下層階級としての階級差別を受けている。これは、複合差別を受けているハウスエルフの差別的な行動を隠そうとする意図だと解釈される。

また『ロード・オブ・ザ・リング』では、サムとフロドのような善側のキャラクターは上下区分が薄れて、階級間の境界が大きくないと表現している。

『指輪物語』において、サムは、フロドに仕える庭師として登場するが、『ロード・オブ・ザ・リング』においての彼らの関係は、上下関係ではなく、友達のように描かれている。

これは、現代の映画の観客が、主人と使用人の関係を理解して受け入れるのが難しいことや二人の友情を強調したいという考えから、映画で彼らの関係を変容させたと考えられる。

② 二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の共通点

以下では、二つの映画の中でのジェンダー、人種、階級表象を比較して見てみる。まず、二つの映画の分析を通じ、知ることができるジェンダー表象の共通点は、次のとおりである。

第一に、二つの映画における各キャラクターのジェンダー・アイデンティティは、不変で固定的なものではなく、パフォーマンス的に構築されていくことを明確にしている。これは男性と女性に区分する単純なバイナリ的思考(binary thinking)は、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』では不向きであることを表す。したがって、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』において、ジェンダー平等を支持する研究も、ジェンダー平等ではないと批判する研究も、各キャラクターのジェンダー特性を部分的にみて、評価していると言えるだろう。

第二に、二つの映画は家父長制に対して批判的な視点を示したが、女性キャラクターの活躍と成功が、男性的領域、すなわち、戦場でのエオウインの活躍、クイディッチでのジニーの活躍など男性的能力を発揮する場合にのみ可能であることを示すという点で批判がある。特にエオウインは男装を介して行われたという点は既存のジェンダー規範や異性愛中心主義をさらに固定化させるとみることができる。

また、二つの作品の中に共通して現れる人種表象は、以下である。

第一に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』での人種区分は異なるが、映画の中で重要な役割をするキャラクターはほとんど白人で構成されており、人種間の不均衡が、明確に表れている。『ハリー・ポッター』は、原作において肌色に対する具体的な言及がなければ、すべてのキャラクターは白人が演じており、『ロード・オブ・ザ・リング』も、作家トールキンが肌色を言及していないにも関わらず、主要キャラクターは白人が演じて、「ホワイトウォッシング」と批判されている。

第二に、二つの映画は登場人物たちの人種的な背景について言及を避け、多元主義を標榜している。多元主義は、人種差別とは違って、ある人種の優位性を主張するこ

とはない。しかし『ハリー・ポッター』では、肌色の異なる人種間の争いは描かれてはいないものの、有色人種を見えない存在にしている。

『ロード・オブ・ザ・リング』においても、「旅の仲間」はエルフ、人間、ホビットやドワーフなど異人種で構成し、表面的には多元主義のように見えるものの、実質的には白人たちの多元主義であり、有色人種を含む完全なものとは言えない。

第三に、二つの映画の中での戦争は人種間の葛藤との戦いの意味を含んでいるにもかかわらず、善悪の戦いが強調されている。このため、本を読んでいない観客は、善と悪の中に隠されている人種問題を容易に認識できないと思われる。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における階級表象を考察した結果、共通点は、次のとおりである。

第一に、階級構造は『ハリー・ポッター』の場合、基本的に血統、魔力、経済力の順になっているが、血統が同じである場合は、魔力が基準になり、血統と魔力が同じ場合には、経済的条件が基準になるのを明らかにした。映画における階級間葛藤や闘争は、原作のような純血やマグル、上流階級と下層階級の間で現れるものというよりは、悪の純血主義の魔法使いと善の非純血魔法使いとの善悪の闘争としても読み解くことができた。

『ロード・オブ・ザ・リング』においても、階級は存在する。例えば、人間の階級構造は王と領主が上位にあり、兵士が下位にある構造であり、ドワーフ族も基本的には王族と貴族、平民で構成されていた。このような制度は中世ヨーロッパの身分制度と類似している。中世ヨーロッパの階層構造は、基本的に「王・諸侯」、「貴族・騎士」、「農奴(商人、職人、農民)」の3つの身分から構成されると考えられていた。

第二に、二つの映画の共通の特徴は、原作と比較して階級を扱う方式が似ている。つまり、二つの映画は原作より階級差と差別が縮小された点と、階級問題が、英国の帝国主義イデオロギーと無関係ではないことを明らかにした。

『ハリー・ポッター』では、この高貴な血統(Englishness)を持つだけで、被支配者たちの階級は宿命とみなし、彼らに対するある程度の強制は正当化されると信じているのがわかった。そして、『ロード・オブ・ザ・リング』での指輪戦争は、既存の政治体制の擁護と王政の復古に帰結されており、英国の根強い階級体制が安定して理想的なモデルとして認識されるようにする。このように二つの作品には、作家が意識していたか、意識していなかったに関わらず、いずれにせよ英国帝国主義イデオロギーが含まれている。

③ 二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の相違点

二つの作品に現れるジェンダー表象の違いは、第一に、『ハリー・ポッター』では、クィア問題の特別な言及がないが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、多数の学者によって、フロドとサムの関係はクィア関係で認識される。しかし、本研究では、彼らはホモソーシャルに近い関係であると主張した。

第二に、『ハリー・ポッター』は、『ロード・オブ・ザ・リング』に比べて「母性愛」が大きく強調されている。特に、モリーがベラトリックスとの戦いで勝利したのは、子供たちに対するモリーの「母性愛」によるものといえる。

一方、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における人種表象の違いは、次のとおりである。第一に、『ハリー・ポッター』の魔法世界では、善人も悪人も白人俳優が演じていて、人種差別の問題は起こらないが、『ロード・オブ・ザ・リング』では、善人は白人、非白人は悪人と構成されていて、人種差別の問題が提起される。『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」は、闇の勢力が住む東部地域と、サウロンと反目する自由の民が住む西部地域に区分される。つまり、悪側の東部地域に有色人種が住み、善側の西部地域に白人たちが住んでいて、問題化される。

第二に、『ハリー・ポッター』での戦争の意味は、外部の敵である純血主義者と、善側の戦争であるのに対し、『ロード・オブ・ザ・リング』での戦争は、「一つの指輪」を欲張る外部の敵はもちろん、内部の欲望も、克服する戦争である。

二つの作品における階級表象の違いは、次のとおりである。

第一に、『ハリー・ポッター』では、同じ人種(純血)であっても、階級差別が存在するが、『ロード・オブ・ザ・リング』は、同じ人種の中では、階級差別がない。『ハリー・ポッター』の場合、ドラコと父ルシウスは同じ純血であるが、比較的貧困なウィーズリー家に地位と富を誇示して、上流階級の階級意識を示す。しかし、『ロード・オブ・ザ・リング』の「中つ国」も階級社会であるにもかかわらず、「中つ国」の善側には、主従関係フロドとサムの関係から分かるように、富の格差はあるものの、富の格差による差別は存在しない。しかし、悪側には、サウロンとサルマンの強い権力による差別が存在する。

第二に、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』の両方の血統は重要視されるが、『ハリー・ポッター』では、純血主義の魔法使いが彼らの目的を達成することができなかった一方、『ロード・オブ・ザ・リング』では、王になる血統は決まっているという事実を、

アラゴルンを通して示す。

第三に、二つの作品において階級構造の違いは、中産階級の存在の有無にもある。『ハリー・ポッター』では、マグル世界のダーズリー家と魔法世界の半純血の魔法使いなど、中間層が存在するが、『ロード・オブ・ザ・リング』では、これらのような中産階級は、明確に存在していない。

これまで、この論文が示してきたように、『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』には、ジェンダー、人種、階級の問題が存在する。社会規範として成立しているジェンダー規範が、ジェンダーにもとづく偏見や、不平等をもたらすとすれば、それがまた、誰かを縛り、抑圧の根源になるとしたら、そのジェンダー規範は、解体されるべきものである。また、人種と階級に対する人々の態度や行動が、誰かに不利益をもたらすとすれば、その態度や行動も変わらなければならない。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』に登場するキャラクターの分析を通じて、ジェンダーは、固定されたものではなく、流動的であるという事実がわかったので、映画の出演者は、ジェンダーにとらわれず、キャスティングする方がいいだろうという、ジェンダー・ブラインド・キャスティング(Gender-blind Casting)の方向性に大きな示唆があった。ジェンダー・ブラインド・キャスティングとは、従来の固定的な性別による役割分担にとらわれず、ジェンダーに基づいて差別化しないことを指す。

『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』における主要キャラクターは、主に白人の俳優たちによって演じられることやホワイトウォッシング(Whitewashing)に近い俳優のキャスティングから、カラー・ブラインド・キャスティング(Color-blind Casting)の方向性にも大きな示唆があった。カラー・ブラインドは、人種的な差異を認識しないこと、つまり人種的な偏見がないことである。カラー・ブラインド・キャスティング(Color-blind Casting)は、既定の人種に捉われないキャスティングのことを指す。

本研究の成果は、以下の通りである。まず、本研究は、原作を中心とする先行研究とは異なり、映画を対象にジェンダー、人種、階級の問題を包括する研究であり、研究の領域を拡大した。映像、つまり容姿(肌)、ファッション、舞台装置などを含めたものから見える偏見なり差別なりも分析して、映画という芸術のすべての要素を網羅している。

また、二つの映画のジェンダーと階級表象の説明力を高めたのも、本研究の成果である。ジェンダー表象の場合、映画に登場するキャラクターのジェンダー・アイデンティ

ティをジェンダー・パフォーマティブな観点から明らかにした。これにより、今まで、異性愛規範性の観点から解釈されてきたジェンダー・アイデンティティの認識を正すことができると考えられる。

そして、階級表象において、ブルデューの文化資本論を適用して、二つの映画における各階級の特性に対する説明力を高めた。映画の中の階級問題を扱った既存の批評や論文は、主に階級構造と差別の存在と、その影響を論じた。しかし、本研究では、映画の主要シーンを文化資本の枠組みによって分析し、二つの映画における各階級の特性を明確にした。

参考資料

- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと賢者の石』、静山社、1999年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』、松岡佑子訳、静山社、2000年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』、静山社、2001年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』（上、下）、静山社、2002年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』（上、下）、静山社、2004年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと謎のプリンス』（上、下）、静山社、2006年
- ローリング、J. K. 著、松岡佑子訳、『ハリー・ポッターと死の秘宝』（上、下）、静山社、2008年
-
- トールキン、J. R. R. 著、瀬田卓二・田中明子訳、『旅の仲間』（上1、2、下1、2）、評論社、1992年
- トールキン、J. R. R. 著、瀬田卓二・田中明子訳、『二つの塔』（上1、2、下）、評論社、1992年
- トールキン、J. R. R. 著、瀬田卓二・田中明子訳、『王の帰還』（上、下）、評論社、1992年

参考文献

- 飯田貴子、「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在——デスクへの調査から見えてくるもの」、『スポーツとジェンダー研究』、6号、2008年
- 石田かおり 「「美白」意識の解釈学的現象学」、『駒沢女子大学研究紀要』、20号、2013年
- 伊達桃子、「ファンタジーの新しい波—『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか」、『社会科学雑誌』、創刊号、2009年
- 伊達桃子、「人形ファンタジーにおける変身」、『社会科学雑誌』、第4巻、2012年
- 伊達桃子、「映画になったファンタジー—現代ファンタジーの挑戦」、『社会科学雑誌』、第12巻、2015年
- 伊藤公雄、『男性学入門』、作品社、1996年
- 上田仁志、「ファンタジーと悪夢—スピルバーグとD. リンチの場合」、『帝京大学短期大学紀要』、第26号、2006年
- 上野千鶴子、「複合差別論」、『差別と共生の社会学』、井上俊編、岩波書店、1996年
- 上山安敏／牟田和男編、『魔女狩りと悪魔学』、人文書院、1997年
- 梅内幸信、「「ファンタジー文学」に関する定義づけの試み」、藝文研究、第91巻第2号、2006年
- 太田耕軌、「「ハリー・ポッター」に見る偏見と差別」、『天理大学人権問題研究室紀要』、第9号、2006年
- 川原有加 「『旅の仲間』に見る色彩表現の機能と効果：人物描写の場合」、『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』、第10号、2009年
- 神原文子、「重複差別：被差別部落の子づれシングル女性の場合」、『現代社会研究』、創刊号、2015年
- 小阪知弘、「スペイン映画『靴に恋して』（2002）における衣服の意味作用」、『関西外国語大学研究論集』、第93号、2011年
- 坂田薫子、「ハリー・ポッターのイギリス(1)：『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における人種問題」、『日本女子大学英米文学研究』、第49号、2014年
- 坂田薫子、「ハリー・ポッターのイギリス(2)：『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」、『日本女子大学英米文学研究』、第50号、2015年
- 坂田薫子、「ハリー・ポッターのイギリス(3)、『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会のジェンダー観」、『日本女子大学紀要』、第65号、2015年
- 沢辺裕子、「鏡のなかのイメージたち：ハリー・ポッターに投げられた多作品の影」、『北海道武蔵女子短期大学紀要』、第41号、2009年
- 高橋準、「ファンタジーにおける〈母〉と女性のセクシュアリティ —ポピュラー

- 文化のジェンダー分析・3』、『行政社会論集』、第22巻第2号、2009年
- 西村鞍子、「江戸時代における衣服規制：変遷の概要と性格」、『家政学雑誌』、第31号、1980年
- 河慧柱、『ハリー・ポッター』シリーズにおけるジェンダー役割と不平等、日本大学大学院(修士論文)、2018年
- 濱田勝宏、「服装社会学と社会学(2)」、『文化女子大学紀要』、服装学・造形学研究、第40号、2009年
- 原純助・盛田和夫、『社会階層』、東京大学出版会、1999年
- 原田一美、「ヒムラーのアーリア人種観とその帰結」、『パブリック・ヒストリー』、第2号、2005年
- 松本侑壬子、『シネマ女性学』、論創社、2000年
- 山上浩嗣、「ラ・ボエシ『自発的隷従論』における「友愛」の諸相」、『文学篇』、第47号、待兼山論叢、2013年
- 渡邊駿、「現代における君主制とそのグローバルな類型化をめぐる政治学的考察：アラブ君主制国家群とその系譜的正統性の解析へ向けて」、『イスラーム世界研究』、第11巻、2018年
- イーディー、ジョー 『セクシュアリティ基本用語事典』、金城克哉訳、明石書店、2006年
- コーエン、モートン.N. 『ルイス・キャロル伝(上)』、安達まみ・佐藤容子・三村明訳、河出書房新社、1999年
- チャウ、エステル・アンリン 「人種／エスニシティ、階級、およびジェンダー：アメリカにおける理論と研究の発展」、『ジェンダー研究』、3号、ホーン・川嶋珪子訳、2000年(Chow, Esther Ngan-ling. Race/Ethnicity, Class, and Gender: Development of Theory and Research in the U.S.)
- トドロフ、ツヴェタン 『幻想文学論序説』、三好郁朗訳、創元ライブラリ、1999年(Todorov, Tzvetan. *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1970)
- トールキン、J. R. R. 『妖精物語について』、猪熊葉子訳、評論社、2003年
- ファノン、フランツ 『地に呪われたる者』、鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、2015年(Fanon, Frantz. *Les damnés de la terre*, François Maspero, 1975)
- バトラー、ジュディス 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、1999年(Butler, Judith, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge, 1990)
- ブルデュー、ピエール 『ディスタシオン』Ⅰ、Ⅱ、石井洋二郎訳、藤原書店、1990年(Bourdieu, Pierre. *La distinction: Critique sociale du judgement*, Paris: Minuit, 1979)

モスカ、ガエターノ 『支配する階級』、志水速雄訳、ダイヤモンド社、1973年 (Mosca, Gaetano. *The Ruling Class : Elementi di Scienza Politica*, New York: McGraw-Hill Book Company, 1939)

ルイス、C. S. 『四つの愛』、佐柳文男訳、新教出版社、2011年 (Lewis, C.S. *The Four Loves*, Harcourt Brace Jovanovich. Inc.: New York, 1960)

A

- Adelia, Nadia. "Stereotyping and Othering of Non-White Characters in "Harry Potter" Movies." , *Kata Kita*, 7(1), 2019.
- Alston, Ann. *The Family in English Children's Literature*. New York: Routledge, 2008.
- Amariglio, Jack, Callari, Antonio, & Cullenberg, Stephen. "Analytical Marxism: a critical overview." , *Review of Social Economy*, 47(4), 1989.
- Anatol, Giselle Liza. "The Fallen Empire: Exploring Ethnic Otherness in the World of Harry Potter." , *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003.
- Avery, Gillian. "The family story." , *International Companion Encyclopedia of Children's Literature*, 2nd Ed. Peter Hunt, Abingdon: Routledge, 2004.

B

- Baker, Dallas John. "Writing back to Tolkien: gender, sexuality and race in high fantasy." , *Recovering history through fact and fiction: forgotten lives*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle Upon Tyne, United Kingdom, 2017.
- Beauvoir, Simone de. *The Second Sex*, Trans. H. M. Parshley, New York: Knopf, 1953.
- Barratt, Bethany. *The Politics of Harry Potter*, New York: Palgrave Macmillan, 2012.
- Berndt, Katrin. "Hermione Granger, or, A Vindicatino of the Rights of Girl." , *Heroism in the Harry Potter Series*, Ed. Katrin Berndt and Lena Steveker, New York: Routledge, 2016.
- Black, Sharon. "The Magic of Harry Potter: Symbols and Heroes of Fantasy." , *Children's Literature in Education*, 34(3), 2003.
- Blake, Andrew. *The Irresistible Rise of Harry Potter*, London: Verso, 2002.
- Bhatia, Shyam. *The Lord of the Rings rooted in racism*, Rediff India Abroad, 2003.
- Bloom, Harold. "Can 35Million Book buyers Be young? yes" , *Wall Street Journal*, 2000.
- Bourdieu, Pierre. "The forms of capital." , *Cultural Theory: An anthology*, Eds. Szeman, & Kaposy, Greenwood Press, 1986.
- Bradley, Marion Zimmer. "Men, Halflings and Hero Worship." , *Tolkien and the Critics*, Ed. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbardo, Indiana: University of Notre Dame Press, 1968.

- Brennan-Croft, J., & L.A. Donovan. *Perilous and Fair: Women in the Works and Life of J.R.R Tolkien*. Altadena, CA: Mythopoeic Press, 2015.
- Brooks, Terry. *The Writer's Complete Fantasy Reference*, Cincinnati: Writer's Digest Books. 2001.
- Brownell, A., Fernandez, C., Jeffries, M & MacLeod, L., "A Critical Marxist Analysis of Harry Potter." , *The mirror of Erised: seeing a better world through Harry Potter and critical theory*, University of New Brunswick, 2017.
- Burns, Marjorie. "King and Hobbit: The Exalted and Lowly in Tolkien's Created Worlds" . *The Lord of the Rings 1954-2004*. Eds. Wayne G. Hammond & Christina Scull, Milwaukee WI: Marquette University Press, 2006.
- Butler, J., *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of 'Sex'* , New York: Routledge, 1993.
- Butler, J., *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, NY and London: Routledge, 1990.

C

- Callinicos, A., *The revolutionary ideas of Karl Marx*, Chicago: Haymarket Books, 2011.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*, Bollingen, 1972.
- Carey, Brycchan. "Hermione and the House-Elves: The Literary and Historical Contexts of J. K. Rowling's Antislavery Campaign." , *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol. Westport: Praeger, 2003.
- Carpenter, Humphrey., *J. R. R. Tolkien: A Biography*, Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 2000.
- Cejka, M. A., & Eagly, A. H., "Gender-stereotypic images of occupations correspond to the sex segregation of employment." , *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1999.
- Chance, Jane. *The Lord of the Rings: The Mythology of Power*, New York: Twayne, 1992.
- Chance, Jane. *Tolkien's Art: A Mythology for England*, Revised Edition Kentucky UP, 2001.
- Chancer, John. *The Lord of the Rings: The Mythology of Power*, Kentucky: University Press of Kentucky, 2001.
- Chaudhuri, Shohini. *Feminist Film Theorists: Laura Mulvey, Kaja Silverman, Teresa de Lauretis, Barbara Creed*, NY : Routledge, 2006.
- Cherland, Meredith. "Harry's Girls: Harry Potter and the Discourse of Gender." , *Journal of Adolescent & Adult Literacy* 52(4), 2008.

- Chism, Christine. "Racism, Charges of." , *J. R. R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*, Ed. Michael D. C. Drout, Routledge, 2007.
- Cooper, H. , *The English Romance in Time: Transforming Motifs from Geoffrey of Monmouth to the Death of Shakespeare*, London: Oxford University Press, 2004.
- Colbert, David. *The Magical Worlds of Harry Potter: A Treasury of Myths, Legends and Fascinating Facts*, Toronto: McArthur and Company, 2001.
- Cordova, Melanie J., "Because I'm a Girl, I Suppose!": Gender Lines and Narrative Perspective in Harry Potter." , *Mythlore: A Journal of J. R. R. Tolkien, C. S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 33(2), 2015.
- Craig, David. M., "'Queer lodgings' : gender and sexuality in The Lord of the Rings." , *Mallorn*, 38, 2001.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K., "Relational aggression, gender, and social- psychological adjustment." , *Child Development*, 66, 1995.
- Crocker, Holy A., "Masculinity." , *Reading The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien' s Classic*. Ed. Robert Eaglestone, London: Continuum, 2005.
- Curry, Patrick. *Defending Middle-earth: Tolkien, Myth, and Modernity*, New York: St. Martins, 1997.

D

- Dardenne, B., Dumont, M., & Bollier, T., "Insidious dangers of benevolent sexism: Consequences for women' s performance." *Journal of Personality and Social Psychology*, 93(5), 2007.
- Dawson, Deidre A., "Review-Essay: The Ring Goes Ever On." , *Tolkien Studies: An Annual Scholarly Review*, 8, West Virginia UP, 2012.
- Day, David. *Characters from Tolkien: A Bestiary*, London, Chancellor Press, 2001.
- Denny, Kathleen E. "Gender in Context, Content, and Approach: Comparing Gender Messages in Girl Scout and Boy Scout Handbooks." , *Gender & Society*, 25(1), 2011.
- Doyle, Christine. "Contemporary Hauntings." , *Children' s Literature*, 36(0), 2008.
- Dresang, E. T., "Hermione Granger and the Heritage of Gender" , *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, University of Missouri Press, Columbia, 2004.

Drout, Michael D. C., *J. R. R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*, Routledge, 2013.

E

Etaugh, Claire A., & Bridges, Judith S. *Women's Lives: A Psychological Exploration*, Routledge: New York, 2006.

Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*, London: Continuum, 2002.

Elster, Charles. "The Seeker of Secrets: Images of Learning, Knowing, and Schooling." , *Harry Potter's World: Multidisciplinary Critical Perspectives*, Ed. Elizabeth E. Heilman, New York: RoutledgeFalmer, 2003.

England, D. E., Descartes, L., & Collier-Meek, M. A. Gender role portrayal and the Disney Princesses. *Sex Roles: A Journal of Research*, 64(7-8), 2011.

Enright, Nancy. "Tolkien's Females and the Defining of Power." , *Renascence: Essays on Values in Literature*, 59(2), 2007.

Evans, J., "The Anthropology of Arda: Creation, Theology, and the Race of Men." , *Tolkien the Medievalist*, Ed. Jane Chance, New York: Routledge, 2003.

F

Fanon, Frantz. *Black Skin, White Masks*, Trans. Charles Lam Markmann, London: Pluto, 1986.

Farda, Shalih Dzakiyyah. "Cultural Hegemony in J. K. Rowling's Harry Potter Series." , *Vivid: Journal of Language and Literature*, 7(2), 2018.

Fire, Ernelle. "Wise warriors in Tolkien, Lewis, and Rowling." , *Mythlore: A Journal of J. R. R. Tolkien, C. S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 25(1), 2006.

Fimi, Dimitra. *The Creative Uses of Scholarly Knowledge in the Writing of J. R. R. Tolkien*, Cardiff School of History and Archaeology, Cardiff University, 2005.

Flieger, Verlyn. "Frodo and Aragorn: The Concept of the Hero." , *Tolkien: New Critical Perspectives*, Ed. Neil D. Isaacs and Rose A. Zimbaro, Kentucky UP, 1981.

Flieger, Verlyn. "Frodo and Aragorn: The Concept of the Hero" . *Understanding The Lord of the Rings: The Best of Tolkien Criticism*. Boston: Houghton Mifflin, 2004.

Fraser, Lindsey. *Conversations with J. K. Rowling*. New York: Scholastic, 2000.

Fredrick, Candice, & Sam McBride. *Women Among the Inklings: Gender, C.S. Lewis, J. R. R. Tolkien, and Charles Williams*, Westport, CT: Greenwood, 2001.

Fristedt, G., *Strong Girls Now and Then: A comparison between strong girls in classic and modern literature such as The Secret Garden and Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Master's Thesis, Department of Humanities and Social Sciences, English Kristianstad University, 2005.

Fussell, Paul. *Class: A guide through the American status systems*, New York, NC: Summit Books, 1983.

G

Gamble, Nikki and Yates Sally. *Exploring Children's Literature*, Los Angeles: SAGE, 2008.

Galway, Elizabeth A., "Reminders of rugby in the halls of Hogwarts: The Insidious influence of the School Story Genre on the Works of J.K. Rowling." , *Children's Literature Association Quarterly*, 37(1), 2012.

Gallardo-C., Ximena, & C. Jason Smith. "Cinderfella: J. K. Rowling's Wily Web of Gender." , *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol, London: Praeger, 2003.

Giddings, Robert, & Elizabeth Holland., *J. R. R. Tolkien: The Shores of Middle-earth*, London: Junction Books, 1981.

Gierzynski, Anthony. *Harry Potter and the Millennials: Research Methods and the Politics of the Muggle Generation*, Baltimore: JHU Press, 2013.

Gladstein, Mimi R., "Feminism and Equal Opportunity: Hermione and the Women of Hogwarts," , *Harry Potter and Philosophy : If Aristotle Ran Hogwarts*, Ed. David Baggett and Shawn E. Klein, Chicago : Open Court, 2004.

Green, William H., "Bilbo's Adventures in Wilderland" ,*New York: Bloom's Literary Criticism*, Ed. Harold Bloom, 2008.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L.. Measuring individual difference in implicit cognition: The Implicit Association Test, *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1998.

Gulati-Partee, Gita & Maggie Potapchuk. "Paying Attention to White Culture and Privilege: A Missing Link to Advancing Racial Equity." *The Foundation Review*, 6(1), 2014.

H

- Hamilton, O., Jardine, C., Mangusso G., & Turner, A., “The Harry Potter Hierarchy: Critical Race Theory and Harry Potter.” , *The mirror of Erised: seeing a better world through Harry Potter and critical theory*. Ed. Sarah L. King & Nathan J. A. Thompson, Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0), 2017.
- Hale III, W. W., Vander Valk, I., Akse, J., & Meeus, W., “The Interplay of early adolescents’ depressive symptoms, aggression and perceived parental rejection: A four-year community study.” , *Journal of Youth and Adolescence*, 37(8), 2008.
- Hatcher, Melissa McCrory. “Finding Woman’s Role in The Lord of the Rings.” , *Mythlore*, 25(3), 2007.
- Hayward, Susan. *Cinema Studies: The Key Concepts*, Taylor & Francis Ltd. 2013.
- Heilman, Elizabeth E., “Blue Wizards and Pink Witches: Representations of Gender Identity and Power.” , *Harry Potter’s World: Multi-disciplinary Critical Perspectives*. Ed. Elizabeth E. Heilman, New York: RoutledgeFalmer, 2003.
- Heilman, Elizabeth E., & Trevor Donaldson. “From Sexist to (sort-of) Feminist: Representations of Gender in the Harry Potter Series” , *Critical Perspectives on Harry Potter*. Ed. Elizabeth E Heilman, Abingdon: Routledge, 2009.
- Higham, Steve. “Ideology in The Lord of the Rings: a Marxist Analysis.” , Doctoral thesis, University of Sunderland, 2012.
- Hinger, Sophie. “Tolkien and the Viking Heritage” , University of Vienna, Master’ s Thesis, 2014.
- Hogset, Oystein. “The Adaptation of The Lord of the Rings A Critical Comment.” , *Translating Tolkien: Text and Film*. Ed. Thomas Honegger, Walking Tree Publishers, 2004.
- Horne, Jackie C., “Harry and the Other: Answering the Race Question in J. K. Rowling’ s Harry Potter.” , *The Lion and the Unicorn*, 34(1), 2010.
- Hume, Kathryn. *Fantasy & Mimesis: Responses to Reality in Westem Literature*, New York& london: Methuen, 1984.
- Hunt, P., & Lenz, M. *Alternative Worlds in Fantasy Fiction*, London and New York: Continuum, 2001.
- Hunter, M. L., “The Persistent Problem of Colorism: Skin Tone, Status, and Inequality.” , *Sociology Compass*, 1(1), 2007.
- Huttar, Charles A., “Hell and the City: Tolkien and the Traditions of Western Literature.” , *Lobdell*, 1975.

J

Jha, M. R., *Global Beauty Industry: Colorism, Racism, and the National Body*. NY: Routledge, 2016.

K

Kaufman, Roger. "Heroes Who Learn to Love their Monsters: How Fantasy Film Characters Can Inspire the Journey of Individuation for Gay and Lesbian Clients in Psychotherapy." , *Using Superheroes in Counseling and Play Therapy*. Ed. Lawrence Rubin, New York: Springer, 2007.

Keith, V. M., & Carla R. M., "Histories of Colorism and Implications for Education." , *Theory into Practice*, 55, 2016.

Kocsis, Valerie. "Greedy Like Gollum: Middle-earth According to Marx." , *Aletheia-The Alpha Chi Journal of Undergraduate Research*, 2(1), 2017.

Kohatsu, E. L., Dulay, M., Lam, C., Concepcion, W., Perez, P., Lopez, C., & Euler, J., "Using racial identity theory to explore racial mistrust and interracial contact among Asian americans." , *Journal of Counseling & Development*, 78(3), 2000.

Kleinman, Scott., "Service." , *The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien's Trilogy*, Ed. Robert Eaglestone, New York: Continuum, 2005.

L

Lakowski, Romuald. "The Fall and Repentance of Galadriel." , *Mythlore*, 2007.

Landa, Ishay. "Slaves of the Ring: Tolkien's Political Unconscious." , *Historical Materialism*, 10(4), 2002.

Łaszkiwicz, Weronika. "J.R.R. Tolkien's Portrayal of Femininity and Its Transformations in Subsequent Adaptations." , *A Journal of English Studies*, 2015.

Lehman, Peter, & Luhr, William. *Thinking About Movies: Watching, Questioning, Enjoying*, 2nd Ed, Malden, MA: Blackwell Publishing, 2003.

Leonard, Rebecca, & Locke, Don C. "Communication stereotypes: Is interracial communication possible?" , *Journal of Black Studies*, 23(3), 1993.

Lem, Ellen, & Holly Hassel. "'Killer' Katniss and 'Lover Boy' Peeta: Suzanne Collins's Defiance of Gender-Genred Reading" , *Of Bread, Blood, and The Hunger Games: Critical Essays on the Suzanne Collins Trilogy*, Eds. Pharr, Mary F., & Leisa A. Clark, North Carolina: McFarland & Company, Inc., 2012.

- Lento-Zwolinski, J., "College students' self-report of psycho-social factors in reactive forms of relational and physical aggression." , *Journal of Social and Personal Relationship*, 24(3), 2007.
- Lewis, Alex, & Elizabeth Currie. *The Uncharted Realms of Tolkien: A Critical Study of Text, Context and Subtext in the Works of J. R. R. Tolkien*, Oswestry: Medea Publishing, 2002.
- Limbach, Gwendolyn. "Ginny Weasley, Girl Next-Door?" , *Hog's Head Conversations: Essays on Harry Potter*. Travis Prinzi, Ed. Allentown, PA: Zossima Press, 2009.
- Lin, Ming-Hsun. "Fitting the Glass Slipper: A Comparative Study of the Princess' s Role in the Harry Potter Novels and Films." , Éds. Greenhill, P., & Matrix, S. E., *Fairy tale films: Visions of ambiguity*. Logan, Utah: Utah State University Press, 2010.
- Luling, Virginia. "An Anthropologist in Middle-earth." , *Proceedings of the J.R.R. Tolkien Centenary Conference*, Ed. Reynolds and GoodKnight, Altadena: The Mythopoeic Press, 1995.
- Lurie, Alison. "Witches and Fairies: Fitzgerald to Updike." , *New York Review of Books*, 17(9), 1971.
- Lyubansky, Mikhail. "A Black Boy Even Taller than Ron: Racial dynamics in Harry Potter." , *The Psychology of Harry Potter: An Unauthorized Examination of the Boy Who Lived*, Ed. Neil Mulholland, Dallas: BenBella Books, 2006.

M

- Manlove, Colin. N., *Modern Fantasy: Five Studies*, Cambridge University Press, 1975.
- Martin, Jennifer Grek. "Two Roads to Middle Earth: Comparing the Visualization of J. R. R. Tolkien' s The Lord of the Rings and Peter Jackson' s The Lord of the Rings Cinematic Trilogy." , *Dalhousie Journal of Interdisciplinary Management*, 6, 2010.
- McFadden, Brian. "Fear of Difference, Fear of Death: The Sigelwara, Tolkien' s Swertings, and Racial Difference." , *Tolkien' s Modern Middle Ages*. Ed. Jane Chance, New Middle Ages Series. New York and London: Palgrave Macmillan, 2005.
- Mendelsohn, Farah. "Crowning the King: Harry Potter and the Construction of Authority." , *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, Ed. Lana A. Whited. Columbia and London: U of Missouri P, 2002.

- Messerschmidt, James W., *Nine Lives: Adolescent Masculinities, the Body, and Violence*, Westview Press, 2000.
- Michel, L., “Politically Incorrect: Tolkien, Women and Feminism.” , *Tolkien and Modernity*, 1, Ed. Frank Weinreich and Thomas Honegger, Zollikofen, Switzerland: Walking Tree, 2006.
- Savage, M., Devine, F., Cunningham, N., Taylor, M., Li, Y., Hjellbrekke, J., Le Roux, B., Friedman, S., & Miles. A., “A New Model of Social Class? Findings from the BBC’ s Great British Class Survey Experiment.” , *Sociology*, 47(2), p.234, 2013.
- Moorman, Charles. “The Shire, Mordor, and Minas Tirith” , *Tolkien and the Critics. Essays on J.R.R. Tolkien’ s The Lord of the Rings*, 1968. Eds. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbardo, Notre Dame and London: Notre Dame University Press, 1976.
- Mulvey, L., “Visual pleasure and narrative cinema.” , *Screen*, 16(3), 1975.

N

- Neumann, I. B., “Pop Goes Religion: Harry Potter meets Clifford Geertz” , *European Journal of Cultural Studies*, 9(1), 2006.
- Neville, Jennifer. “Women.” , *Reading The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien’ s Classic*. Ed. Robert Eaglestone, London: Continuum, 2005.
- Nikita & Chitra Agarwal. *Friends and foes of Harry Potter : names decoded*, Dallas, TX : Texas Word Publishing : Outskirts Press, 2005.
- Nikolajeva, Maria. *The Magic Code : The Use of Magical Patterns in Fantasy for Children*, Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1988.

O

- Ostry, Elaine. “Accepting Mudbloods: The Ambivalent Social Vision of J.K. Rowling’ s Fairy Tales.” , *Reading Harry Potter: Critical Essays*, Ed. Giselle Liza Anatol, Westport: Praeger, 2003.
- Oziewicz, Marek. “Peter Jackson’ s The Hobbit: A Beautiful Disaster” , *Journal of the Fantastic in the Arts*, 27(2), 2016.

P

- Paoletti, J. B., *Pink and blue: Telling the girls from the boys in America*, Bloomington: Indiana University Press, 2012.
- Park, J., “Class and Socioeconomic Identity in Harry Potter’ s England” , *Reading Harry Potter: Critical Essays*. Ed. Anatol, G.L., Westport: Praeger Publishers, 2003.

- Parrott, W.G., "The emotional experiences of envy and jealousy." , *Emotions in Social psychology*, Ed. G. W. Parrott, Philadelphia: Psychology Press, 2001.
- Partridge, Brenda. "No Sex Please - We' re Hobbits: The Construction of Female Sexuality of the Rings." *J. R. R. Tolkien: This Far Land*. Ed. Robert Giddings. London: Vision Press Limited, 1983.
- Perkins, Agnes, & Helen Hill. "The Corruption of Power." , *A Tolkien Compass*. Ed. Jared Lobdell, Chicago: Open Court, 2003.
- Porter, Lynnette R., *Unsung Heroes of the Lord of the Rings: From the Page to the Screen*, Praeger Publishers, 2005.
- Potts, Leanne. "'Lord of the Rings' Unleashes Debate on Racism" , *Albuquerque Journal*, 26, 2003.
- Poveda, Jaume Albero. "The imagery in J.R.R. Tolkien's Fantasy of middle-earth." , Doctoral dissertation, University of Alicante. 2004.
- Prasida. P., "Racism in Harry Potter Series." , *International Journal of English and Literature (IJEL)*, 3(5), 2013.
- Pretorius, David. "Binary Issues and Feminist Issues in LOTR." , *Mallorn*, 40, 2002.
- Pugh, Tison, & David Wallace. "Heteronormative Heroism and Queering the School Story in J.K. Rowling's Harry Potter Series." , *Children's Literature Association Quarterly*, 31(3), 2006.

R

- Rateliff, John D., "The Hobbit: A Turning Point." , *A Companion to J. R. R. Tolkien*. Ed. Stuart D. Lee., West Sussex: Wiley Blackwell, 2014.
- Reagin, Nancy R., *Harry Potter and History*, Hoboken: John Wiley & Sons, Inc, 2011.
- Rearick, A., "Why Is the Only Good Orc a Dead Orc? The Dark Face of Racism Examined in Tolkien's World." , *Modern Fiction Studies*, 50, 2004.
- Reynolds, Kimberley. *Children's Literature: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Richmond, Donald P., "Tolkien's Marian Vision of Middle-Earth." *Mallorn*, 40, 2002.
- Rivkin, J., & Ryan, Michael. *Literary Theory: An Anthology*, 2nd Edition. Blackwell Publishing Ltd, 2004.
- Robinson, S., Anderson, E., & White, A., "The Bromance: Undergraduate Male Friendships and the Expansion of Contemporary Homosocial Boundaries." , *Sex Roles*, 2017.

Rogers, H., “No Triumph Without Loss: Problems of Intercultural Marriage in Tolkien’s Works.” , *Tolkien Studies*, 10, 2013.

Ruíz, B. D., “Re-reading The Lord of the Rings: Masculinities in J.R.R. Tolkien’s Novel and Peter Jackson’s Film Adaptation.” , Doctorial Dissertation, University of Granada, 2015.

S

Saxey, Esther. “Homoeroticism.” , *The Lord of the Rings: New Writings on Tolkien’s Trilogy*, Ed. Robert Eaglestone, New York: Continuum, 2005.

Schoefer, Christine. “Harry Potter’s girl trouble.” , *Salon*, 13, 2000.

Shafer, Philip M. “Transfiguration Maxima! : Harry Potter and the Complexities of Filmic Adaptation.” , Doctorial Dissertation, Middle Tennessee State University, 2016.

Shakin, M., Shakin, D., & Sternglanz, S., “Infantclothing: Sex labeling for strangers.” , *Sex Roles*, 1985.

Shippey, T. A., “Lit. and Lang.” , *Modern Critical Views: J. R. R. Tolkien*, ed. Harold Bloom, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2000.

Simonson, M., “Epic and Romance in The Lord Of The Rings.” , *El Futuro del Pasado*, 7, 2016.

Simmel, G., “The Stranger.” , *Georg Simmel: On Individuality and Social Forms*, Ed. Levine, D. N., Chicago, IL: University of Chicago Press, 1971.

Singer, P., *Animal Liberation: Towards an End to Man’s Inhumanity to Animals*, London: Paladin Granada Publishing, 1975.

Smith, J., & Matthews, J. C., *The Lord of the Rings. The Films, the Books, the Radio Series*, London: Virgin Books, 2004.

Smith, Sean. *J. K. Rowling. A Biography*, London: Michael O’ Mara Books Limited, 2001.

Smith, Stacy L., Marc Choueiti, Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel Choi. Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018, *Annenberg Inclusion Initiative*, 2019.

Smol, Anna. “Male Friendship in The Lord of the Rings: Medievalism the First World War, and Contemporary Rewritings” , *The Ring Goes Ever On: Proceedings of the Tolkien 2005 Conference: 50 Years of The Lord of the Rings*, Ed. Sarah Wells, Coventry, UK: The Tolkien Society, 2008.

- Spacks, Patricia Meyer. "Power and Meaning in The Lord of the Rings." , *Tolkien and the Critics: Essays on J.R.R. Tolkien's The Lord of the Rings*, Ed. Neil D. Isaacs & Rose A. Zimbardo. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1968.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J., "The Personal Attributes Questionnaire: A measure of sex role stereotypes and masculinity-femininity." *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 43, 1974.
- Stephens, John. *Language and Ideology in Children's Fiction*, Essex, UK: Longman, 1992.
- Stephens, John. "Gender, genre and children's literature." , *Signal*, 79, 1996.
- Sunderland, Jane, & Mark McGlashan. "Heteronormativity in EFL textbooks and In two genres of children's literature (Harry Potter and same sex parent family picture books)" , *Language Issues*, 26(2), 2015.

T

- Thiel, Elizabeth. *The Fantasy of Family: Nineteenth-Century Children's Literature and the Myth of the Domestic Ideal*. New York: Routledge, 2008.
- Tolkien, J.R.R., *The Monsters and Critics and Other Essays*, Ed. Christopher Tolkien, London: Harper Collins Publishers, 1997.
- Tyson, Lois. *Critical Theory Today: A User-Friendly Guide*, London: Garland Publishing, Inc, 1999.

V

- Vaccaro, Christopher. "Homosexuality." , *J.R.R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical Assessment*. Ed. Michael D.C. Drout, New York: Routledge, 2007.
- Valente, C., "Translating Tolkien's epic: Peter Jackson's Lord of the Rings." *Intercollegiate Review*, 40(1), 2004.
- Vezzali, L., Stathi, S., Giovannini, D., Capozza, D., & Trifiletti, E., "The greatest magic of Harry Potter: Reducing prejudice." , *Journal of Applied Social Psychology*, 45, 2015.
- Viars, Karen, & Cait Coker. "Constructing Lothiriel: Rewriting and Rescuing the Women of Middle-earth from the Margins." *Mythlore*, 33(2), 2015.

W

- Wallace, David L., & Tison Pugh. "Teaching English in the World: Playing with Critical Theory in J. K. Rowling's Harry Potter Series." *The English Journal*, 96(3), 2007.
- Wannamaker, A., "Men in Cloaks and High-heeled Boots, Men Wielding Pink Umbrellas: Witchy Masculinities in the Harry Potter Novels." , *The Looking Glass: New Perspectives on Children's Literature*, 10(1), 2006.
- Weber, Max. "Class, Status, Party" , *Max Weber: Essays in Sociology*. Oxford University Press, Trans. H. H. Gerth & C. Wright Mills, 1946, pp.180-195. Ed. Grusky D, *Social Stratification*, Westview, 1994.
- Weidner, Brian N., "Middle-earth: The Real World of J.R.R. Tolkien." , *Mythlore: A Journal of J.R.R. Tolkien, C.S. Lewis, Charles Williams, and Mythopoeic Literature*, 23(4), 2002.
- West, Richard C., "Real-world myth in a secondary world: Mythological aspects in the story of Beren and Lúthien." , *Tolkien the Medievalist*, Ed. Jane Chance, University Press of Kentucky, 2001.
- Winters, Sarah Fiona. "Bubble-Wrapped Children and Safe Books for Boys: The Politics of Parenting in Harry Potter." *Children's Literature*, 39, 2011.
- Wolfgram, Susan. "Gender Informed Parenting: A Review of the film Harry Potter and the Sorcerer's Stone: What Not Hermione Granger?." , *Journal of feminist Family Therapy*, 14(3), 2002.
- Wolosky, S., "Harry Potter's ethical paradigms: Augustine, Kant, and feminist moral theory." , *Children's Literature*, Hollins University, 2012.
- Woloshyn V., Taber, N., & Lane, L. Discourses of Masculinity and Femininity in The Hunger Games: "Scarred," "Bloody," and "Stunning". *International Journal of Social Science Studies*. 1(1), 2013.
- Wrangham, Richard. *Catching Fire: How Cooking Made Us Human*, New York: Basic Books, 2009.

Y

- Young, Helen. "Diversity and Difference: Cosmopolitanism and The Lord of the Rings." , *Journal of the Fantastic in the Arts*, 21(3), 2010.

Z

Zahorski, Kenneth J., & Robert H. Boyer. "The Secondary Worlds of High Fantasy." , *The Aesthetics of Fantasy Literature and Art*, Ed. Robert C. Schlobin, Indiana and Brighton: University of Notre Dame Press and The Harvester Press, 1982.

Zipes, Jack. *Sticks and Stones : The Troublesome Success of Children's Literature from Slovenly Peter to Harry Potter*, London: Routledge, 2001.

Žižek, S., *The Plague of Fantasies*. London: Verso, 1997.

その他

日本経済新聞、「トランプ氏「人種差別」発言止まらず白人票に固執」、2019年7月30日

(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ047955620Q9A730C1FF8000>, 2021年1月25日閲覧)

CNN、「黒人の8割、トランプ氏は「人種差別主義者」米世論調査」、2020年1月19日

(<https://www.cnn.co.jp/usa/35148181.html>, 2021年1月25日閲覧)

Crossley, Laura. Multicultural Middle-earth: Constructing “Home” and the Post-colonial Imaginary in Peter Jackson’s The Lord of the Rings, Film International, June. 30, 2014.

(<http://filmint.nu/multicultural-middle-earth-constructing-home-and-the-post-colonial-imaginary-in-peter-jacksons-the-lord-of-the-rings/>, 2021年1月23日閲覧)

Gibbs, Nancy. Runners-Up: J. K. Rowling, Time Magazine, December 19, 2007.

(http://content.time.com/time/specials/2007/personoftheyear/article/0,28804,1690753_1695388_1695436,00.html, /2021年1月25日閲覧)

Gibson, D., Good, evil and Harry Potter: Boy wizard wins over some members of the Christian community, The Star-Ledger, November 15, 2001.

Hall, Allan. DNA tests reveal ‘Hitler was descended from the Jews and Africans he hated’, Daily Mail, August 24, 2010. (<https://www.dailymail.co.uk/news/article-1305414/Hitler-descended-Jews-Africans-DNA-tests-reveal.html>, 2021年1月27日閲覧)

IMDb(<https://www.imdb.com>)

Konigsberg, R.D., The Hobbit: Why Are There No Women in Tolkien’s World?, TIME, December 31, 2012.

(<https://ideas.time.com/2012/12/31/the-hobbit-why-are-there-no-women-in-tolkiens-world/>, 2021年1月25日閲覧)

Mariam, Simra. Daring To Be Dark: Fighting Against Colorism In South Asian Cultures, HuffPost, May 17, 2017.

(https://www.huffpost.com/entry/daring-to-be-dark-fighting-against-against-colorism-in-south_b_58d98c5fe4b0e6062d923024, 2021年1月25日閲覧)

Nusbacher, Aryk. J. R. R. Tolkien: Master of the Rings: The Definitive Guide to the World of the Rings, Dir. Stephen Grant, DVD, Good Times, 2002, 2021年1月25日閲覧)

Project Implicit(<https://implicit.harvard.edu>, 2021年1月25日閲覧)

Smith, Stacy L., Marc Choueiti, Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel Choi., Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018, Annenberg Inclusion Initiative, 2019, 2021年1月25日閱覽)

So, Jimmy. DNA Tests: Hitler Descended From Jews, Africans?, CBS News, October 25, 2010. (<https://www.cbsnews.com/news/dna-tests-hitler-descended-from-jews-africans/> 2021年1月27日閱覽)

The Hobbit: An Unexpected Journey, Cinema Review (<http://cinemareview.com>, 2021年1月25日閱覽)

The Wall Street Journal, Harry Potter vs. the Marxists, Jan. 31, 2001. (<https://www.wsj.com/articles/SB980891166507367013>, 2021年1月30日閱覽)